980.4-Ka81ウ
1200500760725

始

27. 9. 17

980.9
K481

露西亞文學研究

北京圖書館藏

片上伸著

露西亞
文學研究

東京高輪
第一書房
千九百二十八年

531-147

露西亞文學研究

第一編

ロシヤ文學批評の起源……一一
ロシヤ文學概論……八五
一、口碑の文學　二、中世の文學　三、中世思想の動搖
四、近世的啓蒙時代の文學　五、社會思想萌芽時代の文學
ロシヤ無產階級文學の發達……一八五

第二編

トルストイ記念の一夜……二一三
トルストイ傳……二二六
トルストイと革命……二五五
トルストイ教徒事件……二六二
トルストイと死の豫感……二八五
トルストイと自然生活者……二九三
トルストイの宗教的人生觀……三〇一
トルストイの家庭論……三二四
1 兩性の關係　2 結婚　3 家庭　4 子女の教育　5 婦人解放の問題
トルストイとその夫人……三四二
トルストイ著作解題……三六九

第三編

ドストイェフスキーに就いて……四四九
死人の家……四五二
虐げられし人々……四五七
ロシヤ精神の發露としてのボリシェビイズム……四六五
ロシヤ魂の神祕……四七七
現代ロシヤ文學の印象……四九四
① 現代文學の基調　2 個性中心の批評　3 詩壇の不安
未來派の一種……五一九
詩人ブロックのこと……五二四
革命前後に於けるロシヤ文學の主潮……五二七
北歐文學の原理……五三三
否定の文學……五四三

、平凡人の反抗……五五三
生命感の點火……五八〇
新時代の豫感……五八九
革命後のサヴェート文壇……六〇二

第一編

ロシヤ文學批評の起源

1

文學が主としてその發生醞釀の過程に即して考へられるとき、それは創造するもの自からのためであり自己の表現であるといふことは、今日では既に自明の理として認められてゐる。それと同じやうに、文學が既に成立せる一つの作品として、鑑賞味識の對象となつて、讀者の前に、言ひ換へればひろく社會公衆の前に提出せられるとき、その文學は、既にこれを創造するもの自からのためであるといふばかりに止まつてはゐられなくなる。即ちそこには文學對讀者、文學對社會公衆の關係が成立する、文學の社會的意義といはれるものの出じに外ならぬ——このことも亦、今日では既に自明の理として認められてゐる。勿論文學が、その發生醞釀の過程を經て、一個の構成せられたる作品として、今日弘く行はれてゐるやうな樣式と方法とによつて、讀者即ち社會公衆の前に提出せられるやうになるまでには、文學そのものに變遷發達のあつたことは言ふまでもないが、更にその背景環境乃至ある程度までの要素を形づくつてゐる一般文化の歷史の上にも、幾多の推移があつたのである。歌はれた歌謠が、直ちに最初から今日のやうな意味で讀者と名づくべきものを

有つてゐたのではない。今日吾々が事もなげに讀者と言つてゐるところの、文學の鑑賞者としての社會公衆が、今日の如き形と關係との下に成り立つまでには、國々の文學は、可なり長い間の複雜な準備の仕事をしなければならなかつたのである。この長い複雜な準備の經過は、多くの場合に於いてやはり一つの爭鬪の姿となつて現はれてゐる。思想上の衝突、頑冥な暗黑の力に對する知識の光りの、必死の抵抗もしくは開豁、それはいつでも息苦しいほどの逼迫せる爭鬪の形となつて繰り返されて來たのである。ロシヤの文學乃至一般文化の發達の上で、最も著しい思想上の爭鬪は、第一にピョートル一世の革新時代を中心として見ることが出來る（1。ブィビン『ロシヤ文學史』第三卷、第四章以下、殊に第六章、第八章。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』第四部、第六十八講、第六十九講參照）卽ち、文學が、これを創造するものの立ち場から、專らその發生醞釀の過程に卽して言はれるとき、それが主として創造するもの自からのためであり、自己表現であるといふ心理に於いては、今も昔も一貫して變らぬと言へるであらうが、しかしながら、その既に構成せられた文學の鑑賞、文學對讀者もしくは對社會公衆の關係には、幾多の變遷があり、その作品を受け入れる社會的條件、またはその態度の上には、幾多の推移があつたのである。而してまた、その方面の變遷推移が、やがて自己のために作るといふ文學創造の根本の心理の上にも、重要な刺激や影響を及ぼして來たのである。

文字が用ひられず、書くといふことを全く知らなかつた時代にも、文學（主として歌謠の類）は存立してゐた。個人の作者の固有名詞が全くその文學上の作品（主として歌謠の類）の上に認められず、少くとも今日ではとくに忘れられてしまつてゐるにも拘らず、やはりその古い歌謠の創作せられた當初に於いては、い

つか、どこかに、民族の群の中に天分の立ちまさつてゐた何等かの個人的歌謠作者（卽ち詩人）が生存してゐたに相違ないのである。「民謠の方面でも、後に生ずる技巧的の詩歌に於いてと同じやうに、やはり特に天分があつて、空想の力と言葉の豐富さとを所有してゐる個人的の詩人が働いてゐたのである。ただ、その歌謠が、それ自身の價値の力によつて、だんだん時を經るうちに共有普及せられ、その形を變へて行き、而して遂に民族的となるに至つたのである」（2。ブィビン『ロシヤ文學史』第三卷、第二章、七十七頁）かやうな忘れられてしまつた個人の原作者の周圍には、その歌謠に同感共鳴する多くの人々（社會公衆、後の時代に讀者となるべき關係の人々）がゐて、その歌謠をわれ自からの心の聲として口傳へに歌ひかはしたものであつたに相違ない。この時代の文學は、個人の作者を認める後の時代の文學に對比して、民族の間から生れた文學といふ風に考へられてゐる。今日普通に文學といへば、この書かれない口傳への文學ではなく、少くとも文字成立後の文學、殊に一般には印刷刊行によつて普及せられるやうになつて後の文學を意味するやうになつてゐる。ロシヤでは、文學を社會公衆に傳達する形、乃至その方法の上から、それ等の事情の變遷によつて、文學に凡そ三種の異なつた名稱を與へてゐる。文字のない、口傳への時代の浚個人的、民族的の文學を、口傳へといふ意味からウーストナヤ・スロウェースノスチ（3）もしくはウーストナヤ・リテラトゥーラ（4）といひ、民族的卽ち國語を同一にする民族の間から合成的に發生したものとしてナロードナヤ・スロウェースノスチ（5）とも言つてゐる。元來このスロウェースノスチといふ言葉は、ボルフェーリエフがその『ロシヤ文學史』第一部の序論の劈頭で說いてゐるやうに「言葉（スロート）の中に表現せられた國民の智力的作品の一切の綜合を普通にはひろくスロウェースノスチと稱する」（6）のであつて、最も廣い意味の文

Globo

學、卽ち民族的沒個人的口碑時代の文學をも、文字成立後の文學をも、更にまた印刷刊行の文學をも、それ等の凡てを含めた意味で用ひるのである。その他にもこの意味の用語例が一般に認められてゐる典據はいくらもある。多くの教科書風の文學史も亦隨つてこの例に準據してゐる。しかもまたその一方で、シポーフスキーの『ロシヤ文學史』第一部第一分冊に於いての如く、これを狹い意味、卽ち文字によらないで、ただ口から耳に傳へられる言葉のみによつて表現せられた文學といふ意味に用ひて、文字によるものと、更に進んで印刷刊行によるものとの、二つの進んだ階段に於ける文學と區別しようとしてゐる場合もある（7）。更に文字は成立しても、印刷刊行の事業が未だ起らず、筆寫によつて社會公衆の間に傳達流布せられてゐた時代の文學を、前者に對して特にビーシメンノスチ（8）もしくはビーシメンナヤ・スロウェースノスチ（9）乃至ビーシメンナヤ・リテラトゥーラ（10）といひ、最後に、文字を用ひ、且つ更に印刷刊行して流布せられるに至つた後の文學を、普通にただリテラトゥーラ（11）と言つてゐる。而してこの最初の口碑文學民族文學の時代に於いてすら、文學とその鑑賞者との關係、文學對社會公衆の關係は、既にある意味で存立してゐたのである。ただ、この時代の文學對鑑賞者乃至對社會公衆の關係は、今日のそれとは殆ど全く別の形で現はれてゐたのであらうし、またその關係の意識が、甚だ混沌としてゐて、それは殆ど全く無意識的に持續せられてゐたでもあらう。隨つてその關係は、いろいろの意味で今日のとは大分違つたものであつたと考へられる。民族時代の生活の一般に頗る單純であつたこと、その生活の樣式もその人生觀世界觀（宗教、慣習など）も、同一の言葉を以て結びついてゐる同一の民族の間では、殆ど全く一樣共通であつたこと、隨つてその生活內容乃至樣式の表現としての歌謠は、その一般共通の人生觀や世界觀や乃至は生活樣式が受け容れ

得るところの、もしくはその中から生れて來たところの思想感情の表現であつたこと――これ等は今日に於いては疑ふ餘地のない事實として認められてゐる。前にも述べたやうに、たとひ最初は何人か個人の詩人が歌謠の作者であつたにしても、――その點では近代の詩人が個々に存在するのと全く同一の事情の下にあつたと言へるにしても、近代の詩人が、多少に拘らず常に自己の個性特殊性を鮮明に表現して、その個性が自己の社會的環境と抵格することさへ決して稀ではないばかりか、それが寧ろ近代詩人の重要な價値と力とを成してさへゐるのに對して、口碑時代の詩人は、寧ろ自己の社會的環境の代辯者であり、その周圍と一致することによつてのみ存立し得たやうな事情の下にあつた。物の所有權といふことについて明確な觀念の發達してゐなかつたその當時に於いては、一人の口から歌ひ出された歌謠は、同時にこれを合唱し、歌ひ傳へるところの凡ての人々のものであつて、その凡ての人々に共通の思想感情を表現したもののみが、口から口へと多くの人々によつて傳へられて行つたに相違ない。かやうにして、この時代の歌謠は、一面日常生活の習慣、祝祭の儀式などと結びついて、民族の間の共通の生活興味の飾にかけられ、或はその間に自然にわすれられたり改作せられたりして行つた部分もありながら、それ等の自然の選擇と批評との經過を潛り拔けて行きつつ、ともかくも保存せられ、傳へられ、鑑賞せられて來たものと考へられる。この時代の文學が成立し、傳達普及せられ、保存せられて來たといふことのうちには、無數の民族の群の自のづからの批判と選擇とを辿ることが出來るであらう。たとひその批判や選擇の徑路や乃至それ等の現はれかたは、文學に對する今日の鑑賞者乃至社會公衆のそれ等とは甚だ異つてゐたにせよ、そこに何等かの形で、鑑賞者乃至社會公衆と見るべきものの力が、當時の文學の上に働きかけてゐたことは明らかである。言ひかへれば、文學の社會的意

義といふべきものの萠芽は、古代の文字なき時代の文學の間にも、既に存立してゐたのである。

しかしながら、その時代に於ける文學とその鑑賞者乃至社會公衆との關係は、これを文學そのものに對する批判選擇といふ點から觀て、對立的な形では存立しなかつたのである。當時の鑑賞者であり社會公衆であるところの民族多數の意志による選擇乃至批判は、それ自からとして、文學上の作品と離れては存立しなかつたのである。これ等の批判の經過は、凡てその時代の文學が成立し、普及せられ、保存せられて行く經過のうちに織り込まれ吸ひ込まれて行つたと見るべきであつた。即ち、それ等の批判の經過があつて、ともかくも當時の文學は成立し、普及せられ、保存せられるやうになつたのであるから、文學の社會的存立はこれ等の批判の經過のおかげによつて得られ、そこにはじめて文學の社會的意義が成り立つことになつたと言へるのである。しかしその重要な批判の力は、それ自身の固有の姿では存立しなかつた。言ひかへれば、この時代の文學の上にも、既に文學批評の萠芽的作用は加へられてゐたのであり、それあつてはじめて文學が成立もし、普及もせられ、且つまた保存もせられたのではあるが、それはやつと文學を文學として存立せしめるに至るまでの經過のうちに含まれてしまつて、獨立の文學批評の形では存立する事が出來なかつたのである。けれども、ここで重要なことは、その時代に獨立の文學批評が成立したか否かといふ點ではない。ここで重要なことは――獨立の文學批評が形を取つて成立するに至るよりも遙かに以前のその時代に於いてすら、文學成立の經過の上に、文學普及乃至保存の經過のうちに、更に言ひかへれば、文學の社會的意義を萠芽的になりとも成立せしめるための經過のうちに、文學批評として見るべきたぐひの力が、極めて重要な、無くてはならないものとして、一貫して働いてゐたといふ事實である。即ち、文學批評が獨立の形を取るに至ら

ないその以前に於いて、文學の成立と同時に、既にはやく文學批評の力の働きが開始せられてゐたといふ事實である。つまり文學が、その個々の作者の內部に於ける發生醞釀の經過を經て、一とたび社會公衆の前に提出せられると同時に、文學批評の力はその働きを初めたのである。文學が一個の社會的存在となり社會的事實となると共に、文學批評の力はその働きを初めたのである。而して文字のなかつた昔の時代に於いては、この文學批評の力は、文學が成立し普及せられ保存せられることのために、專ら働いて來た。而かもその文學批評の力は、一つの獨立した形をとらないで、上の目的を成就するために、暗默のうちに働いて來た。この事實は、文學批評の力の本質と內容とを考察する上にも、文學批評の發達の經過を辿る上にも、見のがしてはならないところのものである。この事實は、文學の社會的意義もしくは社會性を豫想して、はじめて文學批評の成立し得ることを裏書きする。文學對鑑賞者乃至對社會公衆の關係の成立を全く必要と感じないやうな場合、もしくはその成立を認められないやうな場合には、文學批評の力の發動はあり得ない。文學の成立普及保存のためだけにすら、その力を働かすに及ばなくなるからである。文學對社會公衆の關係の成立を、何等かの程度に於いて、何等かの意味に於いて認めようとし、また認めずにゐられないところから、文學批評の意識は發動して來る。文學批評の成立は、文學の鑑賞者乃至社會公衆の存立を意味し、批評家は即ちそれ自身文學に對する一種の社會公衆の位地に立つものだからである。嚴密な意味では、文學の社會的成立は同時に批評の成立であること、前から說いて來た如くであるが、批評を文學上の作品に對立する述作上の獨立の一樣式として考へる場合、文學對社會公衆の關係が形の上で成立したからと言つて、直ちに文學批評が起るものと決定するわけには行かない點もある。しかし、凡そ文學批評もしくはこれに類するもの、少くと

もそれの準備となるべきやうなものの起るためには、文學對社會公衆の關係が、今までよりも明確に、もしくは容易に、今までよりもひろく成立するといふことがなくてはならぬ。この文學の社會性が確立せられ、ひろげられ、何等かの關係で（否定と肯定との何れにもせよ）社會と文學と――鑑賞者としての公衆と文學との交渉が複雜に深刻になればなるほど、文學批評は獨立の述作樣式を取つて起つて來る。實に、文學批評は、文學の社會的成立、文學の社會性の表示から出立發生するものであると言つてよい。文學批評發達の經過は、この事實を明らかに語つてゐるのである。

隨つて文學の發達と、社會文化一般の發達と、この二つのものの交渉關係によつて、批評の發達の上にも、さまざまの經過が現はれて來ることになる。批評の發達に關する研究は、文學そのものの發達を離れては勿論成り立ち得ない。しかしながら、それと同時に、批評の發達に關する研究は、文學の社會的成立、乃至その社會性といふ一義を離れては尙更成り立ち得なくなる。勿論、文學が、その社會公衆との關係といふ一點に於いてのみ觀察評價せらるべきものでないことは明らかである。ロシヤ現代の批評家アイヘンワリドが、「文學の乾枯びた草の葉、書物市場に投げ出されてゐる、言葉を綴り合せた一山百文の職人仕事の細工もの の一切を、評價を離れて、平氣で、冷然として研究することも出來よう。そしてもしそれ等の中の何ものかが偶〻社會に强い影響を與へると、その美學上の比重がどんなに微少なものであらうとも、それは必ず學問によつて尊重せられねばならぬといふ、――しかしそれは一體どんな學問なのであらう。それは文學の歷史によつてではなく、社會の歷史によつてである。それは既に讀者の歷史であつて、作者の歷史ではないであらう。それは既に社會學であつて、文學ではないであらう。……そこで一線を劃する必要がある、一つは言

葉の影響であり、今一つは言葉そのものである」（12。アイヘンワリド『ロシヤ文學者のシルーエット』、第一分冊、一九一四年改訂第四版、序論、一〇頁）と言つてゐるのは、文學そのものをあまりにその社會的影響といふ方面から見過ぎて來た在來のロシヤ文學史家や批評家に對する激語であるが、文學批評と文學の社會性との交渉を考へる場合には、このアイヘンワリドの論難の意を混入せしめてはならぬのである。文學の批評は、文學とその讀者、鑑賞者、乃至批評家との關係交渉に於いてのみ、獨立して成り立つ。アイヘンワリドの言葉をかりて言へば、どこまでも文學が及ぼした「讀者」への「影響」であり、文學批評の研究は、文學の讀者といふ關係的資格に於ける「社會」への、文學の「强き影響」の研究でなければならない。この場合に於ける「讀者」は即ち批評家である。文學批評はたしかに一面に於いて「讀者の歷史」である。ただの社會人の歷史ではなくして、讀者の歷史である。文學が、讀者を所有し、讀者の文學に對する評價を所有し、もしくはその評價と交渉を生ずるやうになつて、そこにはじめて獨立の樣式としての文學批評は成り立つに至つたのである。文學批評の發達の研究は、この意味で、讀者としての社會公衆の成立狀態を考察する必要がある。要するに、文學批評が文學そのものを對象として、それから受けた讀者即ち批評家の「影響」を語るものであると言へるなら、文學批評の研究は、その「影響」が存在し得るに至つた事情を見のがしてはならないのである。それは即ち文學の社會性の成立の事情である。文學批評が、文學の社會性から發生してゐるものとして、ロシヤ批評の研究も亦出立しなければならぬ。

2

文字なき時代の文學批評が、文學の成立、普及、保存のためのかくれたる力として、暗默のうちにその働きを成して來たこと、隨つてその時代の文學批評は、獨立の形を取るに至らず、文學が成立し、普及せられ、且つ保存せられるとともに、その働きを終へ、既に成立し、普及せられ、保存せられた文學そのものの中に、その力を織り込めて來た形であること、要するに文字なき時代に於いては、後に一定の形ある文學批評となつて現はるべき力の發動はあつたのであるが、獨立した文學批評上の述作はあり得なかつたこと、――これ等は上に述べた如くである。文學批評が、一つの獨立した形をとり、文學種目中の一座位を占めて、特殊の述作として認められるやうになつたのは、專ら文字による印刷刊行の事業の起つてから後のことであると言はねばならぬ。このことは、文學批評が、前にも述べたやうに、文學の社會性を必至の條件として豫想するといふところから考へても、自然の順序であるとおもはれる。文學が容易に社會的に成立し、その普及保存が確實にせられるためには、口傳への文字なき時代から、筆寫時代を經て、簡便な印刷刊行の事業の起る時を待たなければならなかつたのである。印刷刊行のことが、必ずしも直ちに凡ての文學を容易に社會的に成立せしめ、普及せしめ、更に確實に保存せしめる最後の條件であるとは言へないであらう。しかしながら、口傳への時代や、筆寫の時代の不便と、さまざまの心づかひとを想像してみることによつて、――また更に

それ等の時代に於ける文學が、いかに良心ある選擇と批判とによるにしても、さまざまの避けがたい偶然の故障から、その社會的成立、普及乃至保存を妨げられ、遂には湮滅に歸してしまつたものさへ少なからぬであらうことを考へてみることによつて、印刷刊行の事業の起つて來たといふことが、文學の社會的成立と普及と保存とのために、如何に重要な事實であつたかは、何人にも容易に明らかにさとられるであらう。即ちかやうなわけで、印刷刊行の事業の起るに從つて、文學の社會的成立と普及保存との最初の條件が、比較的容易に（少くとも今までよりは）充たされるやうになつたのであるから、文學批評として現はるべき力は、これまでのやうに、文學の社會的成立と普及保存とのために專ら働くには及ばなくなつたとも言へるのである。即ち、文學批評として現はるべき選擇批判の力を、わづかに文學を社會的に成立せしめるために、またそれを普及保存せしめるためにのみ專ら用ひるといふことから解放せられて、既に印刷刊行せられたるものとしての文學――社會的成立も、普及も、保存も、[illegible]と確實にせられてゐるところの文學に對して、選擇批判の力は、更に自由に、細やかに、複雜に、働きかけ[illegible]とが出來るやうになつたとも言へるのである。更にまた、印刷刊行せられた文學は、今までよりも容易に[illegible]の前に提供せられることとなつて、今までよりも遙かに多くの讀者公衆を得ることとなり、文學の社會性乃至社會的意義を確實に打ち立てるやうになつたとも言へるのである。印刷刊行の普及して來た社會では、文學上の作品そのものから立ち離れ、作者その人から立ち離れて、これと對立して、別に明らかに讀者社會といふべきものが、おのづから形づくられて來たのであつて、ここにはじめて、批評を專らとする人々が現はれ、批評が一つの獨立した表現の形を取るやうにもなつて來たのである。（文字のない時代に於いては、前にも言つたやうに、批評の働きは直

ちに創造そのものの中へ織り込まれ吸ひ込まれて行つたのである）とにかく、印刷刊行によつて、文學が明確に讀者社會（たとひそれはまだ極めて少數であつたにせよ）の對象となり、文學對鑑賞者乃至對社會公衆の關係がはじめて明確に打ち立てられたといふ事實は、獨立した形に於ける批評の述作の出現を促すに至つたのである。もとより印刷刊行の事業が、ひろく一般に知識の光を普及し、それによつて更に社會に批評心を促すやうになつたといふことも事實であらう。或はまた、社會に知識の目ざめがあつて、その要求に應じてはじめて印刷刊行の事業も起つて來たとも言へるであらう。何れにしても、文學批評が、少くとも文學批評の萠芽と見るべきものが、一つの獨立した形で現はれて來たのは、文學の社會的成立を確實にするために大いに與つて力ある印刷刊行の事業の勃興以後のことである。少くともロシヤの文學に於いては、文學批評の發達は、これを直接外面に現はれた事象に即して言へば、印刷刊行の事業の發達に伴ひ、印刷刊行の事業の發達は、一般新學藝新文化の勃興に伴ひ、更にそれ等は、社會意識の發達を土臺として、相聯關を生じた現象であると言はねばならぬのである。

ロシヤに於ける新學藝新文化の勃興は、いふまでもなく西ヨーロッパとの接觸によつてその端緒を開かれたのである。西ヨーロッパとロシヤとの交渉接觸は、史家の說くところに從へば、（13。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』第三部、第五十三講、三百三十頁以下。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第三部、第一分冊、九十四頁以下、參照）十五六世紀の頃に既に初まつてゐた。外交上貿易上の關係のあつた外に、或はそれ等を機緣として、醫師、工匠、軍人などを招き、西ヨーロッパの文明の結果を借り用ひる位のことはあつたのである。しかしながら、それ等はまだ西ヨーロッパ文明の影響がロシヤに入つて來たといふべきほ

どのものではなかつた。一國の文明に及ぼす影響は、その影響を受け入れる國の社會が、影響を與へる國の社會の文化の優越をさとり認め、精神的に隨順するものの態度で、そこから學ばうとするに至つてはじめて現はれて來る。單に日常生活上の便利安寧を借り來たるばかりでなく、生活の秩序、見解、理解、習慣、社會上相互の關係などの上で、その最も根本的なものを攝り入れて來るときに、はじめて文化の影響が現はれて來る。この意味に於ける西ヨーロッパのロシヤへの影響は、十七世紀に至つてはじめて見ることが出來る。而してこの意味での影響が十七世紀に至つてはじめて明らかに攝り入れられるやうになつたのは、所詮ロシヤが自己の生活、自己の現狀に對する不滿足に基いてゐる。而してこの不滿は、新創建以來日の淺い當時のモスクワ國家が、自己の現在所有し支配するだけの國內の資料を以て、現在の國家の維持に必要な各方面の要求に應じて行くことの出來なくなつた難境から生じた。少くとも差し當つて國家が必要とするだけの資料を與へ得る新組織新制度の創定を避くべからざる緊急事とする自覺の中に、この不滿は生じた。尤も、かくの如き難境、かくの如き不滿は、十七世紀以前に於いて全く知られず感ぜられなかつたものではない。ただそれほどまでに痛切に感ぜられなかつたといふに過ぎない。十五世紀の半ば以後、大ロシヤを綜合したモスクワ政府は、その擴大せられた新領域を支配する上に、在來の采邑制度を固守することが出來なくなり、外來の制度組織によらないで漸次改革を試みた。しかし、この時代に於いては、政府は自國舊來の傳統が尙現在將來の新生活のために强固な根柢を据ゑ得るものと信じてゐた。隨つてこの時代に於ける改革は、自國の舊來の傳統の權威を一層强め確める結果となり、國民的自信を養ふことになつたのである。十六世紀のロシヤの社會では、モスクワを以てロシヤ全土の統一の中心と觀、ギリシャ正敎を信ずる全東方諸國の支柱とさ

へ自任するに至つたのである。しかし十七世紀に至つてこの形勢は一變した。自國舊來の傳統による多少の改革では、到底新時代の生活を支配することが出來なくなり、ここにはじめて政府及び社會のうちに、舊來の自國の傳統の力に對する疑ひを生じ、國民的自信の根柢が動搖しはじめ、自己以外の周圍を見まはして、異國の人々のうちに、卽ち西方ヨーロッパに學び求めようとするに至つたのである。十六、七世紀のヨーロッパは、政治の上では、國家組織の上にだんだん中央集權的傾向を著しく現はして來るとともに、その一方に於いて、經濟の上では、都市の發達に伴つて、近代產業制度の基礎を据ゑて來たのであつて、この二方面に於ける事實が、ヨーロッパ一般の社會生活に著しい進步變動を招き來たつたことは言ふまでもない。而して、行政、軍事、租稅などの方面にも、商工業乃至航海貿易などの方面にも、ロシヤがその當時の西ヨーロッパと比べて、遙かに後れた狀態にあつたことは勿論である。ロシヤの主力は、國防と、宮廷及び宮廷を中心として圍繞する特權階級、無爲無能の貴族骨官たちの生活を支持するために專ら費されてゐた。西ヨーロッパとの比較から來る自家の無力劣弱の認識こそ、實に西ヨーロッパの文化の影響をロシヤに導き入れるに至つた根本の動因となつたのに他ならない。自國の文化の劣弱なることをさとつて、西ヨーロッパの文化の優越を認めるに至つたといふことは、ロシヤの知力生活の上に、一大變轉期の劃せられたことを意味するのである。

しかしながら、ロシヤが外來文化の影響を受け入れたのは、西ヨーロッパからのものを以て最初であるとするわけには行かない。これに先んじて、ロシヤの文化に、その國家的乃至社會的意識に、さまざまの刺激影響を與へたものは、東方ギリシャの系統に立つギザンチヤ（14）の文化であつた。殊に十五世紀の後半か

ら十六世紀の末にかけて、全ロシヤ統一の氣運はモスクワを中心として、政治上にも宗教上にも既に著しく現はれてゐたのである。全ロシヤの君主は、世界の唯一のギリシャ正教の君主であり、モスクワは「第三のローマ」（15）であり、宗教上政治上ともにギザンチヤの直接の繼承者であるといふ思想は、たとひそれが事實の誤謬や迷信の僭稱の要素を混じてゐる傳說的なものであるにもせよ、はやく既にロシヤ國民の間に奇及し浸潤してゐたのである。千五百八十九年に、ロシヤの教會が完全にギリシャの教會から獨立して、公然自分自からの總主教を置くに至つたのは、民衆の間に既に普及し浸潤せる思想を、ただ公式に表示したものに過ぎないと言つてよい（16。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第三部、第一分冊。二十八頁——九十九頁參照）。西ヨーロッパの文化が、ロシヤに導き入れられると同時に、そこに見出だした在來の文化は、ロシヤの風土に化せられた、先住のギザンチヤ文化であつた。そこでこの二つの異なる文化は觸發し、對抗し、爭鬪する形をとるに至つた。ギリシャ文化は主として教會によつて將來せられ、導かれ、普及せられた。その傾向は專ら宗教的道德的であつた。これに對して、西ヨーロッパの文化は、主として國家乃至政府の手によつて招來せられ、導かれ、普及せられた。而して少くともその初期の傾向は、專ら物質上の要求に適應するためであつた。東方ギリシャの影響は、ロシヤの生活のあらゆる方面を包括するには至らなかつた。それは、國民の宗教的道德的生活の指導者である一方に於いて、國家の主權を莊嚴し維持するために利用せられて、國家生活の實際上に改革を促すといふこともなければ、國民の日常生活の各方面に亙つて、實際に適應せらるべき明確な知識を與ふることもなく、これを無活動と無智とのうちに打ちすてて置いた形である。國民一般の生活は、ギザンチヤ文化の普及に拘らず、依然として舊來の慣習を墨守してゐたのである。しかも、

少くとも宗教的には、この東方ギリシャの影響が、ロシヤのあらゆる階級を通じ、全社會を抱括して、これを一つの全き統一の姿に置いたと見られる。これに對して、西ヨーロッパの文化の影響は、次第にロシヤ國民生活のあらゆる部面に互つて浸潤して行つた。事物に關する理解も、事物に對する關係態度もその影響のために變つた。國家の組織制度の上にも、社會生活乃至日常生活の風習の上にも、そのために著しい變化が生じた。政治上の思想も一新せられ、一切の知識の領域にも、驚くべき擴大と發見とが見られた。衣服や住居などの上ばかりでなく、さまざまの習慣、信仰乃至思想の上で、ロシヤ國民はその面目を一新した。西ヨーロッパの文化の影響は、單に宗教道德の方面のことに止まらず、一個の人間として、また公民として、當時のロシヤ人の生活のあらゆる方面に互つて變化と革新とを招來したのである。しかしながら、それに拘らず、その影響は、東方ギリシャの文化の影響のやうに、ロシヤ社會の上下一般を一貫し包括するには至らなかつた。その影響は、ロシヤ社會の上層――最も鋭敏な、動きやすい、上層少數の社會に及んだのに過ぎなかつた。而して西ヨーロッパ文化の影響が、社會の一小部分の外に浸潤しなかつたといふこの事實は、千九百十七年の革命の勃發するに至るまで、或はそれ以後に於いてすら、なほ未だ全く否定することが出來なかつたのである。要するに、東方ギリシャ文化の影響は教會的であり、西ヨーロッパ文化の影響は國家的政府的であつた。ギリシャ文化の影響は、ロシヤ社會の全面に互りながら、人間としてのロシヤ人の生活のあらゆる方面に及ばず、西ヨーロッパの文化の影響は、人間としてのロシヤ人の生活のあらゆる方面に互りながら、ロシヤ社會の全面に及ばなかつたのである（17。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』第三部、第五十三講、三百三十五頁）

東方ギリシャからの文化と、西ヨーロッパからの文化と、この二つの文化の流れが、十七世紀のロシヤでめぐり逢うて、觸發し、對抗し、爭鬪するところから、ロシヤ國民の文化史上の位地に對する二つの異なる見解を生ずるに至つた。この二つの文化史上の異なる見解は、時代を經過するに從つて、その內容に於いて進展もし複雜にもなつて行つた。またその色彩をもあらため、その實際上の態度の上にも、名稱の上にも幾變遷があつた。それにも拘らず、この二つの見解は、ロシヤ文化史上に二つの對立せる思潮として進んで來たのである。あるときは、全くこれ等の思潮の行方をロシヤ文化史の上に見失ふやうなこともあつた。しかも、ロシヤの社會生活が、政府の抑壓のために衰へ弱つてゐるやうなときになると、屢々この對立する二つの思潮が、その力を表面に現はして來て、ロシヤ國民の社會意識を呼びさましたのである。本來歷史上の事實として見ても、ギザンチヤ傳來の宗教文化も、西ヨーロッパ傳來の國家的實用的科學的文化も、古きロシヤそのものにとつては、いづれも外來の文化にかはりはないのである。しかしながら、國民の生活が、無自覺の間に受け入れて、既に久しきを經たところの、かつては外來の文化であつた宗教が、國民のあらゆる階級を通じて浸潤普及するに及んで、それは既に外來のものではなくなり、自國固有のものとして考へられて來る。これを自家の本來の國民生活のうちから發生したものとして、固守しようとする傾向が强くなる。一つの國民が、その文化史上の無自覺時代に受け入れたものを、その自覺期に於いて揭揚し、傳達しようとするのが、普通に言ふところの國民固有の傳統である。而してこの傳統を、到底何ものを以てしても冒し破るべからざるものとするところに、國家主義的保守主義が成り立つ。それが信仰を中心とする傳統である場合に、尙更保守的になりやすい。本來ロシヤが國民的無自覺の時代に受け入れたギザンチヤ傳來の宗教中心の

文化が、西ヨーロッパ文化の入り來たるに及んで、自からロシヤ國民生活に固有のものであるとして、西ヨーロッパ文化をひとへに外來移植のものと觀るやうな傾きになつたのは、要するにこの心理に發してゐるのである。

この二つの思潮の對立が、初めて明らかに現はれて來た十七世紀の後半に於いては、一つはギリシャ派となり、他はラティン派となつて、敎會を中心に、聖書の解釋上の論爭、ギリシャ語乃至ラティン語學修の利害の比較に關する論爭の形を取つた。十八世紀の後半には、フランス啓蒙思潮の影響と關聯して、ピョートル大帝の革新の意義、乃至固有のロシヤ國民性の發達に關する論爭の形を取つた。固有の國民性の擁護と發展とを主張するものは、自から「リュボルースィ」卽ち「ロシヤを愛するもの」（18）と稱し、これに對して西ヨーロッパ文化の追隨者を「ルースキェ・ボルフランツーズィ」卽ち「半分フランス人のロシヤ人ども」（19）とか「ガロマーヌィ」卽ち「フランスかぶれ」（20）とか「ヲリノドゥームツィ」卽ち「自由思想家」（21）とか、殊に「ヲリテリヤンツィ」卽ち「ヲルテール派」（22）といふやうな綽名を以て呼んだのである。千八百三四十年代になつて、一つは「ザーパドニキ」、文字通りには西派、卽ち西ヨーロッパ派（23）と呼ばれ、他は「スラキャノフェールィ」、文字通りにはスラヴを愛する人々、卽ちスラヴ國粹派（24）と呼ばれるものとして對立するやうになつた。ザーパドニキの說くところによれば、ロシヤ人もその文化の根柢に於いては同じヨーロッパ人である、ただロシヤ人はその歷史的發達の上から年少であるに過ぎない。隨つて、ロシヤ人は、文化史上年長の西ヨーロッパ人たちが通り過ぎて往つた同じ道を辿つて、彼等の作り出だした文明の結果を自家のものとすべきである。この考へに對して、スラキャノフェールィは反駁する、——

なる程吾々ロシヤ人はヨーロッパ人であるには相違ない、ただ吾々は東方のヨーロッパ人であつて、自分自身の特有の生活の基本を有してゐる、而してこれを展開發達せしめて行くには、西ヨーロッパ人の先蹤に從はずして、自から自己の力によつてすべきである。ロシヤは西ヨーロッパの弟子でもなく、道づれでもなく、また競爭者でさへもない。ロシヤは西ヨーロッパの繼承者である。ロシヤとヨーロッパと、この二つは相前後して列なるべき、全世界の歷史の二大時期を劃するものであり、人類の文化の發達上繼承的關係に立つ二つの基本である。文化の記念碑の壘々として立つてゐる西ヨーロッパは、一つの廣大な墓地である、そこには壯麗な大理石の記念碑の下に、過去の偉大なる人々が眠つてゐる。森林と曠野とのロシヤは、穢ならしい、田舍風の搖り籃である。その中には、世界の未來が、不安らしく橫たはつて、たよりなげに泣き叫んでゐる。ヨーロッパは既にその世代を終へ、ロシヤはわづかに生活をはじめたばかりである。ロシヤはヨーロッパの後に生きて行かねばならぬのであるから、隨つてロシヤはヨーロッパの助けをかりることなしに、自分自からの智慧で、生きねばならぬ。すでにその生を終へんとするヨーロッパの生活の基本に代つて、新しき光明を以て世界を照らすために、自分自からの生活の基本によつて生きねばならぬ。卽ちロシヤは、文化史上年少であるの故を以て、他の文化力の結果を模倣し借用すべきではないのである。ロシヤは須らく、人類が未だ用ひつくさず、ロシヤ國民の魂の底深くひそめる、固有の歷史生活の原則の上に、獨立の事業を成就すべきである。

以上の二つの見解は、ロシヤの文化史上の位置に就いて、またその文化の將來の道に就いて、全く異なる考へに立ち、それぞれの特色を有してゐる。前のものはその科學的精神に於いて、その一般共通の知識に對

する尊重に於いて、後のものはその思想の規模の廣大なるに於いて、國民自身の力に對する信仰の深きことに於いて、いづれもその特色を示してゐる。ロシヤが、東方の光となるか、西方の夕照の陰に立つかの問題は、十九世紀の前半に於ける以上の思潮の對立抗爭の後、今日に至るまで、尙且つさまざまの人々によつて、興味深い、古い問題として、考察の題目とせられてゐる（25。プーシュキンの詩『ロシヤを嘲る人々に』、千八百三十一年。チュッチェフの詩『ワルシャーワの占領に對して』、千八百三十一年。ウラディーミル・ソロヰヨフの詩『パンモンゴリーズム』、千八百九十四年。同じ人の論文『三つの對話』、千八百九十九年——千九百年。マクシーム・ゴーリキーの論文『二つの魂』、千九百十五年。アンドレイ・ビェールィの小說『ペティェルブルグ』、千九百十六年。ブロックの詩『スキフ人』、千九百十九年。その他參照）。ロシヤ社會意識の發達の歷史は、以上に概說したこの二つの文化思潮の對立、抗爭、もしくはその各々の消長の中に讀まれると言つてもよいのである。

3

「公衆なくしては如何なる文學も不可能である」（26。ビェリーンスキー『批評家ニキーティェンコに關する講演』、千八百四十二年。コトリャレーフスキー編ビェリーンスキー選集、第一卷。第二版。六百六十五頁）といふのは、讀者としての公衆がなくては、文學の社會性乃至社會的意義が成り立たないといふ意味

に外ならない。文學が、その民謠時代に於いですら、特殊の意味と形とに於ける社會公衆を有してゐたことは既に述べた。文字を用ひるやうになつて後、それがたとひ極めて少數の人々の間にのみ讀まれてゐたに過ぎないにしても、寫本の文學が、やはり一種の限定せられたる社會的意義を有してゐることも事實として認められる。而してまた、以上の時代に於いて、それぞれの意味に於ける文學の社會的意義の成立と伴つて、それと同時に、一種の文學批評が存立し得たといふことも、理解せられなければならぬ。しかしながら、嚴密な意味に於ける文學の社會的成立は、その創作が一つの意識的自覺的の精神活動であり、單に文字によつて書かれるといふばかりでなく、それが印刷刊行せられて、廣く社會公衆の前に提供せられることを豫想し、隨つてまた一般の讀者もしくは專門の批評家の批評を受けるであらうことを豫期するものでなければならぬ。卽ちそれは、文學と社會との相互關係が確實なものなることを意味する。更に言ひ換へれば、文學方面の活動乃至事業が、社會一般の生活と、有機的組織的な關係を結ぶに至ることを意味するものである。この意味に於いて、文學批評は、一面、文學そのものの自己批評乃至自己選擇と、他面、その文學を受け迎へる社會公衆の批評乃至選擇との、相互關係の中から發生し成立すると言はねばならぬ。ある時代に於いてある種類の文學が出現するといふことは、これを全くの偶然乃至むら氣の結果とは見られない。そこには意識無意識の如何に拘らず、出現するもの自からが、自然に批判し選擇して來たところの、實質と形式とがあることを認めねばならぬ。隨つて、たとひ獨立した形に於ける文學批評こそは書かれてゐなくとも、ある時代に於いて現はれ且つ行はれてゐた文學上の作品の實質と形式とを知ることは、やがてその時代に於ける無言の文學批評意識を知ることであらねばならぬ。更にまた、たとひ獨立した形に於ける文學批評は書かれてゐなくと

も、ある時代に於ける社會公衆の、文學を中心としての教學方面に於ける實情を知ることは、やがてまた、その時代に於ける無言の文學批評意識を――文學を受け迎へる讀者としての社會公衆の批評意識もしくはそのための準備の程度を知ることであらねばならぬ。文學の批評が、文學に對する社會公衆の解釋乃至選擇の現はれとして、文學の社會的意義の明らかなる表徴として、獨立の形を具備して、自から言はんと欲するところを自由に言ひ得る時代に就いては、文學批評に關する研究は、直ちにその批評の文章によつて、その內容を檢討することが出來る。文學に對する社會の批評意識は、そこから明らかにすることが出來る筈である。しかしながら、文學批評が獨立の形をとつて現はれるまでに至つてゐない時代に就いては、その時代の文學に對する批評意識は、これを上に述べた二面の事情によつて研究する外はない。さういふ時代にでも、批評意識がなかつたのではなく、暗默のうちにその力が動いてゐたのだからである。ロシヤの文學が社會的に成立した時代を、十八世紀以後であるとするなら（27。ブィビン『ロシヤ文學史』、第三卷、第十章、四百三十三頁參照）、それに先だつたところの十七世紀は、そのための準備の時代であつた。十七世紀の準備を理解することなしには、十八世紀に於けるロシヤ文學の社會的確立の意義を明らかにすることは困難である。十八世紀に於いて、はじめて明らかな形をとつて現はれて來たところの、ロシヤの文學批評を研究するためには、そのロシヤの最初の文學批評の出現を可能ならしめるに至つたところの、十七世紀に於ける文學上の批評意識の狀態を知らねばならぬ。而して、未だ獨立の形に於ける批評の出現を見なかつた十七世紀の文學上の批評意識を知るがためには、前に述べたやうに、一面、その時代の社會公衆が、文學を受け迎へるための如何なる準備を有してゐたかを知り、他面、その時代に於いて現はれ且つ行はれた文學の實質と形式とが、

如何なるものであつたかを知らねばならぬのである。殊に、前にも言つたやうに、嚴密な意味で、文學が社會的に確實に成立してゐなかつた十七世紀のロシヤのやうなところでは、文學を中心として觀たる社會の教學方面の事情は、やがて社會的に確立せらるべき文學の實質と形式との方向を決定する上に、重要な意味を有してゐて、更に、獨立の形をとつて新たに出現すべき文學批評の性質をも、支配するに至るからである。

嚴密な意味でのロシヤ文學の社會的成立は、要するに一切の學藝が、寺院の高き石壁から解放せられて、俗人の所有となつたことを意味する。ロシヤの中世が終りを告げて、ロシヤの文藝復興期の來たことを意味する。一切の學藝が宗教乃至寺院の匂ひをすてて、現實的、人間的、地上的、快樂的、乃至功利的になつたことを意味する。眞の意味の現實主義と、眞の意味の理想主義とが、相竝んで、新綠の如く鮮やかに甦つて來たことを意味する（28。ブィビン『ロシヤ文學史』、第二卷、第四章、百七十八――百八十頁。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』、第二部、百九十一頁參照）しかしながら、この解放は、單獨の力では成し遂げられなかつた。西ヨーロッパの文藝復興期が、古典學藝の探究に源を發してゐるやうに、ロシヤの中世は、西ヨーロッパの文化の刺激と影響とによつてその終りを急いだのである。十七世紀のロシヤの歷史は、一面から見て、西ヨーロッパ文化とロシヤ固有の文化との交錯であり、葛藤である。少くとも、西ヨーロッパ文化の影響によるロシヤ在來の文化の分裂である。而してその葛藤も分裂も、所詮一歩は一歩より、近代に近づくロシヤの歩みのあとに過ぎない。

十七世紀のロシヤが受け入れた西ヨーロッパ文化の性質が、少くともその初めに於いて、主として物質的であつたのは已むを得ない。西ヨーロッパの思想的影響を受ける前に、ロシヤが先づ攝り入れたのは、日常

生活の風俗習慣の方面、上流貴族の生活の需要に應ずる安寧便易なさまざまの設備であつた。これ等に續いて、もしくはこれ等とあはせて攝り入れられたのが、實用的科學的の知識であり、それ等と關聯するさまざまの工藝方面の新設備であつた。これ等は何れも偶然の機會と實際上の必要とから來たものであつて、それ等とともに、自然に西ヨーロッパの思想も亦浸潤して來たのである。ヨーロッパ風の裝飾的な卓子や椅子、壁に立てかけられた大鏡、さまざまの時計、室内裝飾のための繪畫、殊に肖像畫、ポーランド風乃至ドイツ風の衣服（即ち今日の普通の西洋服に當るもの）、さういふものが上流の家庭に用ひられて來るとともに、外國人の輕業師、手品師、道化師、ドイツの音樂師、演劇などが、はじめてロシヤの上流生活に安易な輕快な享樂を與へるやうになつた。政府を中心としては、國防軍事の方面で、銃砲、機械、船舶などの必要が感ぜられ、軍隊教育の改革が思ひ立たれ、武器鑄造の必要上鑛山の採掘が問題となり、硝子工、石工、織匠、時計工など、さまざまの工匠が外國から招聘せられ、商業上の必要から軍艦、港などの建設が考へられ、造船のための木材を伐採すべき森林の調査が始められるといふ有樣であつた。しかしてこれ等は凡て外國の教へに俟つべき事ばかりであつた。教育のためにロシヤの子弟が外國へ派遣せられることは、ポリース・ゴドゥノーフ（29）の時代を以て最初とするが、たとひその結果は政府の豫期の如くではなかつたにしても、また十七世紀の終りまでは、それ等は極めて稀な例外的なことではあつたにしても、これも亦、西ヨーロッパの思想的影響をロシヤに誘導した早き一道の道筋ではあつたに相違ない。ロシヤの最初の外國留學生は、當時のモスクワの政府が必要とした以上に外國の思想的感化を受けて、多くは再びロシヤに歸り來らなかつたと傳へられる。それ以來モスクワ政府は、外國への留學に就いて慎重な取締を始め、わづかにロシヤへの歸

化外國人もしくはその弟子をのみ許可し、純ロシヤ人には全然これを禁じたとも傳へられる（30。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』、第三部、第一分冊。百三頁參照）。かつてこの禁を犯して外國に學んだ少數の青年の一人が、「學問と教育とのために異邦へ自國の子弟を送らないのは、その子弟が、異邦の信仰と習慣とよき自由とを學び知つて、その信仰をあらため、他の信仰などに執着するやうになり、自分の故鄉や近親のもとへ歸ることを少しも心にかけもせねば、また考へもせぬやうになるのを恐れてである。」（31。同上。）と言つてゐるのは、この間の消息をありのままに語つてゐるものであらう。年少子弟の外國留學に就いて、さういふ思想上信仰上の「惡影響」もしくは「危險」を豫想したのは勿論であるが、上に述べた上流生活の安寧享樂の方面に就いても、國防上乃至工業上の新施設に就いても、この時代の政府と社會とは、教會の嚴肅な教へとの矛盾扞格を、事ごとに氣にしてゐたのである。鐵砲や機械を作り、またその技術を學ぶことが、魂の救ひのために危險ではなく、道德上にも無害であつて、これに頓着する必要のないものであるといふ事を、政府は一々考へもし、評定もしなければ氣がすまなかつた（32。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』、第三部、第五十三講、三百三十九頁參照）。千六百七十二年、皇太子ピョートル（後のピョートル大帝）の生誕を祝して、皇帝アリェクセイは、「惡魔の遊び、魂の穢れ」と謂はれてゐた喜劇を上演せしめた。これが、ロシヤでの最初の劇の上演である。而してこのためには、彼も亦、教會の人々の許しを得なければ、何となく氣がすまなかつたのである。而もその許しは、劇の上演が、ギザンチヤの皇帝にも先例のあることだからと言ふので與へられた（33。同上。三百五十一頁參照）。

西ヨーロッパへの留學が上のやうな狀態にある一方に於いて、時々に派遣せられたロシヤからの遣外使臣

も、多くは眞面目な思想的文化の輸入者ではあり得なかつた。ロシヤが西ヨーロッパの文化影響を受け入れるために、なかんづく直接の力となつたのは、西ヨーロッパ諸國からの外人のロシヤ移住であつた。西ヨーロッパ人のロシヤ移住の歴史は隨分古いものであるらしいが、幾多の變遷を經て、十七世紀の終りには、モスクワ近郊（今のモスクワでは市中に含まれてゐる）の「ニェメーツカヤ・スロボダ」（34。ドイツ自由住民村の意）にかなり大きな一郭の外人居留地が出來てゐた。中には勿論、「大膽な人間には、どこの國でも故郷だ。点に海があるやうに」（35）と言ふやうな、流れものも少くなかつたであらうが、しかしその職務に忠實な技術家や工匠もまた少くはなかつた。皇室の侍醫をはじめ、金銀の細工師、音樂師、繪師、外務公署出仕の飜譯官、藥劑師、軍事顧問乃至教師、それから多くの商人などが、この外人居留地の主要な住民で、千六百六十五年の調査によると、凡てで二百四軒、人數で凡そ千五百人ばかりはゐたであらうといふ。而してこれ等居留民の多くは、ドイツ新教卽ちルーテル宗（36）の信者であつた。天主教とラティン系統の思想を極端に忌み嫌つて、天主教の教會の建設を許さなかつた當時のモスクワ政府も、ドイツ新教に對しては、從來何等歴史上の傳統的關係のないためと、ギリシャ正教とあまりにかけ離れてゐて、却つて危險の少ないやうに見えた點とから、甚だ寛大であつて、その教會の建設をもとくに許してゐたのである。ピョートル大帝の新教的精神も、亦この外國居留地に出入する間に學び得たものと謂はれる。而してこれ等の新教徒は、居住の久しき間に、ロシヤ婦人との結婚によつて、次第にギリシャ正教に改宗するものも多くなり、かやうにして西ヨーロッパ文化の影響は、漸くモスクワの土に浸潤して來たのである。

更にまた、前に述べた風俗設備などの方面の、西ヨーロッパの影響に就いて考へてみても、その安易、便

利、乃至娯樂には、決して有閑所有階級の單なる贅澤とのみ見過すことの出來ないものがあつた。それ等の安易、便利乃至娯樂の依つて生ずるところには、その背景とも根本原因ともなつてゐる趣味乃至生活の味ひの選擇がなければならなかつた。卓子、椅子、鏡、道化師、喜劇、それ等のものを攝取することは、やがてそれ等に伴ふ趣味乃至生活の味ひの選擇に同感共鳴することでなければならなかつた。十七世紀のモスクワの貴族は、意識してさうは考へなかつたかも知れない。しかしながら、それ等の新風俗、新習慣、乃至新娯樂は、それを好ましく珍らしきものに思ふに從つて、それ等を作り出だしたところの、工夫、巧智、乃至趣味の本源に對する好奇心と研究心とを誘ひ出さずには措かなかつた。アリェクセイ皇帝を中心とする宮廷の少數の貴族の一團の如きは、その時代に於いて率先して西ヨーロッパ文化に傾倒した人々である。その中には、皇帝のためにロシヤ最初の劇を上演したマトキューエフ（37）もゐた。彼はそのヨーロッパ風のモスクワの邸で、ヨーロッパの風習に從つて、一定の接客日（ジュール・フィクス jour fixe）を設けた。在來のもしくはその當時一般の例の如くに、亂飲の酒宴を張るやうなことはなく、主婦も必ず加はつて、客たちとともに、新奇な事實や思想に就いて談話を交換するのが目的であつた。これはロシヤでは最初の試みであつた。かやうにして、ロシヤの社會が西ヨーロッパに對する態度も、わづかながら變つて來た。西ヨーロッパは、軍事上工藝上その他の技術の上で、發明と工夫とを多く生み出だしてゐるが、その結果は凡てただロシヤの富の力で容易に購ひ得る——かういふ考へ方は少しづつ變つて來た。西ヨーロッパの技術工藝が、如何にして作られたかを究めようとするばかりでなく、それ等を生み出だした根本の生活態度、思想傾向に就いても、漸く學ばうとするやうになつて來たのである。

十七世紀のロシヤを支配してゐた中心思想は、いふまでもなくギリシャ教會の宗教であつた。少くともそれが表面の事實であり、また社會的に最高の權威として認められてゐたものであつた。社會上の問題として、最も眞面目な、重大な論爭の中心となり、またその標準ともなつて、必ず持ち出されるものは、卽ちギリシャ教會風の信仰であつた。十七世紀のロシヤに、もし輿論と目すべきものがあつたとするなら、それはこのギリシャ教會風の信仰に關する問題以外にはなかつたと言つてよい。卽ち、西ヨーロッパに於ける中世時代の學藝が、殆ど悉く寺院のうちに保存せらてゐたやうに、ロシヤの十七世紀に於ける學問的文化も、やはりその中心は寺院にあつた。宗教上乃至道德上の教へと、ギリシャ語もしくは教會スラヴ語（38）を讀み且つ書くことと、これ等の他に學問の存在を認めようとさへしなかつた當時に於いては、西ヨーロッパから來る一切の新學藝は、工藝技術上の知識は勿論のこと、凡て天主教的、ラティン的信仰の變裝者の如くに思はれたのである。卽ち、ギザンチヤ直傳の東方ギリシャ的信仰を視覗するものの如くに忌み且つ恐れられたのである。この時代に於けるロシヤ文化の一般特色は、宗教的、殊にギリシャ教會的であつて、西ヨーロッパの新文化は、天主教的ラティン的信仰を背景として、或はドイツ新教の信仰を背景として、凡て異端的、惡魔的と見なされがちであつた。學問も、藝術も、神の言葉をさとり魂を救ふための手段としてのみ價値がある、

然らざるものはただ用なき戯れに過ぎない――かういふ考へが社會一般に流れ互つてゐる時代に於いて、演劇の上演に心とがめしたのは自然である。ただ、それ等の「用なき戯れ」が、必ずしも一々壓迫を蒙らなかつたのは、教會の立場からは、或はこれを小兒の嬉戯乃至惡戯と同一視するか、已むを得ない人間の弱點の現はれとして寛恕したといふに過ぎなかつたのである。しかしながら、本來西ヨーロッパの學藝は、人間の性情に基く必至の要求として、新社會生活のための必要として攝取せられるに至つたのであつて、教會のために寛恕せられることによつて、もしくはそれに奉仕することによつて、わづかに存立し普及すべきものでなかつたのは勿論である。十七世紀のロシヤの思想上の動搖不安は、ギリシャ正教の信仰と、西ヨーロッパの文化と、專らこの二つの力の觸發に由來してゐるのである。しかも西ヨーロッパの文化の刺激と影響とは、單に實利實益と安寧便利とを主とする前述の有形文化の方面からのみ來たのではなかつた。それ等の有形文化をもたらす機會としても、卽ちそれ等の輸入者としても、またそれ等を生み出だした根本の文化力としても、そこに西ヨーロッパを支配するラティン的、天主教的（もしくはドイツ新教的）信仰の背景が儼存してゐたのである。ギリシャ正教の信仰に立つロシヤの教會が、西ヨーロッパの文化を忌み恐れたのは、この異端的（ロシヤ教會から見ての）信仰思想を忌み恐れたのに外ならない。而してこの二つの力の爭ひこそ、ロシヤ十七世紀に於ける社會上思想上の中心葛藤であつて、そこにロシヤ教會の分裂が生じ、やがてまたロシヤに於ける西ヨーロッパ文化の勝利が胚胎されてゐたのである。信仰上この二勢力の爭ひは、ひとり教會內部の問題としてはとどまらなかつた。教會が當時の一切の文教を支配する位置にあり、學藝の中心であり、社會輿論の最高の指導者として立ちもし、認められもしてゐただけに、教會の分裂と、教會內に於ける西ヨ

ーロッパ文化の浸潤とは、教學のあらゆる方面に、社會生活のあらゆる方面に、遠く廣き波動を生ぜしめたのである。少くとも教會内に於ける二つの信仰の爭ひの結果は、次第に西ヨーロッパの新文化の力を強め、その勝利を確實にして行つたあとが見られる。この意味に於いて、十七世紀に於けるロシヤ教會の分裂は、思想學藝の歴史の上から、最も中心的な重要な意義を有する事實でなければならぬ。

そもそも十五世紀以後、ロシヤの國家的統一の氣運とともに、教會も亦ギザンチヤの節度の下に立つことをいさぎよしとしなくなつた。殊に千四百三十九年に於けるギザンチヤ教會のローマ天主教會とのフロレンスに於ける握手は、ラティン的信仰擁護の本源としてのギザンチヤ教會を、ロシヤの前に甚だしく頼みがひなく見せるに至つた。千四百五十三年には、ギザンチヤの都ツァーリグラド、即ちコンスタンチノーポリ（39）もトルコ人の占領するところとなつた。第一のローマは異端となり、第二のローマは今や亡びた、第三のローマはモスクワであつて、第四のローマはあり得ない、ロシヤの領土に於ける大本山の教會こそ、今や太陽よりも明かに祝福を以て天下に耀く、ギリシャ正教の國々は凡てここに一つに集り來たる、地上ただロシヤの君主のみ唯一のキリスト教の君主である（40）といふ考へは、ロシヤの政治上の力の充足と相まつて、甚だしく國民的自負心を高めたのである。而かも、かやうにしてギリシャ正教の神を獨占したかのやうな心持ちになつてゐたロシヤの教會は、ギザンチヤの本山に對しては、一地方教區を支配するものたるに過ぎなかつたのであるから、そこには聖典の本文に、その解釋に、またその禮拜の儀式の上に、自のづから地方的、ロシヤ的の、特殊の誤謬もしくは異風を生ずるの已むを得なかつたのである。（禮拜の儀式の上では、たとへば、それまでのロシヤ教會では、二本の指で十字を切り、またハレルヤを二度だけ唱へた。訂正派は、

三本の指で十字を切り、ハレルヤを三度唱へねばならぬと主張した。祈りの文句に就いても、「主よ、あはれみたまへ」といふのを「おお、主よ、あはれみたまへ」と言つたといふので、これを異端視するといふやうなありさまであつた。その他は推して知るべきである。（41）。ロシヤ教會が眞に正教の總本山とならんがためには、これ等の地方的誤謬と異風とを改訂統一して、ひろく東方正教諸教會と結束し、これを包括することが必要であつた。これはやがて、政府がその必要上取り入れつつある西ヨーロッパ文化の背景もしくは中心となつてゐるところの、異端的信仰の侵入に當るためにも亦必要であつた。しかしながら、ここで見落すことの出來ないのは、これ等の聖典の誤謬不統一が、その多くは、ロシヤ教會の僧侶の久しき間の無學無知に由來してゐたといふ事實である。而してまた、この事實を發見し自認して、その改訂統一を必要とするに至つたといふ事實である。何れにしても、聖典の誤謬と不統一とを發見して、これを改訂統一しようとするに至つたのは、一面ロシヤ教會内部に於ける自己批評の發動を意味する。ロシヤ教會の分裂と、新文化の力の浸潤とは、既にこの事實のうちに胚胎してゐたのである。かやうにして、ギリシャ語と古代スラキャン語との本文による聖典の校訂改譯のために、南方キーエフの僧院（42）から、一二のギリシャ人及び多くの南ロシヤ人の學僧たちが招き寄せられた（千六百四十九年――千六百五十年）。しかしながら、舊來ロシヤ教會の認め且つ信じて來た聖典その他に誤謬と不統一とが存在するとして、これを新たに改訂し統一しようとすることそれ自身が、既に甚だおもしろからぬ感情を一部の僧侶と信徒との間に起させるに十分であつたに加へて、しかもその改訂統一の事に當るものが、たとひ同じギリシャ正教の教會に屬するとはいへ、既にポーランドを通して、その信仰及び學問の上に、ラティン的、天主教的影響を多く受け入れてゐたところ

の、南方キーエフの學僧であるに於いて、モスクワのロシヤ教會の内部に、また多くの信徒の間に、甚だしき不滿不快の感情をみなぎらしめるに至つたのである。自から第三のローマを以て任ずるロシヤ教會の自負心を傷けられた點もあつたであらう。しかも更に、その改訂統一の事業が、ラティン的天主教的信仰の侵略であるかの如く疑はれたる點に於いて、モスクワに於ける宗教社會の不安と激昂とは、その頂點に達したものと考へられる。この紛糾葛藤から生じたのが、舊來の聖典と儀式とを死守しようとする、謂はゆる「スタロウェールィ」（43。古風の信者の意）もしくは「スタロオブリャーッツィ」（44。古風の儀式を守る者の意）のロシヤ教會からの分離（45。千六百六十六年）である。この爭ひは、ひとり教會の内部に止まらず、一般の信徒の間にもひろがり、多くの狂信者を出だした。論爭は遂に宗教裁判の形にまで進み、流刑乃至火刑に處せられたものさへ少くなかつたのである。當時のロシヤの社會が、如何にこの爭ひのために動搖し、混亂したかは想像するに難くない。

ロシヤ教會の分離は、その發生の意義に於いて、一面西ヨーロッパ文化に對する防禦であり、自國在來の文化の自負であつた。この意味で分離は反動的であり保守的であつた。而してこの反動的運動の根本原因が、ロシヤ國民の無知無學にありとする當時の一部の人々の批評に基因して、教育の問題が、同じく教會を中心として一つの重大な論爭の題目となつた。教育のことは、勿論教會の勢力の下にあつたのである。

ロシヤの教育の起源は、十世紀の終り十一世紀の初めの頃から、南スラヴ人、ボルガリヤ人、セルビヤ人などの僧が、異教の國ロシヤの子弟を教化して、これをキリストの教へに導き入れようとしたところから發してゐる。結局教育は僧侶の手によつて僧侶を養成することであつた。僧侶となるためでなければ、特に學

問を教へ且つ修めるほどの必要は感じられなかつたのである。つまり一種の職業教育であつたと言へる。教育が專ら教會に屬する仕事であり、またその學問が、專ら教會的宗教的であつたのは、十七世紀の終りまで變らなかつたところである。ロシヤ教育史の記すところによると、十七世紀になつては、讀み書きは單に僧侶ばかりに必要なものではなくなつた。公私の生活に於いて、人は讀み書きの必要を次第に感じて來た。寺院附屬の寺子屋風のものの外に、地方の貴族の邸宅にも、その種のものがところどころに設けられて來た。或は私塾風に、或は家庭教師風に、僧侶または俗人の中からさへ、一つの職業として文字を教へるものがあつた。七歳から初めて、『アーズブカ』（アルファベットの書物、46）『時課經（チャソスロープ）』（讃美歌、祈りの文句などを、一年の日々に當てて集めたもの、47）、『詩篇』（ダヰデ王の歌、48）。などの諳誦をさせた。進んでは十二使徒の行傳、また稀れには四福音書、また時としては『アーズブコウニク』（七曜日の說明、聖書の物語、曆の話、算術の初步、教師と生徒との問答體の初步の文法、キリスト信者の名、ロシヤ信教の話、作詩法、樂譜、文法、辨證法、修辭法、音樂、數學、地理、天文學などの殆ど名前だけを記した程度の極めて短い說明等を含む一種通俗の日用鑑風のもの49）などをも教へた。書くことは、紙の價の高く、質の惡いのと、鵞ペンを削ることのなかなか面倒なために、辿つて書くべき字型の點線（50）は書いてあつても、容易ではなかつた。教育には勿論鞭が用ひられた。朝は七時から十二時まで、二時までは午餐と午睡との時間で、二時から四時頃まで再び續けた。年長の生徒が教師に近く、即ち上座にをり、年少の生徒は入口の扉に近くゐた。生徒は時に跪づいて恭しく教師に物を言つた。放課後は生徒が掃除をした。手洗ひの水もかへた。日曜日には必ず教會に行つた。一つの學校で、大抵五六人か十二三人の生徒がゐたらしく、讀み書きを學ぶに

二年位はかかつた。三四年もかかるものもあつた。要するに宗教上の日常生活に必要なだけの讀み書き誦が教育の主要目的であつた（51。クニャージコフ及びセルボフ共編『アリェクサーンドル二世の改革時代に至るロシヤに於ける國民教育の歴史』、モスクワ、千九百十年。一頁――二十九頁參照）と傳へられてゐる。しかしながら、その當時のロシヤ國民のうちで、どの位の割合の子弟が、せめて初歩の讀み書きだけでも學び得たであらうか、學校の數は凡そどのくらゐあつたであらうか　今日ではいろいろの說をなすものがあつて、判明しがたい。ただ、その當時、教育の事を一手に引き受けてゐた筈の教會の内部でさへ、「無知こそまことに、古い形のままのロシヤの篤信の母である」（52）と言はれる狀態にあり、聖典の改訂のためにわざわざキーエフから學僧を招いたやうなところを見ても、中央都會とても、殊に田舍では、寺院の學問も、極めて少數の人々を除いては、隨分怪しいものであつたに違ひない。教會自身のうちでさへ教育の十分に行きわたらぬ狀態にあつて、その教會自からが、社會一般に教育を普及せしめる能力をどの位有してゐたかは、多く言ふを要せぬであらう。十七世紀の終りになつても、文字を學ばうとするものは、寧ろ教會以外の師匠を探して、これに就いて學ばねばならなかつたと言はれる。概して、初歩の一と通りの讀み書きを學ぶためには、特に學校の教育によらないでも差し支へないといふやうな考へが、この頃から二十世紀の最近に至るまで、ロシヤには行はれてゐたやうである。

一と通りの文字を學んで後に學ぶべき科目は、中世のヨーロッパの學問上の風習では、文法、辨證法、修辭法（卽ち trivium と稱せられた人文學科）それについでは、算術、幾何、天文、音樂（卽ち quadrivium と稱せられた數理學科）であつた。宗教々育の主要科目は勿論初めの三科目で、それに哲學と神學とが加へ

られて、中世の中等及び高等教育の内容を成すのであるが、ロシヤが十六世紀の頃西ヨーロッパから受け入れた學問上の要目もそれに外ならなかつたのである。ロシヤ正教の教會は、この新學問と知識の愛とを以て、神の前に敬虔ならざるものと考へ、理知に依らうとするの罪を戒めた。十七世紀の初めに、ロシヤ最初の高等教育機關として創立せられたキーエフの神學校（53）も亦この科目に從ひ、そこに學んだ學僧は、既に十七世紀の三十年代にモスクワへ來て、聖典の改訂や、ギリシャ語、ラティン語からの翻譯をしてゐた。しかもモスクワでのこれ等の學問に對する疑惑と恐怖とは、十七世紀の終りに至つてさへなくならなかつたやうである。尤も、十七世紀の半ば近き頃から、貴族の子弟にギリシャ語と古代ロシヤ語との讀み書きを教へる學校を設立する希望と計畫とは、僧俗さまざまの人々によつて、考へられてゐたのであるが、千六百四十九年に至つて、當時の貴族中最も新思想に傾倒してゐた一人が、許しを得て、私財を投じてアンドリューフスキー僧院（54）を建立し、そこに南方ロシヤの學僧（約三十人といふ）を招き、ギリシャ語と古代ロシヤ語との外に、修辭法及び哲學を教へしめた。創立者のルティッシュチェフ（55）自からその聽講生であつた。その中の二人は、遂にキーエフに趨いてラティン語を學ぶことの、許可を得た。かくの如きことは、この時代に於いて稀有の、また頗る大膽な決心を要することであつた。十七世紀の半ば過ぎには、政府としては、ギリシャ語、ラティン語、スラキャン語の學校を設けることに異存はなかつた。千六百六十五年には、南方から來た學僧ボローツキー（56）によつて、「文法教授のための學校」（57）が起された。この學校の生徒は、政府自から選定した四人の書記で、彼等は公然ラティン語を學んだ。勿論彼等はただラティン語と文法とをのみ學んだのではなく、キーエフの神學校の科目は、悉くこの學僧によつて教へられたものと見える。

千六百六十八年には、その學修の課程を終へ、クールリャンディヤ（58）へ留學を命ぜられた。この學校は第一回の卒業生を出だしたのみで閉ぢられたものらしく見える。しかし、その第一回の少數の卒業生の中でも、殊にメドキェーデフ（59）の如きは、モスクワに高等程度の神學校を建設すべきことを力說した。問題は遂にその建設の可否を過ぎて、如何なる敎育上の規準によつて建てらるべきかに移つて行つた。いふまでもなく、西ヨーロッパ風の學問を學ぶためには、その時代に於いては、ラティン語による外はなかつた。しかしモスクワのロシヤ敎會では、勿論それを好まなかつた。ロシヤのキリスト敎がギリシャから來たこと、新約その他ギリシャ語で書かれた經典の多くあること、ギリシャ語が古代の文學と學問との原語であり、且つまたスラキャン語と近いこと、要するにギリシャ語は神に仕へるための一切の學藝を意味し、神の言葉を理解するための補助機關であるといふのが、ギリシャ語派の主張であつた。これに對してラティン語派の主張は、ギリシャ人自から既にラティン語を學ばずしては學問をなし得ないのであるから、寧ろ今日の學藝の源たるラティン語を學ぶに如くはないと言ふのであつて、要するにラティン語が學問の研究思索の自由を意味し、一面人間の高き靈の生活の要求を充たすとともに、他面日常生活の必要に適應するものであるといふに在つた。この二つの國語に關する論爭は、その當時の社會の事情から考へて、決して單なる言葉の問題ではなく、二つの異なる敎育精神、二つの相抗爭する文化、もしくは到底妥協しがたき二つの世界觀の問題であつたのである。論爭の結果、千六百八十二年には、「讀み書き、スラキャン語及びラティン語」（60）を敎授する學校が設立せられ、千六百八十六年に於けるこの學校の生徒數は二十三人であつたと傳へられる。これに對するギリシャ語派の學校は、千六百八十一年、モスクワ國立印刷所（61）の中に設立せられ、ギリ

シャ語とスラキャン語とを敎へ、千六百八十四年から八十六年の間に、二百人の生徒があり、その中最初の年には二十三人、次の年には五十四人、三年目には六十七人の生徒が、ギリシャ語の書物を讀むことを學んだと傳へられる。千六百八十五年には、ヴェニス及びパドゥアの大學を卒へた兄弟の學僧がモスクワに招かれ、ギリシャ語とラティン語とによる敎育を始めた。千六百八十七年には、前記のギリシャ語派及びラティン語派の學校は、それぞれの生徒を右の二人の學僧に讓つて閉ぢられ、ここに新たにロシヤに於ける第二の（第一はキーエフ）高等敎育機關が創立せられた。それが「スラキャノ・グレコ・ラティンスカヤ・アカデミヤ」である（62）。千六百八十七年の終りに於けるこの學校の創立に際しては、豫科即ちスラキャン語の級に於ける二十三名のほか、凡て七十六名の正科生があり、そのうちを三級に分ち、各級を更に二部に分つて、下級即ちギリシャ語の級には二十七名、中級即ち文法の級には三十五名、上級のうちの第二部即ち修辭法の級には九名　上級のうちの第一部には五名を收容してゐた。生徒の身分は、この時代の國民敎育の寺子屋式の學校がさうであつたやうに、さまざまであつて、僧侶、貴族、宮廷の官吏、その他下級の僕、既丁などの子弟さへも交つてゐたと傳へられてゐる。

アカデーミヤは、その一面に於いてこの時代の學藝思想上の獨占者であり檢閲者であつた。アカデーミヤの創立とともに、外國語及び新學問の敎授は、法令を以てその獨占とせられ、アカデーミヤの許可なくしては、何人もギリシャ語、ラティン語、ポーランド語その他の外國語の家庭敎師を聘することは出來なかつた。もしこれを犯すものは財產を沒收せられる規定であつた。更にまた、新學問の敎授を受けざるものが、ポーランド語、ラティン語、ドイツ語その他の國語によるドイツ新敎乃至カルヴィン宗の書物を藏し、或は信仰上

の問題について私かになりとも論爭を試みるが如き事も、亦嚴に禁ぜられてあつた。しかしながら、これ等の禁制は、たまたま十七世紀の終りのモスクワに於いて、如何にそれ等の家庭教師や藏書家が多かつたかといふことを反證するものでなければならぬ。勿論これ等の禁制は決して正直に守られはしなかつた。ただ、その禁を犯して外國語を學ばうとするものは、外國人の教師を、ロシヤ風の衣服によつてロシヤ人の如くに變裝せしめ、ひそかに家に出入せしめたのであつた（63。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』第三部、第一分冊、百九、百十、百十四頁。同上、第二部、二百五十一頁――二百六十七頁參照）。外國の學者の監督監視は、これ又アカデーミヤの任務の一つであつて、その許可なくしては彼等はロシヤに居住して公務に就くを得なかつたのである。凡て信仰上怪しげなる人物乃至書籍の監視は、悉くアカデーミヤの職責のうちにあつた。十七世紀のモスクワ（卽ちロシヤの中心地）では、かくの如き宗教裁判所的監視の背景のもとに、新學問の教授と學修が許されてゐたのである。しかしながら、その監視と壓迫との甚だしいだけ、一面には新學問の力の進展普及が感ぜられてゐたのであつて、何ものの力を以てしても、到底これを抑壓してしまふことは出來なかつた。その當時に於いては、ラティン語の學問を除き去つて、高等教育を行ひ得る道は絶無であり、その種の學校はどこにも存在してゐなかつたのであるから、アカデーミヤからラティン的學問を驅逐することは、卽ちアカデーミヤの衰滅であり、學藝の廢頽に外ならなかつたのである。以上の如き狀態にあつたモスクワの學園が、時代の教學に寄與するところの狹少であつたことは、言ふまでもないであらう。

しかしながら、教學に對する要求、興味は、學校教育の狀態の如何に拘らず、十七世紀後半のロシヤに於

いて、殆どあらゆる方面に現はれてゐたのである。算術、幾何學（今日の測量學）天文學、生理學、醫學、藥草學、動物學、人種學、歷史、地理、文法、辨證法、修辭法、百科辭典、旅行記、法律、政治、その他すべて現實の知識を與へ、地上人間の生活に關して興味あるものに就いては、人は貪る如くにその好奇心を滿たさうとつとめたのである。文學方面では、文法と一と通りの讀み書きとのほかは、前記の諸學問に比べて、却つて强く人の興味をひかなかつたやうである。修辭法と辨證法とは、アカデーミヤに於いてもラティン語とギリシャ語とで教へられ、學生の多くは理解し得なかつたのであつたらしい。しかし、十七世紀の終りには、知識を欲するモスクワの人々の中に、アカデーミヤの講義に興味を感ずるものもあるやうになり、一人の商人は、特に依賴して修辭法の講義をロシヤ語に飜譯して貰つた事さへあると傳へられてゐる（64。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第二部、二百九十一頁參照）。この時代の多くの人々が好んで讀んだ百科の學藝の書の中には、飜譯書が勿論大部分を占めてゐた。聖典を改訂するためにモスクワへ來た南方及び西方の正教の學僧たちも、醫書、百科全書風のもの、地理天文の書などを、或は編纂し、或は飜譯した（65。クリュチェーフスキー『ロシヤ史講義』第三部、第五十三講、三百五十六頁參照）。一般に、教會用の書物以外には、印刷出版にも販賣にも不便が多く、寧ろ許されてゐなかつた當時に於いても、宗教以外の書物に對する要求は、却つて强かつた。この需要に應じたのは、各方面の學藝に亙つての外國書の飜譯であつた。尤もその大部分は、原稿のままで、ただ一部だけ存在してゐたので、つまり到底印刷はせられなかつたのであるが、しかし、政府方面や少數の貴族の文庫には、それ等の飜譯の寫本が藏せられてゐたのである。この時代に於いて、ともかくも學藝方面の讀書をする階級といへば、僧侶か貴族か、富有な人々の他には勿論あり得

なかつたのである。十六世紀の半ばから、十七世紀の終りまでの間に飜譯せられたものの種類を、傳へられてゐる統計（66。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』、第三部、第一分冊。百十一頁參照）によつてあげてみる。

	一五五〇年 一五九九年	一六〇〇年 一六四九年	一六五〇年 一六九九年	小計
宗教道德	三	六	二八	三七
文學	一	二	一二	一五
歷史	三	一	一四	一八
宇宙誌、地誌	四	四	七	一五
醫學	一	二	五	八
百科全書、辭典、萬索引類	一	四	三	八
星學			九	九
軍事		三	二	五
自然科學	三	一		四
數學			三	三
法律政治		一	五	六
雜			六	六
計	一六	二四	九四	一三四

勿論この統計は不正確なものであらうが、しかし大體に於いて時代の要求乃至興味の所在を知るに足る。こ

の統計でも、宗教道德に關するものが最も多く、全體の四分の一以上を占めてゐるのは、已むを得ないが、文學、歷史、宇宙誌、地誌、星學、醫學、法律政治乃至百科全書辭典類がこれに相ついでゐるのは、新學藝に對する興味が、あらゆる壓迫と障礙との間から、逞ましく芽を吹きかけてゐたことを實證してゐると見てよい。

5

學校の教育と讀書に對する要求と相關聯して、社會的に重大なる意味を有してゐるのは印刷刊行販賣のことである。文學が社會的に確實に成立して、ひろく讀者公衆の好むところに從つて頒布せられ、その自由な批評の機緣を作るためには、即ちまた、やがて文學批評の表現を見るためには、その書かれたる作品が、正確に、迅速に、且つ廣く普ねく、容易に傳播普及せられねばならぬ。この事が成り立つに至つて、文學はここにはじめて社會性を明確に把持することが出來るやうになる。文學と社會との相互關係が誤りなく容易に成り立つやうになる。而してそこから批評が發生する。

「花婿がその花嫁を見てよろこぶやうに、寫字生はその寫し取られた書物の最後の一枚を見てよろこぶ。商人が利得を受けてよろこぶやうに、また舵取が波止場に着くのをよろこぶやうに、更にまた、巡禮者がふる里に歸るのをよろこぶやうに、丁度そのやうに、書物を寫し取るものは、その勤勞の終るのをよろこぶの

である」（67）。これは印刷術のなかつた時代の、古いロシヤの寫本の最後に書かれてゐる言葉である。この言葉が語つてゐるやうに、書物を寫し取るといふことは、實に多くの勤勞と忍耐と苦しみとを要したのである。時には、幾月も、また幾年も、これがために費された。羊の皮に、葦の管で書かれた。紙が用ひられるやうになつたのは、ロシヤでは十四世紀から後のことである。鷲ペンも後の時代のものである。プーシュキンの劇詩『ボリース・ゴドゥノーフ』（68）を讀むと、チュードフ僧院の地下室のうす暗い燈し火の下で、老僧ピーメンが久しき年月書きつづけて來た年代記の終りを急ぐ場面がある。あれなどが吾々に、中世ロシヤの僧院の筆寫のありさまを何程か想ひ浮ばしめる。

筆寫の書物が、寫しかへ寫しかへせられて行く間に、おのづから多くの誤謬を寫入せしめるやうになるのは已むを得ないことであつた。一つの規準的な正確な本文によつて、一時に多くの同一の書籍を作り出すには、印刷刊行するよりほかはなかつた。十六世紀の半ば、千五百五十三年に至つて、ロシヤではじめて書籍の印刷刊行のことが企てられた。その發意者は、當時のロシヤ社會に於ける最高の權勢の地を占め、また恐らくは最高の知識階級に屬してゐたであらうところの、謂はゆるイヨアン雷帝、イヨアン・ワシーリエキッチ（69）であつた。彼は恐らくいろいろの機會に印刷せられた外國の書籍を見たことがあつたであらう。そして、印刷せられた書籍が、無學な不用意な寫字生の手に成つた寫本に比べて、第一にその正確さに於いて如何にすぐれてゐるかを、とくに了解してゐたであらう。とにかく、聖典に誤謬を寫入せしめないために、またそれを全ロシヤの國土にひろく行きわたらしめるために、ロシヤで最初の印刷事業が企てられるに至つた。印刷所の建て物を設けてから、活字や印刷機械その他の準備に、丁度十年の年月が費された。即ち千五

百六十三年になつて、やうやく最初の印刷が行はれるやうになつた。その事業の準備に主として當つたものは輔祭のイワン・フョードロフ（70）であつた。ロシヤ最初の印刷家として、モスクワにはその記念像が建てられてある。（尤も、モスクワに印刷所を設けようといふ計畫の時期その他に就いては、さまざまの異說がある。しかし今日では、一般に上に記したやうに考へられてゐる。リブローキッチ『ロシヤに於ける書籍の歷史』第一部、第二版、ペトログラード、千九百十四年。五十三頁――五十六頁參照71）。印刷所のことを「ペチャートヌィ・ドゥヲール」（印刷局といふやうな意。72）と言つた。その場所は最初皇帝の印璽を作るために設けられ、その意味で「ペチャートヌィ・ドゥヲール」と呼ばれてゐたのを、印刷所とすることになつてから、印璽を作る場所を他に移して、丁度そのままでも適當なその名稱は、新しい印刷局のために保留せられ引き繼がれたのであつた。

千五百六十三年四月十九日は、ロシヤで最初の書物の印刷に着手した日として記されてゐる。最初に印刷せられたのは、『使徒行傳』（73）であつた。この書の印刷に殆ど一箇年を要した。千五百六十四年の三月一日に、はじめてこれが發行せられた。

十七世紀の初めには、既にモスクワ以外の三四の都會にも、印刷所が設けられてゐた。リブローキッチの記す處によると、千五百六十三年から千六百十一年の間に、モスクワの「ペチャートヌィ・ドゥヲール」から發行せられたものが三十五種あり、それ等は悉く敎會の禮拜用のものか、もしくは宗敎上の讀みものであつた（74。リブローキッチ『ロシヤに於ける書籍の歷史』、第一部、百二十七頁參照）。千六百十九年には、エーキエ（75）の私立印刷所で、學校敎師のために編まれた、メレーティー・スモトリーツキーの『スラキ

ャン語文法』（76）が出版せられた。これは千六百十八年にキリナ（77）の町で出版せられたものに增補して出版したものである。この文法書は最初のロシヤ語（卽ち敎會スラヴ語）の文法として、千六百四十八年にモスクワで刊行せられ、モスクワの諸學校でも用ひられたものである。書籍の印刷に對しても、その頃の人々はこれを異端的であるとしてさまざまに非難した。宗敎的の敬虔を以て多年の苦心を重ねて筆寫せられた書物に比べると、この機械的な印刷書籍が、異端的なもののやうにも思はれたのであつたらう。しかし印刷の事業はだんだんに繼續せられて行き、ロマーノフ家の最初の皇帝ミハイール・フョードロキッチ（78）の治世の終りの頃には、既に百八十種に上つてゐた。その中で、『詩篇』（79）は二十九版を『使徒行傳』は十版を、『時課經』（80。前出のチャソスローフと同意）は十五版を、『福音書』（81）は十四版を『奉事經』（82）は十四版を、『總月課經』（83）は十一版を、何れも重ねてゐた。その當時は、凡そ五百部から千二百部の間を以て一版と計算してゐた。これ等の書物の發行に際しては、一々敎會の總主敎の祝福祈禱を受けてゐたこと勿論である。

ミハイール・フョードロキッチ時代の書籍の價はなかなか高かつた。千六百三十五年に出た『使徒行傳』は一冊四十アルトゥィンづつであつた（アルトゥィンはその頃の三カペィカ銀貨で、二十世紀の初めの換算で凡そ十六ルーブリ八十カペィカに當るといふ。84）。千六百四十二年に出た『詩篇』は、ダギテ王の肖像もついてゐて、二十アルトゥィン（前と同樣の換算で八ルーブリ四十カペィカ）で賣られ、別版の『詩篇』はその當時の三ルーブリ（卽ち約四十二ルーブリ）で『奉事經』は千六百十九年のは二十五アルトゥィン（約十ルーブリ五十カペィカ）で、千六百三十年のは一ルーブリ十六アルトゥィン（約二十ルーブリ八十六カペ

ィカ）で、千六百三十五年のは二ルーブリ（約二十八ルーブリ）で賣られた。この時代にも、勿論倘寫本が行はれてゐたので、寫本もほぼ同じやうな價であつたといふ。勿論、印刷書にも、寫本にも、定價といふものはなかつた。同じ書物が不定の價で賣買せられた。しかし、二十世紀の初の十年頃の價に換算して、十ルーブリ乃至二十ルーブリより廉價な書物はなかつたやうである。上に記したやうな書物は、何れも一般に最もひろく用ひられた筈のものであるから、それ等の價を以て標準的と見ることは間違ひであるまいと思はれる。書物の價が高かつたのは、印刷に要する工賃の高かつたのと、當時紙は悉く外國から輸入せられたからであつた。ミハイール・フョードロキッチ時代に、一デースチ（大判四十八頁85）が二アルトゥィン（約四ルーブリ三十八カペィカ）したといはれる。モスクワの印刷局で表紙も作られた。その表紙には印刷局の紋が押してあつた。表紙は薄い木の板を皮で包み、それを金具で留めるやうにしてあつた。

印刷刊行の事が次第に盛んになるに拘らず、寫本も亦なかなか行はれた。寫本を職業とするものも寧ろ增した。保守的な人々が、前に述べたやうな意味で寫本を尊ぶといふほかに、國立の印刷局が、殆ど全く敎會用の書物乃至宗敎上の敎への書物をのみ印刷刊行してゐたといふ事情からも來てゐたのである。卽ち一面から言へば、一般の讀書欲は增して來たのであつて、殊に敎會的宗敎的の書物ばかりでは滿足しない心持ち——卽ち現實の世界の生活に關する新知識を與へてくれるもの、新しい學藝の書物、さまざまの飜譯書、物語類などに對する要求が、次第に盛んになつて來たためであると見るべきである。讀書欲知識欲の普及と、非敎會的非宗敎的興味、卽ち新學問に對し新生活に對する興味の發動と、この二つの事實が、印刷刊行の書籍と相竝んで寫本の需要のますます加はつて來たことのうちに潛んでゐたのである。モスクワの國立印刷局か

ら出版せられた教會用以外の書物は、千六百三十三年に出たブルツェフの初歩讀本であつた。それでさへ、千六百三十七年に出た第二版には、スラキャン語の初歩讀本といふ標題の下に、即ち兒童が祈禱の文句や信仰上の手短かな問答を讀み學ぶためのものである事が明記してあつた（86）。この讀本に次いで、いろいろの教科書風のものが出た。教會用の書物以外で、最もひろく讀まれたものは、恐らくこれ等の初歩の教科書であつたらう。千六百四十八年から千六百五十一年に至る四年の間に、ブルツェフの初歩讀本は三版を重ね、その總部數は九千六百部であつた。千六百七十八年から千六百八十九年に至る十二年の間には、同じ讀本は二萬五千部以上を（即ち一年平均二千部以上に當る）、『時課經』は三萬六千部を（即ち一年三千部づつ）、『詩篇』は一萬八千部以上（即ち一年五百部以上）を出してゐる。その當時のロシヤ國民千六百萬と稱せられてゐるのに比べては、これ等の數は決して多くはない。二千四百人に對して一冊づつの教科書に當るからである。しかしながら、文法書の賣れ行きに比べると、以上の數字が、當時のロシヤの社會としては、驚くべき多數の需要を示してゐることが分るのである。千六百四十八年、モスクワでは教育上の問題が頻りに論ぜられてゐる當時に於いて、モスクワ印刷局から出版せられたスモトリーツキーの文法には、特にモスクワの發行者の序文があつて、文法は高き知識に到達するための避くべからざる扉であり、これを學ばざるときは、遲しき智力も亦迷ひやすき旨を懇々と說いてゐる。しかもこの勸說の效果のあまりなかつたであらうことは、千六百四十八年モスクワ版の初版（原本はエーキェで千六百十八年に出た）出でて後、千七百二十一年に至つて漸くはじめて第二版が出たのによつても知られる。再版の序には、モスクワのギリシャ・ラティン語學校に於いてすら、この書物の不足のために、教會スラヴ語（即ち當時の文章語）の文法を教へてゐな

いことを歎き「灰の中の火花の如く」にこの書を搜し求めたと言つてゐるのである（87。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第二部、二百九十頁參照）。

ロシヤに於ける新聞の濫觴もまたミハイール・フョードロヰッチの時代にあるといはれる。勿論これは今日の意味で新聞といはれるべき性質を備へてはゐなかつた。それは、モスクワへ送つて來るさまざまの外國新聞の飜譯及び摘要であつて、モスクワ政府の外務省に當る官廳で、皇帝と要路の大官とのために編纂したのである。それは普通に「クーラント」（88）もしくは「ストルブツィ」（89）といはれてゐた。「ストルブツィ」は柱の意で、今の日本の新聞の言葉では「段」に當る。この當時の外國彙報ともいふべきものは、紙を竪に長く貼つたもので、時にはその長さが數十尺にも達したと傳へられる。外國新聞の飜譯のほか、モスクワ政府から報酬を受けてゐる外國人の通信も載せてあつた。この「ストルブツィ」は勿論凡て筆寫したものであつた。モスクワの外務省文庫に保存せられてゐる最古の「クーラント」は千六百二十一年のものであつて、それには、『ヨーロッパに於けるさまざまの軍事行動及び平和施設に關するポーランドより送り來たれる報告の飜譯』（90）といふ標題が附けてある。千六百二十一年の「クーラント」の中には、外國で出版せられた書物の標題、その簡單な內容、發行者の名、發行の場所及び時など、凡て書籍に關する一と通りの事實が記してある。これが恐らくはロシヤの新聞雜誌風のものに現はれた最初の書籍學的記錄であり、新刊紹介乃至批評の濫觴でもあつたらう。ミハイール皇帝の時代には、ロシヤ最初の圖書館ともいふべきモスクワの宗務省文庫（91）の端緒も開かれたといふことである。

千六百四十五年アリェクセイ・ミハイローヰッチの即位以後、印刷局は在來の教會用の書物のほかに、一

教學藝の書物をも出版し、また教科書風のものをも一層多く刊行した。前に記したブルツェフのスラキャン語初歩讀本は、千六百四十九年に六千冊の新版を出して、それが三箇月の間に賣りつくされてゐる。千六百五十一年には、同じ書物の二千四百部が、一日のうちに賣りつくされた。千六百四十八年には、前に記したスモトリーツキーのスラキャン語の文法書が一冊五カペィカ（換算約六ルーブリ半）の價で千二百部出た。千六百四十七年には、『歩兵隊組織の教へ及び技術』（92）が印刷せられ、その三十五枚の圖表と銅版とはわざわざオランダへ注文せられた。この銅版畫はロシヤで出た最初のものであつたといふ。この書はデンマークのある大尉の著述であつた。銅版の出來がおくれて、發行は千六百四十九年になつた。價は一部一ルーブリ（換算十三ルーブリ）であつた。千六百四十九年には『アリェクセイ・ミハイローキッチ皇帝の法律集』（93）が出た。初版は千二百部印刷せられ、一部の實費が換算四十七ルーブリ八十五カペィカに當つたとあり、初版は忽ち賣りつくして、同じ年のうちに、別に二度まで新版を重ねた。アリェクセイ皇帝の在位三十一年（千六百四十五年――千六百七十六年）の間に、モスクワ印刷局は百八十七種の出版をしてゐる。一年六種の割合である。上記の『法律集』のやうな萬人必携のものは別として、これ等の書物は、勿論非常に多くは普及しなかつた。文字のあるものの數の少かつたためと、書物の價の高かつたためとである。當時の價で一冊四ルーブリ乃至六、七ルーブリもする書物は、當時の金を今日に換算してかりに十三倍としてみると、非常な高價なものであつたに相違なく、貴族と富者とのほかには、到底購買力を有してゐなかつたことが明かである。當時は普通實費の倍額に賣價を定めたといはれる。販賣發送は印刷局の書記たちがこれに當り、收支を記入し、賣れた分と殘つてゐる分とを分けて記した、その頃印刷局に勤めてゐたものが凡てで百六十

人以上もあつた。これ等は皆皇帝自からの裁可を經て任命した。販賣は印刷局の入口にある二箇所の店で行はれた。勿論ここでは發行部數の一部分を販賣し、別に地方の教會區へ發送し、必ずその都度書籍代の送金に就いて指定を出した。その他は、青物市場などの小店で他の雜貨と一緒に書物を商つた。印刷局發行のものゝほか、キーエフ發行のものも次第にモスクワへ招來せられた。千六百七十二年には、キーエフ總本山に附屬する印刷所が、許可を得て、モスクワで書籍の販賣を始めた。その書物の中にはポーランド語のものが多かつた。ポーランド語やラティン語の書籍も、既にそれ以前からいつの間にともなくモスクワの讀者を持つてゐた。キーエフからの書店は、不當な檢閲のために結局失敗に終つた。それは、モスクワで發行せられた書物と同一のものであつて、多少の相違を有するもの、もしくは全くモスクワで見られず知られないものは、販賣を禁ぜられ、モスクワで刊行されてゐるものと全く同一のものだけが販賣を許されたからである。千六百二十七年には、最初のスラヴ・ロシヤ語辭典『スラキャノ・ロシヤ語辭典及び人名の說明』（94）がキーエフで出版せられ、十七世紀の二十年代には、舊來のペチョールスカヤ本山の印刷所のほかに、私設の印刷所がキーエフに設けられた。十七世紀の前半には、キリナ及びリヲフ（95）の印刷所その他でも多くの書籍を發行した。その多くは、一部づつモスクワへも來たのである。

ロシヤ教會の分裂が、舊來行はれてゐる聖典祈禱書などの誤謬不統一を改訂するの可否に由來してゐることは、前に既に述べた。この改訂に最も強く反對を唱へたものの中に、モスクワ國立印刷局に勤める出版書の校訂者たちがあつたのは、當然且つ自然のことであつた。しかし、結局舊來のものを改訂することになつた後は、政府の命によつて、改訂反對派の妄をひらくために、また彼等と戰ふために、論難辨證のための書

籍が印刷局から出版せられた。なかんづく、ボローツキーの論難的な説教集が、その主なるものであつた。（彼はアリェクセイ皇帝の招きに應じてキーエフから來た學僧の中でも、殊に皇帝の信頼を得てゐた。そのため彼はアリェクセイの皇子女の師傅でさへもあつた）。舊來の信仰形式や經典を維持する分離派（96）の方でも、これに對して論難の文章を書いた。その多くは寫本であつたが、中には祕密印刷所で印刷したものもあつたといふ。これ等はその當時に於ける政府と教會との壓迫から、普及保存の至難であつたため、今日に傳へられてゐるものは殆どないといふことである。

アリェクセイ皇帝時代の書籍は、その外觀に於いても、可なり壯麗であつたらしい。版畫、扉繪などにもなかなか美しいものがあり、殊に千六百六十三年出版の『聖書』（97）の扉の如きはその一例としてあげられる。また、十七世紀の終りにキーエフで出版せられた多くの書籍のうちで、『年代記錄諸家要覽一名要略集。スラキャノ・ロシヤ國民及び神助の都キーエフの初代の諸公に就いて、神聖なる正信のキーエフ大公兼全ロシヤの最初の君主ウラディーミルの傳に就いて、資性明暢にして篤信なる吾等が君、皇帝にして大公なるアリェクセイ・ミハイローキッチにまでも至る、篤信なるロシヤ國のその後繼者たちに就いて』（98）といふのは、ロシヤで出た恐らくは最初のロシヤ史の教科書とも見られるものである。その編者たりし學僧インノケンティー・ギーゼリ（99）こそ、千六百七十二年にモスクワでキーエフ版の書籍を販賣することを思ひ立つた人である。最初に持つて來た部數は四百二十七部で、モスクワでの賣價よりは廉く賣つた。恐らくキーエフからは、ひとりモスクワばかりでなく、書物市のあつたノーヴゴロド（100）とか、或はエニセイスク（101）。そこには千六百四十九年から既に書物市があつたといふ）といふやうなところまでも、書物を賣り

捌くために行つたものと察せられる。モスクワへは、ノーヴゴロド、チェルニーゴフそのほかの町で發行せられた書籍をも、キーエフから持つて來たといふ。ボローツキーの説教集は、單に分離派に對する論難的のものばかりでなく、平明流暢な言葉で、國民の迷信を打破し、新學問の效力を説いた啓蒙的のものも少くない。讀書學問の必要を力説して、『惡も善も、兩親からの天性によつて兒童の上に來るのではなく、學びから來る。何人も學ばねばならぬ。僧も、俗人も。祈禱の書を讀むことは萬人に益がある。男子にも、婦女子にも』（102）。リブローキッチ『ロシヤに於ける書籍の歴史』第一部、二百四頁）とも言つてゐる。

アリェクセイの子フョードル皇帝（103）の治世六年（千六百七十六年――千六百八十二年）の間に、モスクワ印刷局からは百五種の書籍が刊行せられた。それ等は凡て宗教上のものばかりであつた。千六百七十九年に設けられた印刷局内の學校（前出のギリシャ派の語學校、三百六十頁參照）の主なる目的は印刷局の校訂者を養成するためであつたといふ。千六百八十二年には、在來の宗教中心の書籍のほかに、全く別種の實際的な學問の指南書が出た。卽ち『計數便覽』ともいふべき、例の如く長い標題を持つてゐる書物であつて、これがロシヤで最初の商用算術書である（104）全卷悉く算術の計算表であつて、その數字はアラビヤ數字ではなく（それが用ひられるやうになつたのは更に後である）特殊の教會用の數字であつた。新學問の熱心な學徒であつたメドキェーデフ（前出）は、書籍蒐集家として『諸書籍標題、その編者一覽』（105）を編んだ。これがロシヤで最初の書籍學上の單行本であつた。アカデーミヤ創立後は、印刷局の校訂者等はアカデーミヤの出身者であり、アカデーミヤも亦印刷局の事業を助けた。千六百八十五年には、ロシヤで最初の脚本が出版せられた。『道樂息子の物語』がそれである。三十七面の銅版畫があり、それが一々この作の舞臺面を

描いてゐるので、當時の舞臺の樣子もほぼ推知することが出來る。リブローキッチの『ロシヤに於ける書籍の歴史』第一部に收めてあるものによると、舞臺の前方に脚光があり、觀客は帽子を冠つてゐるやうである。この脚本の標題は、原本によると『キリスト降誕後千六百八十五年の年に見らるる道樂息子についての福音書の寓意の物語または所作』(106) といふのである。印刷刊行せられるものといへば宗教的教會的のものに殆ど限られてゐたモスクワから、脚本が出版せられたといふことは、十七世紀の終りに於けるロシヤ社會の好尚の傾向を暗示すると同時に、文學が漸く社會的に成立しようとする端緒を開きつつあつた事を語るものにほかならない。千六百八十九年には、ダニール・ルブタロ、後に聖者の列に加へられて聖ドミートリー・ロストーフスキーとして知られてゐるキーエフの學僧の『聖者曆一名諸聖列傳』(107) 四卷が出た。十七世紀の終りになつても、やはりモスクワをはじめ各地に寫本は行はれてゐた。外國ものの飜譯や、小說の物語などは、專ら寫本で行はれてゐたのである。十六世紀もしくは十七世紀の初めの頃は、寫本の方が印刷本よりは廉價であつたが、十七世紀の終りには、もう印刷本の方が廉價になつてゐた。印刷本の流布とともに、寫本に對する需要が自然に減じたでもあらう。從つて寫字を以て職業としてゐたものの數も減じたであつたらう。寫字に從事するものが少くなるにつけて、その勞銀は自然高くもなつたであらう。寫本の中では、千六百七十七年にポーランド語から飜譯せられた、中世の傳說を集めた『大鏡』(108) の如きが、最も廣く行はれ、讀者の需要の多かつたものであつて、ひとり貴族や富者の間ばかりでなく、ひろく民衆の間にも行はれてゐたといはれる。ポーランド、ドイツなどから飜譯せられたさまざまの物語小說風のものも、寫本としてなかなか廣く行はれ、その他醫術、天文、星辰のことなどを記しあつめた一種の百科全書風の便覽式のも

の、歴史類なども、寫本として行はれたものである。書籍の需要も、刊行も、年とともに增し加はつて行つたが、しかしまだ極めて少數の人々のためであり、その內容から見ても、まだまだ主として宗教的であつた。頒布普及の方法も幼稚であり、新刊書に對する批評などは勿論絕無であつた。しかしながら、ともかくも印刷刊行の書籍が次第に行はれて來たといふことだけでも、やがて文學上の作品が、正確に且つ廣く社會の前に提出せられて、文學の社會性を構成するための、必要なる第一の準備が成りつつあつたと言はねばならぬのである。(109)。以上の敍述は主としてリブローキッチ『ロシヤに於ける書籍の歴史』第一部、百四十六頁以下に據つた)

6

文學が社會的に確實に成立するためには、文學上の作品に用ひられるその國の國語が、日常生活の言葉と少くとも接近し、更に進んでは一致することを要する。文學上の言葉と、日常生活の言葉とが、接近せず一致しないといふことは、一面からはその國のその時代の文學が、社會的に、卽ち讀者の日常生活の上に、引き離すべからざるものとして直接に浸潤して行つてゐないことを示すものである。また更に他の一面からは、その國のその時代の讀者が、卽ちひろく社會が、文學を受け入れ、これと引き離すべからざるほどの關係を成り立たせるまでに發達してゐないことを示すものである。卽ち社會が文學を必要とし、或はこれを受用す

るだけの準備を缺いてゐることを示すものである。かやうな時代に於いては、文學上の國語の形も內容も整つてゐない。文法が成立してゐない。思想や感情を表現すべき適當な言葉が足りない。社會が相互に理解しあふことの出來る一定の象徵としての語彙がなく、亂雜蕪雜であつて、そこに言葉の上の一致と融和と共同とが成り立つてゐない。文學上の言葉の成り立つためには、先づ第一に讀者としての社會が成り立たねばならぬ。その社會がそれによつて相互に理解し、一致し、共同することの出來る言葉が成り立たない間は、その社會には眞の理解も共同一致も成り立たない。文學上の言葉は、少くとも讀者と文學者との協力によつて成り立つものである。一定の商品に一定共通の市價といふものがあるやうに、同一の思想を表現するためには共通の意味を有する言葉がなければならぬ。而して言葉による表現の共通の內容は、その言葉の用ひられる、即ちその內容の表現が必要とせられる市場（社會）の規模と、その取引（思想の交換）の緩急によつて一定共通の形に落ち着いて來るのである。文學上の言葉による表現を必要として、その書かれたものを讀む社會が、狹く限られてゐるか、またその書かれたものが容易に社會に傳播普及せられないといふやうなところでは、共通の意味を有する言葉、即ち通用の自由な生きた言葉は生れて來ないことになる。一部少數の社會に用ひられ理解せられる言葉と、他の大多數の社會に用ひられ理解せられる言葉との間には、多かれ少かれ差別があり距離があつて、つまり國語が部分的な分裂的な狀態でしかも社會的に成立してゐないことになる。これを言ひかへれば言文の不一致といふことになるのである。

中世のロシヤに於いて、比較的整頓せられた言葉として、當時の知識階級即ち主として敎會を中心に通用してゐた言葉は、敎會スラヴ語であつた。これはそれ以前の古代スラキャン語に比べては、可なり一般民衆

の間に用ひられてゐた言葉に接近したものではあつた。しかしこの言葉とても、全く書物の上のものであつて、書物を書くことが廣く行はれて行くにつれて、この言葉と日常の言葉との間の距離は、寧ろますます多くなつて行つたと見られる。殊に、十六世紀の終りから十七世紀の初めへかけて、敎會が敎會スラヴ語を自家獨得のものの如くに尊重し、敎會內の習慣による獨得の語法をさへ定めるやうになつて、一般の民衆との言葉との距離は更に加はつて來たのであつた。長い間の習慣で、この言葉が何となく一段高尙な莊重なものやうに思はれて來る一方で、一般民衆の間の日用語は、實際生活の必要上文書の上に平明に書かれるやうになり、この俗用の文體も次第に行はれて來た。十六世紀の後半に至つては、日用の俗語體が、ややもすれば敎會スラヴ語の文章のうちに寫入して來る傾きさへあつた。當時の學僧ジノーギー・オーテンスキーの如きは、俗語が敎會スラヴ語の文章體の言葉の中に寫入することを以て反キリスト的であり粗野であるとし、文章體の言葉が俗語を訂正する事を以て妥當なりとしたものの一人である(110)。さうでなくてさへ宗敎的敎會の勢力のために壓迫窘縮せしめられてゐたロシヤ中世の文學は、その用語文體の上に於いても、敎會の勢力のために、久しい間自然の發達生長を支へ止められてゐたのである。しかしながら、ものものしい敎會スラヴ語の文章體では、日常の事務的な文書は間にあはないことが多かつた。敎會スラヴ語の中には、賣買上の契約その他事務的の用語はなかつたからである。政府方面の公文書などは、自然に平易な日常一般のロシヤ語で書かれるやうになつた。モスクワの發する法令その他は、ひろく全ロシヤの國民に了解せられる必要があつたからである。かやうにして、十七世紀のロシヤには、在來の敎會スラヴ語の文章體と、俗語の混入してゐる、モスクワの地方語を中心とする公文書風の事務的な文體と、この二つの文章體が竝存してゐた

のである。しかも教會スラヴ語が次第に一般の理解と實用とから遠ざかつて、ますます教會的な特殊のものとなつて行く一方で、公文書風の文體は、それの必要上ますます一般に普及せられ實用せられるやうになつた。一般國民の知識生活の上から見ても、在來の學問が宗教的に限られてゐた狀態から、次第に實用的、科學的現實的に傾いて來た。社會の教學の方向が教會からだんだん遠ざからうとして來た。西ヨーロッパの學問文藝の翻譯も頻りに行はれるやうになつた。その翻譯は既に多く俗用の平明な新文章體によつてなされた。

(111。イーストリナ『ロシヤ語史階梯』改訂第二版、ペトログラード、千九百十七年。七十七頁——七十九頁參照)言語文章の上で、十七世紀のロシヤは、言文の不一致と二重の文章體の併立と、用語乃至語法の混亂不統一との狀態に在つて、文學が社會的に成り立つための條件を、この方面に於いても甚だしく缺いてゐたと言はねばならぬ。本來のロシヤ語それ自身がさやうな狀態にあるに加へて、この時代に於いて盛んに行はれはじめた外國文學乃至學問上の著述の翻譯が、一面からはロシヤ語の將來を豐富にし、ロシヤ文學乃至思想を解放し充足して行つたとともに、他面ロシヤ語の不統一と混亂とを更に甚だしくしたであらうと考へられる。要するに、當時のロシヤ文學は、その表現の要具としての國語の上で、分裂の狀態にあつた。讀者公衆としての社會も亦隨つて分裂してゐた。その分裂が、當時に於いては極めて少數であつたであらうところの知識階級讀書階級の間に於いて甚だしかつたといふ事は、その時代の文學が社會的に確立し得なかつた重要な原因と見ねばならぬ。かくの如き狀態の下に文學批評が獨立の形をとつて成り立つことは寧ろ不可能と言つてよい。

しかしながら、この時代の社會で、實際に好んで讀まれ行はれてゐた文學に就いて見れば、何人も時代の

選びつつあつた方向に氣づくであらう。無言の、また文盲の、多くの民衆が、何を創造し何を享受しつつあつたかは、本來重要な問題であつて、後の文學と緊切な關係を有してゐるのであるが、この民衆の間に發生した書かれざる文學が、ロシヤ文學の表面に、少くとも重要な一要素として、本來的ロシヤ的の要素として、その力を生かし現はして來るためには、十七世紀のロシヤは、さらに凡そ一世紀を待たなければならなかつた。十八世紀の文學は、ロシヤ本來的の民衆の力を文學の上に表現するための、通過せずにゐられない準備時期であつたとも言へる。民衆の間に生れた文學の運命に就いては、十七世紀はまだそれを語るべき時期でないのである。社會の底にかくれて流れてゐる民衆の文學的生活乃至その趣味好尚が、社會の上に働きかけて行くためには、その働きかけられるための社會それ自身が、上層の社會それ自身が、眞にその民衆の力を認め、愛し、受け入れるまでの準備をしなければならなかつた。十七世紀は、何等かの形と實質とに於いて、ともかくも、文學が社會的に確實に成立しなければならなかつた時代である。文學の作品が、正確に迅速に且つ容易に、廣く公衆の間に提供せられ普及せられるために、あらゆる方面から準備を急いだ時代である。文學の社會的確立といふことを中心として十七世紀のロシヤ文學を說くのは、書かれ且つ印刷刊行せられた文學を說くことである。卽ち讀書する階級の間に——その當時では上流貴族もしくは富者の間に讀まれたところの文學を說くことである。勿論民衆の間に文學的生活が絕無であつたのではない。民謠、傳說その他の存在がそれを語つてゐる。しかし、それが社會的に力を認められるには、民衆自身の生活全體が社會的意義を確立して來なければならなかつた。民衆の力が、社會的に認められかけて來たのは、ロシヤでは、十八世紀の終りから十九世紀へかけてのことである。十七世紀のロシヤでは、社會は、殊に書かれ且つ刊行せられ

る文學との交渉を有する社會は、比較的極めて少數の、上層社會にほかならなかつたのである。隨つて、この時代の社會が選びつつあつた文學上の傾向といふものは、とりも直さず讀書階級有閑所有階級の選擇意志を意味することになる。

ギザンチヤの傳來の宗教が、禁慾的、非現實的傾向の人生觀乃至趣味好尚に感染せしめ得た對象は、民衆ではなかつた。民衆は一面から見ると保守的でもあらうが、自己の本來性に眞實であつて、それを表白するにも率直で平氣であつた。民衆は、宗教的禁慾的の教へに拘らず、やはりどこか異教的で、嬉笑好謔の生活を棄てなかつた。これに反して、教學の源としての教會を中心とする讀書階級乃至知識階級は、つねに死を思ひ最後の審判をおそれる禁慾的の教へを受けて、嬉笑好謔の生活を忘れたばかりでなく、これを罪惡と見、惡魔の誘惑とさへ見るに至つた(112。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第二部、百八十六頁——百八十七頁參照)。十七世紀は、ロシヤの讀書階級乃至知識階級が、この禁慾的人生觀から、次第に人間らしい現實の生活興味に立ち戻つて來た時代である。死と永久の苦惱との思ひに煩はされることから去つて、地上の、現實の幸福とよろこびとを求めて來た時代である。文學の讀者としての趣味好尚の上にも、明かにその傾向が見られる。第一にはポーランドを經て、多くはポーランド語の飜譯によつて、更にそれをロシヤ語に重譯せられたところの、ロマンティックな中世風の物語の流行である。その飜譯には、題材內容の上で、時代の選擇が現はれてゐると見ねばならぬ。卽ちその多くは、イタリー風の騎士生活を中心とする冒險的乃至戀愛中心の物語である。そこには戀愛のために生命をも犧牲として悔いない獻身的の理想主義があるとともに、女性に對する愛慕に人間の本性を抑壓しない現實主義がある。この現實主義的傾向は、當時の嬉笑好謔の物語

にも、諷刺の物語にも明かに見られる。またたとへば、『サーワ・グルーッヴィンの物語』(113)の如く、現世の快樂のために、おのが魂を惡魔にわたす人間の生活を主題としたものがある。この物語の如きは、禁慾的傾向に對する苦悶と爭鬪との表現として、殊に意味深きものであらねばならぬ。十七世紀の終りにはじめて現はれた抒情詩の如きも、ロシヤの社會の一部が、戀愛を中心として現實享樂乃至現實苦悶の生活に目ざめて來たことを示すものである。たとへば、千六百九十三年に、ある青年からその戀人に送つた書翰體の抒情詩などがその一例である——

……

すこやかなれ、わが魂の君よ、幾久しく、
君が祝福あるちかひを忘るるなかれ、
いかに君とわれと神の前にちかひけん、
しばらくの間指輪をとりかはし、
われ等がかうべには黃金の冠をいただきぬ、
過ぎしたのしかりし貴き日に!
しばしば、君よ、われをおもひいだせよ、
わけても訴りのうちに忘るることなかれ。

——————————

何となく君を思へばものうし！
もし叶ふものならば——
君のもとへ飛びも行かん、
君のもとへこそ、わが魂の君よ、飛びても行かまし！　114）

詩としての巧拙などはもとより言ふにも足らぬが、とにかく當時のロシヤ社會がその生活感情を根本的に變へつつあつた一徴候としては見ることが出來る。更に演劇が、この世紀の後半に於いてその端緒をひらいて來たといふことも、民衆の一切の娯樂をさへ禁止しようとしたほどであつた前の時代と比べて、社會がいかに現世的、快樂的、乃至客觀的傾向に進みつつあつたかを見るべき事實である。その舞臺にはいつでも道化ものが現はれて、常人の言ひ得ず爲し得ざる所作と臺辭とによつて、觀客の嬉笑を買ふと同時に、當時の社會生活の否定的方面を指摘した氣味のあつたのなども、——またそれが露骨であればあるほど觀客によろこばれたのなども、時代が現實の生活を客觀的に理智的に觀ようとして來た一つの徴候であるともいへばいへる。また辯難說破の論爭的な說敎集などの刊行も、批評的になつて來た時代の氣分を表示してゐると見られよう。歷史類が多く書かれるやうになつて來たのも、同じ客觀的現實に對する興味からでなければならない。要するに現實的傾向の發生、宗敎的禁慾的傾向からの解放、おぼろげながら抒情詩その他での個性の表現、文學上の新種目の成立——これ等を通じて、文學が社會現實の生活と漸く接近し、生活が文學によつて慰められ、よろこばされ、何を愛し貴むべきかを敎へられ、人間の現實が何であるかの一端を知るやうになつて來たのは事實である。十七世紀はもとよりわづかにその萠芽を示したのに過ぎない。しかし、既に心持

ちの底の流れが變りかかつて來た。少くとも、その變化が、あの混亂と不統一と紛爭との甚だしかつた十七世紀のロシヤ社會の中に、一派の路を作らうとして來た。十七世紀文學はそれを吾々に語つてゐる。ミリュコーフの謂はゆる、文學が生活から取りかへし、生活が文學から獲て來たものは、單に戀愛といふ一事に限らなかつたのである。（115。ミリュコーフ『ロシヤ文明史論』第二部、百九十一頁）更に別の方面から觀ると、敎會中心の學藝が、漸くその中心を移動せしめて、十七世紀に於いては、少くとも敎會的な方面と現世的地上的な方面と、卽ち寺院の學藝と俗人の學藝との二つ中心を形づくらうとして來たのは事實である。このことは、學藝そのものの分裂を意味する。宗敎上の敎へも、それ以外の學問も、更にまた文學までも、凡てを敎會の手に獨占してゐた狀態が、漸く崩壞して來たのである。少くとも、學問と文學とが分離する傾向を示して來たことを意味する。文學が獨立して、社會的に成立し得る端緒はここにひらかれたと言はねばならぬ。

これを要するに、上に述べて來た諸方面の事實は、何れも文學の社會的成立のための準備であつた。ロシヤは動きはじめた。西ヨーロツパの文化の影響が、直接にロシヤへ來るやうになつたのは、ピヨートル大帝以後、十八世紀のことであつて、十七世紀は殆ど凡てポーランドその他を經て間接に來たのに過ぎなかつたが、しかし、とにかくその西方文化の刺激のもとに、ロシヤは動きはじめたのである。それは分解すべきものが分解し、結合すべきものが結合するための動きであつた。軍事、工藝、技術の方面も、日常生活の安寧便利享樂も、印刷刊行の普及も、文體の混亂も、文學の趣味の變遷も、更にまた敎會內部の分裂も、すべて實生活の必要から西ヨーロツパの文化に刺激せられて新たに興つて來た學藝方面の現象は、ことごとく社會

的結合の中心を新たに立て直すための動搖と苦悶とにほかならなかつたのである。新たなる組織のための解體異動によつて、文學の讀者としての社會が、はじめて新たに造られつつあつた。文學批評の發生するために必要な準備は、諸方面から蓄まれてゐたのである。而して、かやうな解體異動の混亂の中にあつて、あらゆる方面の現象を通じて吾々の眼に落ち來たる事實は、新たに打ち立てられるべき社會勢力の中心が、宮廷、政府乃至その周圍の貴族の上にあつまりつつあつたといふことである。上に述べた諸方面の現象に於いて、宮廷、政府乃至貴族は、いつでも新傾向の先驅者であり、また實行者であつた。新文化の傾向があつまり行くところは、要するに寺院外のそれ等上流の俗人の集團であつた。十八世紀の文學が新たに見出だすべき讀者公衆は、宮廷、政府、乃至貴族の社會にほかならなかつた。かくの如き社會と文學との關係が確實に成立するに至つて、文學批評もまた漸くその萌芽を發したのである。

ПРИМѢЧАНІЯ.

1. А. Н. Пыпинъ: Исторія Русской Литературы, Томъ 3, Спб., 1911. Глава 4 и дальше, главнымъ образомъ Гл. 6 и Гл. 8.
   В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Часть 4, Москва, 1915. Лекція 68 и Лек. 69.
2. .....естественно предположеніе, что и въ этой области, какъ и въ позднѣйшей искусственной поэзіи, дѣйствовалъ также личный поэтъ, особливо одаренный, владѣвшій фантазіей и богатствомъ языка, и только позднѣе его пѣсня въ силу своихъ достоинствъ обобщалась, видоизмѣнялась и тогда уже становилась „народной".
   А. Н. Пыпинъ: Исторія Русской Литературы, Т. 3, Гл. 2, стр. 77.
3. Устная словесность.
4. Устная литреатура.
5. Народная словесность.
6. Словесноетью вообще обыкновенно называютъ всю совокупность умственныхъ произведеній народа, выраженныхъ въ словѣ.
   И. Порфирьевъ: Исторія Русской Словесности, Часть 1, Казань, 1909. Введеніе, стр. 3.
7. В. В. Сиповскій: Исторія Русской Словесности, Часть 1, Выпуск 1, Спб., 1912. стр. 1-2.
8. Письменность.

9. Письменная словесность.
10. Письменная литература.
11. Литература.
12. Возможно, разумѣется, спокойное, внѣ оцѣнки лежащее, безстрастное изученіе сухихъ былинокъ литературы, всей той труды ремесленныхъ подѣлокъ изъ слова, которая выбрасывается на книжные рынки; и если какая-нибудь изъ нихъ оказываетъ сильное вліяніе на общество, то какъ бы ничтоженъ ни былъ ея эстетическій удѣльный вѣсъ, она непремѣнно должна быть наукой учтена,—но какою наукой? Не исторіей литературы, а исторіей общественности; это будетъ уже исторія читателей, а не писателей, это будетъ уже соціололія, а не словесность..... И такъ размежеватьса необходимо: одно дѣло—вліяніе слова, другое дѣло—самое слово.
Ю. Айхенвальдъ: Силуэты Русскихъ Писателей, Выпускъ 1, 4-ое изданіе, исправленное и дополненное, Москва, 1914. Вступленіе, стр. 10.
13. В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Часть 3, Москва, 1916. Лекція 53, стр. 330 и дальше.
П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Часть 3, Выпускъ 1, Спб., 1909. стр. 94 и дальше.
14. Византія.
15. Третій Римъ.

16. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Часть 3, Выпускъ 1, стр. 28-93.
17. Итакъ, греческое вліяніе было церковное, западное—государственное. Греческое вліяніе захватывало все общество, не захватывая всего человѣка; западное захватывало всего человѣка, не захватывая всего общества.
В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи. Часть 3, Лекція 53, стр. 335.
18. Люборуссы.
19. Русскіе полуфранцузы.
20. Галломаны.
21. Вольнодумцы.
22. Вольтерьянцы.
23. Западники.
24. Славянофилы.
25. Пушкинъ: Клеветникамъ Россіи, 1831.
Тютчевъ: На взятіе Варшавы, 1831.
Вл. Соловьевъ: Панмонголизмъ, 1894.
Его же: Три разговора, 1899-1900.
М. Горькій: Двѣ души, 1915.
Андрей Бѣлый: Петербургъ, 1916.
А. Блокъ: Скиѳы, 1919.

26 —Безъ публикой невозможна никакая литература.
В. Г. Бѣлинскій: Рѣчь о критикѣ А. Никитенко, 1842. Избранныя Сочиненія В. Г. Бѣлинскаго, Т. 1, изд. 2-ое, Спб., стр. 1907, 665.

27. А. Н. Пыпинъ: Исторія Русской Литературы, Т. 3, Гл. 10, стр. 433.

28. А. Н. Пыпинъ: Исторія Русской Литературы, Т. 2, Гл. 4, стр. 178-180.
П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, стр. 191.

29. Борисъ Годуновъ родился ок. 1551 г., воцарился 1 сент. 1598 г., умеръ 13 апр. 1605 г.

30. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Часть 3, Выпускъ 1. стр. 103.

31. Котошихинъ: „Для науки и обученія въ иныя государства дѣтей своихъ не посылаютъ, страшась того: узнавъ тамошныхъ государствъ вѣру и обычаи и вольность благую, начали бы овою вѣру отмѣнять и приставать къ другимъ, и о возвращенія къ домамъ своимъ и къ сродичамъ никакого бы попеченія не имѣли и не мыслили".
Тамъ же.

32. В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Часть 3, Лекц. 53, стр. 339.

33. Не безъ религіозной робости отважились въ Москвѣ на это увеселеніе, „бѣсовскую игру, пакость душевную," по воззрѣніямъ сторогимъ блюстителей истаго благочестія. Царь Алескѣй совѣтовался объ этомъ съ духовникомъ, который разрѣшилъ ему театральныя зрѣлища, приводя въ оправданіе примѣры византійскихъ императоровъ.
Тамъ же, стр. 351.

34. „Нѣмецкая слобода," т-е. „Ново-нѣмецкая слобода." слобода—село свободныхъ крестьянъ.

35. „Всякій край для смѣлаго—родина, какъ рыбѣ—море".

36. Лютеранское вѣроисповѣданіе.

37. Артамонъ Сергѣевичъ, 1625-1682.

38. Греческій и церковно-славянскій языки.

39. Царьградъ, т.-е. Константинополь.

40. Русскій инокъ. Филоѳей писалъ вел. кн. Василію, отцу Грознаго: „Внимай тому, благочестивый царь! Два Рима пали, третій—Москва стоитъ, а четвертому не бывать. Соборная Церковь наша въ твоемъ державномъ царствѣ одна теперь паче солнца сіяеть благочестіемъ во всей поднебесной; всѣ православныя царства собрались въ одномъ твоемъ царствѣ; на всей землѣ одинъ ты—христіанскій царь."
В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Ч. 3, Лекц. 54, стр. 377.

41. Двуперстіе. или троеперстіе.
Двоеніе или троеніе аллилуіа.
„О, Господи, помилуй," или „Господи, помилуй".

42. Кіевская Духовная Академія при Братскомъ монастырѣ и Печерская Лавра.

43. Старовѣры.

44. Старообрядцы.

45. Расколъ Русской Церкви, 1666.
46. „Азбука".
47. „Часословъ".
48. „Псалтырь".
49. „Азбуковникъ".
50. „Прописъ".
51. С. А. Князьковъ и Н. И. Сербовъ: Очеркъ Исторіи Народнаго Образованія въ Россіи до Эпохи Реформъ Александра II, Москва, 1910. стр. 1—29.
52. ...Невѣжество, дѣйствительно, было матерью русскаго благочестія въ его старинной формѣ. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, стр. 253.
53. Кіевская Духовная Академія, съ 1615 Кіево-Братская Школа; кіев. митр. Петромъ Могилой преобразована въ Кіево-Могилянскую коллегію, въ 1631. съ высшими классами философіи и богословія.
54. Андреевсій монастырь.
55. Ѳедоръ Михайловичъ Ртищевъ, 1625—1673.
56. Симеонъ Полоцкій, 1628—1682.
57. Школа для Грамматичнаго Ученія.
58. Курляндія.
59. Сильвестръ Медвѣдевъ.

60. Преподаваніе „грамоты, словенскаго ученія и латыни".
61. Греческое училище при Московской типографіи.
62. Славяно-греко-латинская академія.
63. В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Ч. 3, Лекц. 55, стр. 407, 408.
П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 3, В. 1, стр. 109, 110, 114; Ч. 2, стр. 251-267.
64. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, стр. 291.
65. Епифаній перевелъ географію, „Книгу врачевскую анатомію," „Гражданство и обученіе правовъ дѣтскихъ", т.-е. сочиненіе о политикѣ и педагогіи. Сатановскій перевелъ книгу „О градѣ царскомъ", сборникъ всякой всячины, составленный изъ греческихъ и латинскихъ писателей, языческихъ и христіанскихъ, и обнимавщій весь кругъ тогдашнихъ ходячихъ познаній по всевозможнымъ наукамъ, начиная богословіемъ и философіей и кончая зоологіей, минералогіей и медициной.
В. Ключевскій: Курсъ Русской Исторіи, Ч. 3, Лекц. 53, стр. 356.
66. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 3, В. 1, стр. 111.
67. Какъ радуется женихъ при видѣ невѣсты своей, такъ радуется писецъ при видѣ послѣдняго листа списанной имъ книги; какъ радуется купецъ полученію барыша, или кормчій —прибытію на пристань, или странникъ—возвращенію въ отечество, такъ радуется и списатель книги окончанію своего труда.

С. Ф. Либровичъ: Исторія Книги въ Россіи, Часть 1, изданіе 2-ое, Птр., 1914. стр. 7.

68. А. С. Пушкинъ: Борисъ Годуновъ, 1825.
69. Іоаннъ Васильевичъ, царь и великій князь Всея Руси, проз. Грознымъ, 1530-1584.
70. Иванъ Ѳедоровъ, ум. въ 1583.
71. С. Ф. Либровичъ: Исторія Книги въ Россіи, Ч. 1, стр. 53-56.
72. Печатный Дворъ.
73. „ Апостолъ ".
74. С. Ф. Либровичъ: Исторія Книги въ Россіи, Ч. 1, стр. 127.
75. Евье, въ Виленской губерн. Съ 1612 по 1812 здѣсь была типографія, основ. Б. Огинскимъ, въ которой печатались славянскія книги.
76. Мелетій Смотрицкій, 1578-1633: Грамматика Словенская.
77. Вильна, губернскій городъ.
78. Михаилъ Ѳедоровичъ, первый москов. царь изъ рода Романовыхъ, 1596-1645.
79. „ Псалтырь ".
80. „ Часовникъ ".
81. „ Евангеліе ".
82. „ Служебникъ".
83. „ Минея Общая ".
84. Алтынъ. Копейка. Рубль.

85. Десть.
86. Василій Федоровичъ Бурцевъ или Бурцовъ, книгопечатникъ москов. типографіи 1633-1642; ставилъ станки, рѣзалъ буквы.
В. Бурцевъ: „ Букварь языка словенскаго, сирѣчь начало ученія дѣтямъ, хотя имъ учиться чтенію богослужебныхъ писаній, съ молитвами и со изложеніемъ краткихъ вопросовъ о вѣрѣ ".
87. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, стр. 290.
88. „ Курантъ ".
89. „ Столбцы ".
90. „ Переводы съ вѣдомостей, присылаемыхъ изъ Польши, о разныхъ въ Европѣ военныхъ дѣйствіяхъ и мирныхъ постановленіяхъ ".
91. Московская синодальная библіотека.
92. „ Ученіе и хитрость ратнаго строенія пѣхотныхъ людей ".
93. „ Уложеніе царя Алексѣя Михайловича".
94. „ Лексиконы славенорусскій и именъ толкованіе ".
95. Львовъ; городъ принадлежалъ Польшѣ до 1772.
96. Раскольники.
97. „ Библія ".
98. „ Синопсисъ или краткое собраніе отъ разныхъ лѣтописцевъ: о началѣ Славяно-Русскаго

народа и первоначальныхъ князяхъ богоспасаемаго града Кіева, о житіи святаго благовѣрнаго великаго князя Кіевскаго и всея Россіи первѣйшаго самодержца Владимира, и о наслѣдникахъ благочестивыя державы его Россійскія, даже до пресвѣтлаго и благочестиваго государя нашего, царя и великаго князя Алексѣя Михайловича".

99. Иннокентій Гизель, архимандритъ Кіево-Печерской лавры.

100. Новгородъ.

101. Енисейскъ.

102. „И зло и благо исходить на чадъ не по естеству отъ родителей, а отъ ученія. Учиться же слѣдуетъ каждому: и монаху, и мірянину; чтеніе богослужебныхъ писаній всѣмъ полезно, и мужчинамъ и женщинамъ".

103. Ѳеодоръ Алексѣевичъ, 1661-1682.

104. „Считаніе удобное, которымъ всякій человѣкъ, купующій или продающій, зѣло удобно изыскати можетъ число всякія вещи; а како число вещей и вещамъ число цѣчы изыскивати, и о томъ, читая въ предисловіи къ читателю совершенно познаети".

105. „Оглавленіе книгъ, кто ихъ составилъ".

106. „Исторія или дѣйствіе евангельскія притчи о блудномъ сынѣ, бываемое лѣтъ отъ Рождества Христова 1685 г.".

107. „Минеи-Четьи или житія святыхъ".

108. „Великое зерцало".

109. С. Ф. Либровичъ: Исторія Книги въ Россіи, Ч. 1, стр. 146 и дальше.

110. Зиновій Отенскій, умеръ 1568. „Я думаю,—пишеть онъ,—что вводить изъ общихъ народныхъ рѣчей въ книжныя рѣчи—естъ лукавое умышленіе христоборцевъ или людей, грубыхъ смысломъ; приличнѣе, по моему, книжными рѣчами исправлять общенародныя рѣчи, а не книжныя народными обезчещивать".

П. Милюкокъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, 195.

111. Е. С. Истрина: Руководство по Исторіи Русскаго Языка, изд. 2-ое, исправленное, Птр., 1917, стр. 77-79.

112. П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2, стр. 186-187.

113. „Повѣсть о Саавѣ Грудцынѣ".

114. „.....

.....

Здрава буди, душа моя, многія лѣта
И не забывай праведнаго твоего обѣта,
Какъ мы съ тобой передъ Богомъ обѣщались,
Въ короткое время перстнями помѣнялись
И вѣнцы на главахъ нашихъ имѣли златые
Во дни мимошедшіе, радостные, святые!
Почасту, свѣте, меня вспоминай,

Наипаче же въ молитвахъ не забывай."

„И такъ-то мнѣ по тебѣ тошно!
Какъ было бы можно,—
И я бы къ тебѣ полетѣлъ,
И къ тебѣ бы, душа моя, прилетѣлъ!"

В. В. Сиповскій: Исторія Русской Словесности, Ч. 1, В. 2, 8-ое изд., Птр., 1917. стр. 242.

115. Этотъ моментъ важно отмѣтить, такъ какъ введеніе любовнаго элемента было первымъ завоеваніемъ, сдѣланнымъ литературой у жизни, и первымъ пріобрѣтеніемъ, заимствованнымъ жизнью у литературы.

П. Милюковъ: Очерки по Исторіи Русской Культуры, Ч. 2. стр. 191.

露西亞文學概論

一　口碑の文學

今日では、文字を離れての文學といふものは考へられないほどになつてゐる。しかしロシヤで文字の用ひられるやうになつたのは、さう古いことではない。キリスト紀元後十世紀の終りに近く、キリスト教が異教のロシヤへ入り込んで來ると同時に、文字もまたはじめてロシヤで用ひられるやうになつて來たのである。しかし、文字はなくとも、人間の生活に、一日も詩のない日はあり得ない。文字はなくとも、自然と人間との生活に關れて、その消息を人に分ち、その感興を共にするといふ欲求は、一日として動かすにはゐない。文字を用ひることを知らぬ人々の間にも、口から耳へ傳へられ、記憶の力によつて、ひとり同時代の人々の間にばかりでなく、幾世代相承け相傳へて來た一種の詩——文學が、キリスト教傳播以前に於いて、既に久しく存立してゐたのである。これが卽ち一般に、

1　口碑文學

として知られてゐるところのものである。

この口碑の文學は、或はさまざまのお伽噺や、或は傳說や、謎や、俚諺や、民謠などの形で、今日に至るまで、ロシヤの國民の間に、一種の文學として、言葉の藝術として、卽ち一つの力として生きてゐる。幾世代の間にいつの間にか積もりに積もつて來たところのこれ等の夥しい口碑の文學は、文字に書かれた文學に比べると、その內容にも形式にも重要な區別がある。一般に言へば、文字出現後の文學は、ともかく個性的特徵を帶びてゐる。それの普及傳播も保存も、文字により、進んでは印刷術の手段によつて行はれるのであるから、その作品の本文は大體に於いてさうむやみに變つたりはしない。それに反して、口碑の文學は、文字といふものの助けがなく、ひとへに口傳へにより、記憶によつて保存もせられ、普及もせられたものであるのだから、永い間に、いろいろの人の口から耳へと傳へられて行くうちには、隨分とんでもない覺えちがひや間ちがひがいつの間にやら入り込んだに相違ない。だんだんに忘れられた部分もあるであらう。作りかへるともなく作りかへられた部分もあるであらう。本來は別々のものが一つに混合せられたやうなものもあるであらう。それが永い間のことであるから、全く時代を異にしていろいろの部分が混入し、時の辻つまのあはない、時代錯誤も少からず出來てゐるであらう。勿論これ等の口碑の文學といへども、やはりその最初には、一人一人別々の作者詩人があつてつくられたものに相違ないのであるが——さういふ天分の豐かな人人の創造であつたのに變りはないのであるが、而してそれ等の人々は、大抵はそれによつて衣食するところの職業的な詩人や作者であつたことに於いて、後の時代の詩人たちと原則的に變りはないのであるが、ただ、口碑文學の作者たちは、その作者としての名前を出すといふやうなことがなかつたのである。文字を用ひる

ことすら知らない時代の社會では、生活の條件が大體一樣であつて、特に一人一人の個性をあらはすといふやうな機會も遙かに少く、生活の單純なのにつれて、人生觀も殆ど一樣であり、作品の內容も、一般共通の見解を反映し表現するといふ傾きが多かつたのである。內容の上からも一般に集團的性質を多分に帶びてゐたと言へる。個人の特殊の感情よりも、寧ろ多く集團に共通の感情を反映し表現する傾きを持つてゐた。かりに最初は作者の個人的な感情や見解がところどころに介在してゐたにしても、それが今日のやうに文字に書かれて印刷せられてゐるのでなく、口から耳へと、幾世代の間に傳へられて行くのであるから、その間には自然にさういふ個人的特徵は削り取られ洗ひ流されて、最も多く集團生活に共通する部分だけが、最もよく記憶もせられ、永く傳へられもして來たわけである。かういふ次第で、集團生活に一般共通するところの趣味に適つたものだけが永く殘存するやうになり、個人的創造の鋭角は、すべて時の力や集團の共通の興味によつて滑らかに磨りへらされて行つた一方で、その技巧の方面に於いても、これと同じ理由から、一般共通の形、集團的に磨き上げられた技巧の形が、おのづから出來上つて來たのである。民謠やお伽噺などで絕えず單調な繰り返しの文句を用ひたり、殆どきまり切つたやうな形容詞句をいつでも用ひてあつたりするのなどが、その例である。

ロシヤに於けるロ碑の文學は隨分豐富であつて、さまざまの場合に（異教的な季節季節の祝祭や、婚姻葬送などうたはれた民謠、お伽噺、歷史的な傳說や神話的英雄の事蹟をうたつた物語歌、俚諺など、その種類も少くないのである。その當時に於ける民族生活の全般の表現とも見られる。尤も今日では、このロ碑の文學ですら、當時の國民もしくは民族の全體の生活を表現したものではなく、やはりその當時に於ける有力な

支配階級の生活の興味が中心となつてゐると考へられ、この見解がほぼ認められてゐる。殊に、キリスト教傳播以後に於いても、口碑の文學は勿論尙存續してゐたのであるが、その時代では、口碑文學の作者は一層職業的な性質を帶びて來た。當時の有力な王侯の軍營には、それぞれ所屬の詩人があつて、その軍旅の哀歡、戰場の功名勇武をうたひたたへたのであつた。ロシヤの各地をうたひあるく遍歷の歌うたひ傳說や歷史を物語る語り部、死者を悼み哀しみつつ野邊送りに隨ふ泣き女、それ等はいづれも當時に於ける職業的詩人として見られるものである。これ等の職業的詩人が、おのづから當時に於ける武力や財力での支配階級の興味を滿足させたであらうことは、もとより容易に想像せられるところである。

口碑の文學が、文字によつて書きとめられるやうになつたのは、ずつと後の時代のことである。これが口碑文學の研究の第一歩であつた。口碑文學の研究は、ロシヤでは十九世紀の三十年代に至つてはじめて起つたのである。從つてこの研究に着手せられるまでに口碑文學の多くの作品が忘れられ失はれてしまつたであらうことは勿論である。口碑文學は、その存在の久しい間に、或はキリスト教の、或は外國の書物などからの影響を受けながら、やはりロシヤ國民性の特色であるといはれるリアリズムの精神を失はず、現實生活の鮮やかな表現がその中心を一貫してゐるのである。

十世紀の終りになつて、キリスト教の傳播とともに、口碑文學は教會からの壓迫を受けるやうになつた。教會の目から見れば、民族の間から生れた口碑の文學は、異教的精神の巢くふところにほかならなかつたのである。教會が口碑文學を忌み嫌つたことが、口碑文學の發達成長を自然に阻止することになつたのは勿論であるが、一方から言へば、それによつて、キリスト教の傳播とともに行はれるやうになつて來た文字に書

かれた文學と口碑の文學との交渉關係を絶ち、從つて、文字に書かれた文學は、口碑の文學から、その清新素朴な力の影響刺激を全く受け得ないことになつたのである。文字に書かれた文學が、口碑文學のさういふ刺激を受けるやうになつたのは、十八世紀の終りから十九世紀の初めにかけてのことである。卽ちロマンティシズムの精神が、自國國民の過去の生活に、純眞素朴な力を見出ださうとするやうになつて後のことであつた。十九世紀最初の詩人プーシュキンの如きは、口碑文學から最も多くのものを得たと言つてよい。

口碑文學は要するに

2　異教思想の文學

であつた。天地自然との交渉關係に於いて、異教的な古代スラヴ（ロシヤ）民族は、自然とその悲哀をともにした。彼等にとつて自然は母であるか、さうでなければ繼母であつた。異教的な古代スラヴ民族にとつて、自然は自己の生活に直接の利害關係を有する絶大の力で、生活に對する恩澤も脅威もことごとくそこから發して來る。自然の美を樂しむといふ心持ちが、その時代の民族になかつたとは言へないが、それは直ちに生活の安定を保證する力として、またはそれを破壞し脅威する力として、その觀念に結びつけられて受け入れられたであらう。彼等にとつては、自然の神祕力、自然のうちに籠れる生ける魂が、いかに今日明日の生活を支配するかが、何よりの心がかりであつたであらう。この心がかりは、彼等の間に巫女の出現を見た。生ける水、死せる水による占ひともなつた。人間の運命に關する豫言者なども一般に尊敬せられた。千年斧鉞を入れぬ大森に棲む惡性の魔女バーバ・ヤーガはお伽噺によつて言ひ傳へられてゐる。かういふ異教的な思想に基いてゐる口碑の文學が、キリスト教會から敵視せられたのは當然であつた。ロシヤの神話的傳說は、ギリシヤ神話のやうな整然たる一つの系統を有してゐないが、「光」、「闇」、「天」、「大

地」、「太陽」、「雷電」、「風」、「虹」、「火」、「水」などは、あらゆる人間らしい感情を持つてゐて、口碑文學の主要な人物となつてゐる。自然宗教の中で最も重要な位地を占めてゐるのは太陽である。太陽は光りと溫暖と食物との本源であつて、その力の增大と減少とは、生活の上に直接の重大な影響を與へたのであるから、從つて舊歷十二月十二日の冬至と六月九日の夏至とは、太陽を中心とする二大祝祭となつてゐたのである。太陽の力によつてはじめて生み出だすものは大地である。「母なる大地」は、太陽の力の最も强大な夏至の頃に至つて、太陽と結婚する、その夜は凡ての自然が、特に祕密な力を得ると考へられた。或は樹の神は、身長の伸縮が自在であつて、木魂を叫び、夜は大笑して旅人を驚かすと考へられた。水の神は白髮の老人が、常に川の淵や湖の底に棲み、或は水車の車にかくれてゐて、人を溺らせたりすると考へられ、水に花冠を投じてその流れ行く姿によつて吉凶をトすることなども行はれた。或は轉生の思想から、娘は死して白樺やポプラの木となると考へられたりした。教會は一切の惡が肉に宿り、一切の善が靈に宿るとして、地上のよろこびを以て惡魔のよろこびとして否定した。從つて、單に神話的自然宗教的な歌謠や傳說に對してばかりでなく、いろいろの祝祭に伴ふ民庶の遊戲などに對してさへ壓迫を加へたのである。ギリシヤ正教會のこの種の壓迫は十八世紀にまで及んでゐる。この事は、民庶の間に生れた異教的思想とそれに基く口碑の文學とが、いかに力强くその壓迫の下に在つて生きのびて來たかをたまたま反證するとも言へる。而してこの異教思想とキリスト教との衝突は、自然に二重信仰の形をとつてあらはれるやうになり、歌謠や傳說などの中にも、不思議な混交の姿のままに傳へられてゐるものが少くないのである。

文字による文化の輸入發達とともに、社會の上流が主として西ヨーロッパの影響の下に生活するやうにな

太陽崇

り、古代の異教的思想や口碑の文學は、專ら農民の間に保存せられるに至つたのは、自然の成り行きである。しかしながら、その西ヨーロッパ的文化を受けた社會の上流——知識階級が、十八世紀末から十九世紀の初めへかけて、清新素朴な國民的要素を、久しく忘れられてゐた異教的な口碑の文學から汲み出して來たことは、前にも言つた通りである。

二　中世の文學

3　キリスト教の傳播と文字　十世紀の終り（九百八十八年）にキリスト教がロシヤの國教となるとともに、文字によつて書き記された文學も漸くあらはれるやうになつて來た。

文學が書物に書き記されるためには、言ふまでもなくそれの符號としての文字がなくてはならない。キリスト教が古代ロシヤの住民の間に事實上ひろがつて行つたのは、既に九世紀の頃であつた。しかし勿論その頃のロシヤに住んでゐたスラヴ民族の間には文字といふものは用ひられてゐなかつたのである。從つて文字によつて書き記された文學もまた存在してゐなかつたのである。しかもキリスト教の教會では、宗教上の儀式を行ふための書物がなくてはならなかつた。そこで當時のロシヤに住んでゐたスラヴ民族は、言語の上で自分たちと近い南方スラヴ民族の、就中もつぱらボルガリヤ人の文字を借りて用ひた。ボルガリヤ人は既に九世紀の後半期に於いて文字を用ひてゐた。その文字はマケドニヤの貴族の子であつた學問キリール（八二

◎ ブルガリア文字から進化す。

18c 末—19c 初

七――八六九）の考案に係るものであつた。かやうにして南方スラヴ民族から借りて用ひた宗教上の書物こそ、ロシヤに於ける文字に記された文學の起源を開いたものであつた。尙教會用の書物のほかに、直接それと關係のない書物も多少は輸入せられて來た。それは、宗教上の書物ではあるが、直接教會の儀式とは關係のない聖者の傳とか、歴史上の著述とか、哲學上の書物とか、そのほか雜多の知識や物語などをあつめたさまざまの文集である。これ等は凡てビザンチウムの學藝であつて、ボルガリヤ人など南方スラヴ民族は、單にそれをロシヤに傳達する役目を果たしたものに過ぎない。今日まで傳へられてゐる、文字に記されたロシヤの典籍の最古のものは、當時のロシヤの重要な文化的中心であつたノヴゴロド市の城代オストロミルのために、千五十六年から七年へかけて、一人の僧の手によつて筆寫せられた福音書であつて、「オストロミロフの福音書」として知られてゐるものである。その言葉は、古代ボルガリヤ語即ち通常古代教會スラヴ語と呼ばれてゐるところのものである。

4　中世の文學　文字に書き記されたロシヤ出來の書物（ビザンチウムからの寫し傳へでないもの）は、やはり宗教上の教訓とか、聖書傳とか、年代記とか、旅行記とかいふものが、その主なものであつた。キリスト教の傳播とともに書物が用ひられるやうにはなつても、文字を習得することの出來る階級は、少數の王侯貴族のほかは專ら僧侶であつた。キリスト教以前からの異教思想とキリスト教との接觸に伴ふ二重信仰や、キリスト教からの異教思想への壓迫のことは、前にもちよつと言つて置いたが、この事情に促されたキリスト教的立ち場からの破邪顯正的な、教訓的なものこそ、當時の文字ある人々の手によつて書かれた書物の內容を成してゐたのである。この事實は、一面知識階級と一般庶民との間の爭ひとも見られるとともに、とり

も直さず、當時の有力な支配階級の思想の擁護や普及のために、文學や學問が用ひられてゐたことを語つてゐるのである。

堅固な信仰の力を以てさまざまな人生の艱難を克服して行つた聖者高僧の傳記は、十一二世紀頃の讀みものの中でも廣く行はれた方であつて、ひとり眞實な感情の人を打つばかりでなく、當時のロシヤ人の生活狀態を描いたものとしても興味がある。キーエフの學僧ネストル（一〇五六――一一一四）の書いた『フョードシイ尊者傳』の如きは、就中有名であるが、そこには、表面キリスト教の教へに歸依して心中異教的信仰を脫し得てゐない尊者の母と、尊者との、新舊思想の衝突が記してあつて、いはゆる「父と子」との爭ひの書も今も變らないことを思はしめるものがある。またキーエフ・ペチョールスカヤ大本山の生活を記したところには、當時の寺院の文化上の勢力位地の盛且つ大なりしことを想見せしめるものがある。當時の僧院は、決して單なる遁世者の隱れ家ではなく、風教上政治上の大膽な批評を提げて、俗世間を指導しようとしたものであることを知らしめるものがある。卽ちキリスト教思想は、當時に於ける最高の指導的勢力を保持して、それによつてあらゆる社會生活を統一して行かうとしたものである。

當時に於ける社會の中心勢力としての教會の生活と、國家の重要な出來事と、これ等を記錄した年代記的歴史的の著述は、十二世紀の初め頃にあらはれたのであるが、それ等は事件の實見者の物語や、言ひ傳へや、曆表などに記された記錄や、聖者傳や、寺院の記錄や、公文書や、凡そさういふものから取りあつめて編成せられたものであつた。それには、ノアの洪水以後、大地がその子等に頒ち與へられたことから說き起して、バビロンの塔が建てられて以來世界の國語が七十二に分れたこと、古代世界の地理、スラヴ民族の移動から、

千百十年の頃までに說き及んでゐるのもあつた。更にまた、キリスト敎の普及とともに、聖地、就中エルサレムへの巡禮旅行が行はれるやうになり、その旅行記もまた多く僧侶の手によつて書かれたのである。

これ等の書物の著作者は、殆どすべて僧侶であつた。文字は用ひられてゐても、印刷術の行はれなかつたその頃のロシヤでは、書物は筆寫によるよりほかはなかつたのであるが、その筆寫の勞を執つたのも殆どすべて僧侶であつた。當時の筆寫は、羊皮に一々正楷を以て書くのであるから、なかなか勞力も時間もかかる仕事であつた。ただ信仰の力がこの難事を成し遂げしめたのであつた。「花嬬がその花嫁を見てよろこぶやうに、寫字するものはその寫し取られた書物の最後の一枚を見てよろこぶ。商人が利得を受けてよろこぶやうに、また舵取が波止場に着くのをよろこぶやうに、更にまた、巡禮者がそのふる里に歸り着くのをよろこぶやうに、丁度そのやうに、書物を寫し取るものは、その勤勞の終るのをよろこぶものである」といふやうな言葉は、寫本の終りに、深い滿足の心を以て書かれてゐるところである。

この時代の文學は、歷史類も旅行記も悉く宗敎的見地から書かれたものであつた。歷史上の事變は、悉く神と惡魔との戰ひであり、國土に起るあらゆる不幸は神の懲らしめであつた。自然の現象もまた神の豫兆として見られた。文字に書かれた文學が宗敎的敎會的傾向を有する一方で、文學の詩歌的要素は、專ら口碑の文學にあらはれてゐたのである。

かやうな中での唯一の例外は

5『イゴリ軍の物語』である。この敍事詩は、十六世紀の筆寫文集の中から偶然に發見せられたものであつて、千百八十五年に於ける夷狄征討の失敗を主題としてをり、作者は分らない。ノヴゴロド侯イゴリは一

エルサレムへの巡禮

子ウラディミルを從へて夷狄征討に出で立つ。日蝕が先づ凶兆を示す。第一戰には大勝を得たが、第二戰は敗れてイゴリ侯父子は敵の俘囚となる。場面は變つて、キーエフ侯スキャトスラウは凶兆の夢見を部下に語り、ロシヤの諸侯に共力一致のないために、徒らに夷狄をして祖國を蹂躙せしめることを歎く。次の場面ではイゴリの妻ヤロスラウナが旭日を城壁に迎へて、日も、風もドゥネープルの河の流れも、わが夫の上を守れと祈る。それについでイゴリの敵手からの脫走、無事の歸還を以てこの敍事詩は結ばれてゐる。

この敍事詩では、南方の草原の自然が殊によく描かれてゐる。鳥や鳶の群れ飛ぶ曠原、鷲や鷹の天がける空、鵠(ふささぎ)の囀り、水には白鳥浮び、鷗飛ぶ。百千の草の風になびき、軍旅の荷車の夜にひびく轍の音。岸沿ひの軟草(やはらくさ)の上には、枝垂(しだ)れ白樺の哀しげに垂れかかる。日はかげりてイゴリの征路をとざし、夜の嵐は眠れる鳥を驚かす。野獸は叫び、凶兆の鳥は樹頭に啼く。血色なす朝の雲は、敗軍を豫兆す。イゴリ囚はれては草も悲しみに匍ひ、木も憂ひに折れ伏す。イゴリの無事の脫出には、河の流れもその靜かなる波に乘せていたはり、暖かき霧を立てこめ、もろもろの水禽これに從ひ衞り、烏も啼く音をひそめ、鳶も沈默す。啄木鳥は河流への道を示し、鶯は夜あけを知らす。

自然と人間との生活の交涉の直接にして親近なる點からも、想像の自由淸新な點からも、自然の豫兆を重く見てゐるやうな點からも、この敍事詩には多くの口碑文學的な異敎的精神が流れてゐる。當時の支配階級の中心的指導的思想であつたところの、キリスト敎の勢力に壓しつぶされてしまはないで、民族の間の素朴な想像力が、たまたま一個の天分ある詩人の手によつて自由な發顯を見出だす場合には、かやうな蒼古にして雄勁な作品として凝り成すに至るといふことは、頗る興味ある事實といはなければならないのである。

13c. タタール人侵入

キエフ

三　中世思想の動搖

十三世紀以後、韃靼人のロシヤ侵略とともに、これまで文化の中心地であつた南方キーエフは漸くその勢を失つて、文化の中心は東北に移るに至つた。モスクワは政治上の中心として、全ロシヤを支配するやうになり、殊にコンスタンチノープルの陷落（千四百五十三年）以後は、ギリシヤ正教を信奉する民族の盟主として、第三のローマを以て自から任ずるやうにさへなつたのである。國家としての統一が政治上漸く堅固となるにつれて、國民的自負心、寧ろ國家的自負心ともいふべきものが強くなり、外國、就中西ヨーロッパの諸國に對しては、西ローマ系統のローマ天主教を信奉する國家として、おのづから敵意を抱懷するに至つたのである。

モスクワは、ロシヤ全土を通じて、政治上には勿論、教會勢力の上からも、最高の位地を占め、全スラヴ民族全ギリシヤ正教徒の盟主を以て任ずるに至つたのであるが、この國家的自負心に相應するだけの文化教養には達し得てゐなかつたのである。寺院の外では、上流貴族の間に於いてすら、文字を讀むものの數は頗る少く、肝腎の僧侶さへも無學なものが多く、教育の事業は殆ど行はれてゐなかつたと言つてよい有樣であつた。文學上の述作の方面でも、やはり專ら教會的宗教的なものの多い中で、いくらかは歴史的の物語や政治上の著述らしいものも現はれるやうになつて來たのである。しかもこれ等は、モスクワが第三のローマで

あり、ギリシヤ正教的全民族の盟主であることを證明するためのもの、もしくはモスクワの統率的位地やそれの自信を搖がさうとするやうな、さまざまの他の勢力との對抗を、おのづから反映してゐるやうなものであつた。一方に於ける國家的自負心と、その一方に於ける文化的に低劣な實狀と、この二つの事實の間からは、そこに何かにつけて、自からを主張し、守り、防ぎ、抵抗するやうな情勢を生み出だささるを得なかつたであらう。

この免がれがたい動搖の一現象は、

6　異端の出現　であつた。ロシヤのうちでも、西方のノヴゴロドやプスコフは、古くから西ヨーロッパと交通を開いてゐた都市であるが、宗教上の異端は先づその二つの都市に發生して、漸くモスクワにも及んで來たのである。異端の徒の考へるところによると、宗教の上にも理性が第一に重んぜられなければならないと言ひ、教會の階級、儀式、教會の祕義を否定し、神と人との直接の交通を主張し、死者の復活を信ぜず奇蹟を否定し、合理的批評的態度を尊重した。また社會關係の方面では、僧院が土地と農奴とを所有することを非難し、その必要を認めなかつた。教權を以て國權を守り國家の統一を助ける、またそれがための教權であるといふ風にすら考へたところの、國家的教會說に對しても反對した。異端の出現は、十四世紀の半ば頃であるが、十五六世紀には、ローマ天主教や新教の教へがそこここに說かれ書物も俗世間的なもの非教會的なものが多く書かれ、宗教畫さへ漸く純藝術的な美しさを主とする傾きを加へて來た。その上に、モスクワの政府自身が、國家としての强みを加へて行かうとすればするほど、他の西ヨーロッパ諸國と相對抗して、武力でも財力でも優者の位地を占めなければならず、それには先づ西ヨーロッパ諸國の專門技術家を聘して、

Modern

軍事上工藝上の知識と技能とを學ばなければならなくなつてゐたのである。

社會生活のどの方面を見ても、舊來の宗教的教會的な原則の一點張りでは、生活の統一が出來かねるやうになつて來た。中世的たものの動搖が感ぜられて來た。それが感ぜられれば感ぜられるだけ、舊來のものを正しと信ずる人々は、その所信のために大いに起つて戰はなければならなくなつた。十六世紀に於ける教會附屬の學校教育の振興も、この戰ひのための準備であつた。十六世紀初めに於ける異端に對する壓迫は、苛烈を極めた。時代はあらゆる方面の事情から見て、批評的精神の萌芽を示しかけてゐるのに――驚異と懐疑とにまで成長しつつあるのに、教會は威嚇と責罰と迫害とで、これに臨まうとしたのである。十四世紀から十六世紀へかけての教會の歴史は、火と血との恐ろしい記錄に充ちてゐる。この時代に行はれた異端の徒に對する焚殺の刑の如きは、これを行ふものの側に於いてすら、さすがに心とがめがしたと見えて、彼等が平生憎み侮つてゐる西ヨーロッパの、スペインの宗教裁判の例をかり來つて、自家の行爲を多少とも辯護しようとさへしたのであつた。この殘酷な壓迫の力によつて、形の上の異端は屏息したやうに見えたが、それによつて當時既に目さめたところの知力的動搖を屏息させることは出來なかつた。强制的暴力によつて、個人の理性の權利を支配することは到底出來なかつたのである。

かくの如き新舊思想の衝突は、文字に書かれた著述の上にも、おのづから論爭的な傾向要素を多く加へるに至つた。その論爭は、當時モスクワを中心として形成せられつつあつた統一的國家主義と、舊來の群雄封建主義との利害であるとか、僧院の土地所有の問題であるとか、教會の經典の本文の誤謬や疑義に關するものとかさういふやうな題目についてであつた。これ等の題目についての論爭の間に、おのづからその論者の

個人的な感情の要素があらはれてゐることは、注目に値ひする。殊に經典の本文についての論爭は、最も激烈を極め、それを避けるために――つまり本文の筆寫の誤謬などをなくするためといふことが重要な刺激となつて、

7　印刷事業の創始　を見るに至つたのは、意味深い事實であるといはねばならぬ。ロシヤに於ける最初の印刷所は、モスクワ大主教マカリーとイワン烈王との力によつて、千五百五十三年モスクワに設置せられた。これ等の人々は聖書が正しく記され、それが全ロシヤに普及せられることを直接の目的として、印刷所を設けたのであるが、これもまたそのマカリーに從へば天啓であるとせられてゐる。

文學史上、またひろく文化史上重要なこの事業に直接當つたのはイワン・フョードロフ（？――一五八三）であつた。彼は印刷所設置以來約十年の間の準備を經て、千五百六十三年初めて使徒行傳の印刷に着手し、一年を經て千五百六十四年三月一日、ロシヤ最初の印刷本を出版するに至つたのである。この書はオランダ紙小形で二百六十七葉、黑と赤との二色刷であつた。しかしこの印刷事業の開始とともに、その仕事を失うに至つた無學な筆寫校訂の僧たちは印刷業者の迫害を試み、フョードロフの如きも一時逃亡のやむを得ないことさへあつたといはれる。活字印刷の最初が、かりに千四百五十四年秋ドイツのマインツで刷られた二通の贖罪祭であるとするなら、ドイツについでこの事業の起つた、イタリ、フランス、イギリスなどに比べても、ロシヤはこの點で何れの場合に於いても約百年内外の年月をおくれてゐたことになる。しかしともかくも、これで「人間の渴きを消すために溢れてやまない不思議の酒をしぼり出だす」（ドイツ最初の印刷業者グーテンベルクの言葉）泉は開かれたのである。

そもそもギリシヤ正教の中心を以て任じたモスクワが、ローマ天主教的西ヨーロッパを忌み嫌つたのは、主として宗教上の理由からであるのだが、西ヨーロッパの學藝は、前にも言ふやうに、全く排斥してはゐられなくなつてゐたのである。しかし尙、その學藝も、直接ローマ天主教の西ヨーロッパから受けるよりは、同じギリシヤ正教のキーエフから、そのキーエフの學藝として受け取らうとした。キーエフの學僧が聖典改訂のためにモスクワに來るとともに、演劇、詩歌、世俗的な物語の飜譯などが自然に持ち來たされ、それに模倣するものをも生じたのである。同一信仰の西南のロシヤ人を招いたといふだけにも、既に自己の無知の認識があり、自己の批評が見られるのであるが、千六百六十六、七年に書かれたコトシーヒンの『アレクセイ・ミハイロヰッチ治下のロシヤについて』と題するロシヤ生活の百般に亙る敍述の如きも、——たとへば貴族の婦人の無教育、家庭に於ける兩親の暴虐などの敍述なども、敍述即ち批評であつた。僧侶の無學を救ふため、ひいてはギリシヤ正教を擁護するためには、教會附屬の學校も設けられた。有名な學僧たちは自傳を書いた。新舊にかかはらず熱烈に論爭した。——かやうにして、何とかかとか言ひながら、新知識も、批評的精神も、客觀的現實的精神も、教育啓明の事業も、自己と他との對立の觀念即ち自意識も、いつの間にか養はれ、また現はれて來た。

その一方で、外國の使臣が將來したところの珍らしい娯樂や見世物（手品師、綱渡り、音樂師、戲奴など）も宮廷に入り、千六百六十四年には演劇も上演せられ、イギリス風の喜劇が迎へられ、變化の多い血なまぐさい、刺激的煽情的な場面がよろこばれた。冒險的な傳奇小說や、戀愛中心の物語や、諷刺的な現實肯定的な物語や、反禁慾思想を中心とした物語などの創作も二三ならず現はれて來た。日常生活の風俗習慣の上で

も、時計とか椅子とか大鏡とか肖像畫とか、近代的な便利安樂の要具が漸く用ひられ、實用的な科學的の知識や工藝の技術がひろく習得せられるやうになつた。政府とか貴族とかを中心とする社會は、教會の禁慾的嚴肅主義思想をいくらか憚りながら、國家生活や私生活の必要と愉快と安寧と、便利とのために、自然にその教會的勢力の支配から脫しようとする傾きを示して來つつあつた。これは社會の中心が教會から移動して、宮廷とか政府とか貴族とかの方へいくらかづつ傾いて來たことである。從つてそれに伴つて、宗教と學問とが分れようとして來たことである。即ちやがてまた文學が宗教的教會的の支配と束縛とから放たれて、自由の身にならうとして來たことである。要するに

8　現實の興味　が、ひろく人間の生活に行きわたらうとして來たわけである。

この傾向は既に十七世紀の文學に明らかにあらはれてゐる。當時彩しく行はれた創作の物語の中には、現實肯定の思想を大膽に描いたものが少くない。たとへば『極樂へ往つた醉つ拂ひの話』の如きもその一つである。ここに一人の大酒飲みの男があつて、生前は酒ばかり飲んでゐたが、それでも夜寢る時には神に祈ることは忘れなかつた。その男が死んで、どうやら極樂の門までは來たのだが、使徒ペテロ、パウロ、ダギデ、ソロモンや、ニコライ尊者たちはどうしてもその男を極樂の門の中へ入れまいとした。するとその男は、ペテロ以下それ等の聖者たちでも生前人間の世に在つたときには、いろいろの罪を犯したではないかと言ひ、その上隣人を愛せよといふキリストの教へを說いて、やつと極樂の門を通して貰ふ。しかも一旦極樂の門を通つたその男は、極樂でもなかなか上座を占めることになる。物語の筋は大體こんな單純なものである。この物語の中には、地上現實の肉體的生活は、必ずしもそれの否定——禁慾の生活でなければならぬといふこ

とはない。肉體の生活もそれ相應に充足させて差し支へないものである。人間の肉體的な自然の快樂を享受するといふことが、必ずしも極樂に入ることを妨げはしない。——かういふ思想が含まれてゐる。尤もそこには大酒飲みながらも神を信じ、隣人の愛の教へを信ずるといふ條件は附いてゐるのであるが、しかし、それは寧ろこの物語の興味の從屬的な部分であつて、一編の中心は、形式的な嚴肅な禁慾主義の否定に在ることと明らかである。更にまた、『サッワ・グルードツィンの物語』といふのがある。商人の子サッワは、その父の知人の妻に戀して、深く惑溺し、自分の弟の妻をした惡魔を無二の友として、それに魂を賣り、常にその助けを受け、あらゆる放蕩の生活に戯り、更にその惡魔とともに大魔王の國を訪れ、更に内亂の軍に從つては不思議の勇武をあらはして功名を立てる。後病んで神の赦しを受け、病癒えて僧となるといふのである。これもまた、物語の興味の中心は禁慾的生活への反抗に在つたと見られる。

四　近世的啓蒙時代の文學

ロシヤの中世期は、十七世紀の末を以て終りを告げたものと見てよい。大まかに言つて、ロシヤの近世期はピョートル大帝（一六七二——一七二五）の革新とともに始まつたのである。十八世紀はロシヤのルネッサンス（文藝復興）時代と稱しても差支へあるまい。

自分の習慣をあらためる國土は、永くは保たれないとは、モスクワの昔の人たちがよく口にしたところで

あつた。しかもピョートル大帝こそは、この無知な近視眼者流の惰懶を一掃して、國民的封鎖の自負心を粉碎したのであつた。彼はこれまで輕侮して來た外國人が、多くの點に於いてロシヤ人よりも優れてをることを、從つてこれを尊重して通交を結び、進んでこれに就いて學ばねばならないことを、否應なしに自國の國民に知らしめたのである。西ヨーロッパへの窓を開くためには、新文物新制度を急速に移植するためには、時には殘酷苛烈なほどのやり方で、舊來のものへの執着を固持する人々の抵抗を抑壓し、自から身を以てあらゆる方面の生活の革新を斷行したのであつた。

彼の革新は國家生活と社會生活との全面に亙つてゐたのであるが、國力を盛大富强にすることが、その中でも最も重要な中心題目であつた。しかしてそれがために第一に必要とせられたものは教育の振興普及であつた。彼は先づ千六百九十七年から始めて、オランダへ、イギリスへ、イタリーのヴェニスへ、造船航海のための留學生を送つた。軍事の研究にはフランスへ、鑛山事業のためにはサクソニーへ、司法行政の研究にはスキーデンとアウストリヤへ、相ついで學生を留學せしめた。次ぎには國内の學校教育を起した。在來あるものは少數の宗教學校に過ぎなかつた。教育の事業は悉く教會僧侶の手に委ねられてあつた。千七百一年モスクワに建てられた數學航海學校が、ロシヤに於ける最初の俗人の手による教育機關であつた。時代が先づ最も實利實用を必要としたために、最初に創設せられた學校は、一般的な教養のためのものでなく、特殊の工藝技術者を養成するためのものであつた。陸海軍々人養成の學校、醫者養成の學校などのほかに、ウラルの山地には、鑛山學校も設けられた。初等の教育の學校は千七百十四年に制定設置せられ、ピョートル在世中二十八箇所に開かれた。初等學校の教師には多くモスクワの航海學校卒業生が用ひられ、貴族と僧侶とも

子弟に對する義務教育として强制しようとし、それの卒業までは結婚することを許さず、卒業し得ないものは平の兵士として軍務に徴發することとした。しかしこの方法も多くは無效で、兩親は學校教育を厭ひ、生徒自ら多くは逃亡し、缺席者が多く、已むを得ず閉校するにさへ至つた。しかもピョートルは進んで學士院創設の案を立て、ドイツの學匠ライブニッツとヲルフとを招聘しようとさへした。この學士院は彼の死後千七百二十五年の冬遂にその創設を見るに至つたのである。

9　翻譯刊行と新文字　學校教育について、知識と文化との普及のために企てられたのは、出版の事業であつた。ピョートル以前にも既に印刷術の行はれてゐたことは前に述べた如くであるが、それによつて印刷せられたものは殆ど凡て教會用の書物であつて、教會と關係のないものは、やはり筆寫本としてしか行はれてゐなかつたのである。ピョートルは特にこの一般的な書物の刊行に留意し、ひろく普及させる目的で、主として西ヨーロッパからの翻譯書を出版せしめた。この事業についてはピョートル自から熱心に參與し、自から翻譯すべきものの選擇を行ひ、翻譯者を督勵した。彼は自からそれ等の原稿を校閲し、しばしばこれに自から添削の筆を加へた。彼が殊に重きを置いたのは、言語の明晰といふことであつて、古風な文章體でなく、平明な俗談平語の調を以てすべきことを命じた。この當時は、もとよりまだ言文不一致の時代であつたのだからピョートルは率先して言文一致を唱へ、口語體を用ふべきことを主張したのである。原則として方針としてのピョートルのこの主張は頗る正しく、その識見の卓拔を認めなければならないのであるが、事實の上では、これの實行はこの當時に在つては非常な難事であつた。その當時は、一方に於いては、ロシヤ語による正しい文章體といふものが全く成立してゐなかつた。教會用のスラヴ語脈の重苦しい古風な文體があ

つたばかりである。しかも他の方面で、日常の俗語は、日に新しくなりつつある複雜な事物の意味を傳へ得るまでにはなつてゐなかつた。その結果、ピョートル時代の書物に用ひられた用語は、多くは重苦しいものであつて、どうかするとその意味さへ通じかねるくらゐであつた。この文體の平明を缺いてゐるといふことは、今一つは、翻譯者がむやみに逐語譯をして、言葉の精神をつかむことをし得なかつたところからも來てゐたのである。ピョートル自からこの逐語譯を難じ、しばしば改譯を命じた。更にまた、外國の文物の輸入とともに、これまでのロシヤ人が全く知らなかつたところの外來の事物や思想の名稱には、已むを得ず外國語をそのまま用ひなければならないことも少なくなかつたのである。この外國語の混入が、一層國語の混亂を招いた點もある。しかも自國語で言ひあらはさうと思へば、適當な純ロシヤ語があるに拘らず、强ひて外國語を用ひたやうな場合も少なくなかつたのである。かういふ事實は外來の文化が新しく迎へられる時代には、どこの國に於いてもいつの時代にでも免かれないところであつて、日本の如きは明治維新以來今日に至るまでさういふ狀態がある程度まで續いてゐて、文體混亂を招いてゐる。

翻譯の事業に伴つて、自から工案して、今まで用ひられてゐた教會用の書物のスラヰヤン文字と違つた、いくらかローマ字に似寄つて新文字を制定するに至つたのである。それが今日用ひられてゐるロシヤ文字と同一のものである（極めて些細な變化はあるが）

この時代に翻譯せられた書物は隨分雜多の種類に亙つてゐるが、純文學上の著作は甚だ少ない。ピョートル自身も、時代も、專ら實利實用的功利的な傾向を有してゐて、その書物の多くは軍事、建築、機械に關するもの、數學、天文、地文に關するものであり、多少の歷史類、靑年訓、書簡文範風のもののほか、文學的

スラヴィヤン文字を改正

述作としては、イソップ物語とか、トロイ戰爭の物語とかいふやうな二三の古典的な作品に過ぎなかつた。

しかしながら、一般の書物が宗教的教會的性質からいさぎよく離れてしまつたといふことは、それが直接に文學の述作と交渉するところが少ないにしても、時代の知力的雰圍氣といふ點から見て、頗る重要な事實である。教會に於ける說教の題目にすら宗教的でない政治上の問題を取り扱ふものがあつたといふ事實の如きも、時代の興味の中心が、教會的宗教的なところから離れて、現實的功利的啓蒙的な方向に趨きつつあることを示してゐるといはなければならぬ。

10　啓蒙的時事評論　ピョートルの革新は、彼自身の性質からも、時代の必要からも、可なり急激な掃蕩的な全面的なものであつたのであるから、それに對して不滿不平を抱くものもまた甚だ少なくはなかつたのである。從つて、これ等多くの革新の反對者に對して、一面その非難攻擊に應酬し、他面その蒙を啓くために、革新の大義を說明する事が、この時代に於ける重要な社會的事業の一つとなつたのである。その結果はこの時代の文學著述の上に一般に時事評論的性質を帶ばしめることとなつた。ピョートルの革新は、ロシヤ人の生活の各方面に亙つて多くの新理解、新道德、新習慣を將來しようとした英雄的事業であるのだから、當時のロシヤ社會に於ける上下の各階級に亙つて、その耳目を聳動せしめたことは言ふまでもない。この革新は、精神的にも物質的にも、社會の各階級に對して、直接間接、未曾有の力の緊張を要求した一大事業であつた。少數の識者がこれに同感する一方で、舊習を墨守する大多數の識者と民衆との間にはこれに對する敵意と憎惡との感情が漲つてゐたでもあらう。「われ等は凡て、いかにわが偉大なる君主の勞苦するかを瞑のあたり見る。しかも彼は毫も功を奏せず。彼の望みに副ひて助くるもの多からざればなり。彼はよし十人

の力をあはせて山の上に引きあげんとするも、山の下は數百萬人ありて引く。」と言つた當時の有名な時事評論家ポソシュコフの言葉は、實狀を言ひあらはしたものであつた。舊來の名門の貴族は、ピョートルに拔擢せられた新參成上りもののにはか榮達をうらやみ憎みもしたであらう。官吏や軍人は、革新に伴ふ公務の繁忙と頻々として相つぐ軍役と、嚴格な規律とを忌み嫌つたでもあらう。僧侶は、總主教制がピョートルによつて廢せられ、教會の權力が政治の權力の下に屈服せしめられるに至つたことを恨みにも思つてゐたであらう。町民農民は、革新や外國との戰爭に伴ふ重稅や賦役に對して不平不滿を抱くやうにもなつたであらう。更に一般の社會生活の上からは、宗教上に異端異教の思想が勝利を得て、舊來の習慣風俗を破壞して行くことに對する反感や不安や危險の感じも、どことなく流れてゐたでもあらう。要するにそのめいめいの原因や理由は違つてゐても、革新に對する不平不滿の點では一つであつた。かやうな社會的情勢に在つては、これに對應して、革新の大業を擁護する必要がおのづから感ぜられざるを得なかつたのである。革新の避くべからざる所以を說き、その目的を說き、その利益を說き、結局この事業を是認せしめなければならない必要があつたのである。この說得はもとより非常な難事であつた。しかしまたそれだけに、力をこめて從事するに足る緊要事でもあつた。而してまた、これがためにはあらゆる文學上の能力をあげて用ひなければならないことでもあつた。時事評論は、かやうな社會的情勢の間に在つて、かやうな必要から發生せざるを得なかつたところのものである。それだから、その當時の文學的事業に關與する人々は、多かれ少なかれ社會時事の評論家らしい風格を帶びてゐる。誰も皆、政治上、社會上の、現代の生ける事實にその興味を集中したのである。

この時代の時事評論が、革新の利益を說き必要を明らかにする辯護的な方面と、革新の反對者に對する抗議、論駁の方面とを併せて有してゐたのは勿論である。この時事評論的興味――といふよりも寧ろそれの必要が、いかに時代のあらゆる方面で感ぜられてゐたかといふこと、從つて時事評論風の文章がいかにあらゆる方面に行はれてゐたかといふことは、次の事實によつても想像せられるのである。

ノヴゴロドの大主敎フェオファン・プロコポヰッチ（一六八一――一七三六）は、當時の社會に於いて稀に見る學僧であつたのだが、ピョートル大帝と國民との間の媒介者を以て自から任じ、その說敎を以て革新を辯護した。たとへば千七百十七年にピョートルが再度の外遊に際しては、その說敎で旅行と外國留學との利益を說き、重稅に對する不滿を鎭めるためには、艦隊建造が國家的緊要事であること、戱中交通運輸貿易上の必要、海と野とは交通のために神の作りしものであること、國防の大切なこと、バルチック海に港を得たスキーデンとの戰の效果などを列擧して說くといふありさまであつた。彼はまた曆法の改正、ペテルブルグの建都、元老院や宗務省の創設、更にひろく文敎の方面にも亙つて、その說敎によつてこれを辯護し說明することにつとめた。千七百二十一年の宗敎法規は專ら彼の手によつて編制せられ、一人の總主敎制を廢して、これに代へるに合議的な宗務省の設立を以てしたのである。この法規の中で、プロコポヰッチは當時の僧侶生活敎會生活の暗黑面を敍述し、新法規制定の已むを得ざる所以を示した。この暗黑面の敍述は、熱烈辛辣、おのづから一つの諷刺文學を成してゐる。この中で、彼は迷信打破の必要を說き、その原因を無知に在りとして、敎育の必要を力說し、學校の設立と敎科書の編纂と說敎の改善の必要を述べ、中世を野蠻蒙昧の時代として文藝復興期を讃美し、敎會的學問よりも一般的人文的敎養を遙かに重く見てゐる。

說敎の方面のことは勿論、公布の法規の如きものすら、かやうな時事評論風の形式と內容とを持つてゐて、その中に說明もあれば論難攻擊もあり、皮肉や諷刺さへもあつたといふ事實は、いかにも時代の特色を示すものであるといはなければならぬ。

宗敎法規に限らず、多くの法令にも評論風の說明が附け加へられてゐたのであるが、更にそのほか國家の生活の重要な出來事について、これをひろく國民に知らしめ、その出來事に對する國民の自覺的理解を促すために、ピョートルは千七百三年一月二日を以て、ロシヤに於ける最初の新聞紙を發刊した。その標題は、『モスクワ國及び諸他の隣接國に起れる、知識し記憶するに足る軍事上その他の事件についての報知』といふ長々しいものであつた。その記事の多くは外國新聞切拔の翻譯と官廳の報告で、簡潔な事實の敍述を主とし、詳細の說明を必要とする事件については、別に小冊子を發行した。ピョートル自からこの事業には深く興味を持ち、自から筆を執つて校正したものが今日尙レニングラードの『ピョートル大帝の家』（博物館）に保存せられてゐる。

時代の革新的氣運と公私各方面の生活に於ける變化とは、一般の有識者の間に、政治上社會上の興味を喚び起し、政治上經濟上その他各方面の生活に對する改革の意見を提出せしめるに至つた。これ等の改革意見は取りも直さず一つの時事評論であつたと言つてよい。それ等の改革意見乃至改革案は、政府の官吏からばかりでなく、官吏でも何でもない全くの一私人の間からも、しかもさまざまの階級身分の人々によつて提出せられたのであつて、ポソシュコフの如き純然たる農民階級に屬するものの上書をさへ見るに至つたのは、以てこの時代が重大な轉回機に遭遇して、社會のあらゆる方面をいかに深く廣く搖り動かしてゐたかを知る

に足るのである。時事に對するかやうな興味は、更にまた教會に於ける說敎などのあひだにも明らかにあらはれて來たのであるが、就中、敎會の方面で一種の時事評論家として見られるものは、ステファン・ヤヲルスキーとフェオファン・プロコポキッチとの二人である。千七百年、當時の總主敎アドリアンの死とともに、ピョートルは、「異端的」西ヨーロッパ文明を敵視して、一切の改革方針に反對したアドリアンの後繼者の任命を避けて、リャザンの大主敎であつたステファン・ヤヲルスキー（一六五八――一七二二）を以て總主敎代理とした。ヤヲルスキーは夙にローマの天主敎學校に學び、殊に修辭に通じ、雄辯宏辭を以て聽衆に多大の感銘を與へる力を有してゐるところの學僧であつた。ヤヲルスキーがピョートルの信任を得るに至つたのは偶然のことからであつて、ピョートルは彼を以て自己の改革の同志とも味方とも考へたのであつたが、本來ヤヲルスキーは學僧とは言つても、スコラ派の學徒であつて、定められた權威を金科玉條として、絕對にこれを信奉し、何等の批評をも加へることを許さなかつた。文藝復興期の文化は彼の認めないところであつて、コペルニカスの地動說の如きも、「夢」に過ぎずとなしたほどの人であるから、ピョートルの改革に對して、寧ろ多く不滿であつたのは自然である。殊に總主敎權の廢止その他によるところの敎會の權威の縮少窘束は、その最も不滿とするところであつた。更にまた、ピョートルがドイツの新敎に對して示した寬大な態度もまた彼のよろこばざるところであつた。從つて彼は容赦なくその不滿の情に基くところの意見をその說敎のうちに說き、ピョートルの改革に對する反對の態度を示し、ピョートルのその第一の妻及び皇子アレクセイに對する態度をさへも難じたのである。かくの如きヤヲルスキーが間もなくピョートルから黜けられるに至つたのは言ふまでもない。而してこれに代つたものは卽ちフェオファン・プロコポキッチ（一六八

一――一七三六）であつた。

彼もまた南ロシヤから出た學僧の一人であつて、ローマの天主敎學校に學んだことはヤヲルスキーと同樣であつたのだが、彼はかへつてそれによつて天主敎に對する否定的の態度をとるに至つた。千七百十六年ピョートルの命によつてペテルブルグに上り、以來終始一貫して改革の味方としてその力を致した。彼は命によつて『寺院法』、『王者の意志の眞實』（國法）などの制定編纂に主として當つたばかりでなく、初步の敎科書やうのものをも編纂したが、就中、ピョートルの改革の意義をひろく一般民衆に說き敎へたのは、その數多き說敎であつた。彼は多方面の敎養を有し、幾多の外國語を自由にすることが出來て、當時の諸外國の學者たちや、初めてペテルブルグへ招聘せられて來たドイツの學者たちとも、たえず交遊を保つてゐたといふ。從つて、當時のロシヤに於ける上流乃至先達の敎養ある人々とも概して親交を有してゐたことは言ふまでもない。ただ彼は、かういふ時代の新人に多く見るやうに、名譽心や復讐心も强かつたので、敵が多く、一生涯手段をえらばずそれ等の敵とたたかつたと傳へられてゐる。

プロコポキッチは、「ピョートル大帝と國民との間の仲介者」だといはれてゐるが、その仲介者としての面目の最もよくあらはれてゐるのは彼の說敎である。彼はその說敎の中で、ピョートルの改革の意義を說明し、當時の社會の耳目を聳動したほどのあらゆる重大な出來事について解釋評論を加へ、結局改革に對する非難攻擊に對して力の限り辯護を試みたのであつた。從つて、その說敎は敎會の說敎壇の上から說かれたものでありながら、その內容傾向に於いて、純然たる世俗的非敎會的な性質を帶び、卽ち時事評論としての性質を有するものであつた。たとへば、千七百十七年、ピョートルが再度の外遊に際しては、プロコポキッチ

はその說教の中で、およそ旅行の有する教育上の效果利益を說き、一方ではピヨートルの外遊をよろこばない保守派の人々を直接に辯駁し、一方では、それからひいて青年の子弟を外國に遊學せしめるピヨートルの新計畫への反對者を說服するといふやり方であつた。或はまた、千七百二十年の說教では、ロシヤにとつて艦船の必要缺くべからざる所以を說いてゐる。當時の貧しいロシヤにとつて、そのために要する多額の費用が、一般人民の重荷であり、從つてそのことにたいする不平のあつたことは想像せられるのである。彼はそこで、艦船の建造が平和の交通のために、商業貿易のためにいかに必要であるかを說き、神はそもそも何の目的を以てかばかり廣大な野原や、渺漫たる大海を創造したまうたのであるかを考へてみよ、これ卽ちこの世界のはてよりはてに至るまでの人々が、互ひに交通をなすためにほかならないではないかと說き、更に祖國の海岸を防禦する軍艦の必要については、「艦隊によつて防禦せられざる海岸は、或は縛られたる人の自由なる人と相搏つことの難きが如く、或はナイルの河沿ひに住める地上の動物の鰐を避くることのかたきが如く、卽ちその如く海に寄する敵と戰ふことは難し」と說いてゐる。スキーデンとの戰爭の終結については、ロシヤがバルティック海に於ける港を獲るといふことの、いかに國家的に必要有利であるかを述べ、そのためには、この年來の戰役の負擔もまた已むを得ない所以を說いてゐる。そのほか、舊來のロシヤの曆法が九月一日を以て新年の第一日としてゐたのを、一月一日を以て新年の第一日とするに至つたことも、首都を新たにモスクワから遷してペテルブルグに奏めたことも、元老院や宗務省（總主教廢止に代るものとしての）制定も、その他就中文敎普及の方面の改革事業についても、およそピヨートルの新改革はことごとくこのプロコポキッチによつて辯護せられ說明せられたと言つてよい。ピヨートルの改革の前と後とのロシヤには、

木造と黃金造りとほどの差があるとさへも彼は言つてゐるのである。彼の說教は概して措辭簡素であつて、無用の修飾がなく、實際の事實について說き、空疎な嫌ひがない。いかにも實用實生活の辨だといふ趣きがある。用語も一般明瞭ではあるが、その中にはさまで必要もないやうな外來語をしきりに使つてゐるのが目に立つ。それだけ彼は當時の新人でハイカラでもあつたのだが、またいかにも過渡期の混亂不安定をあらはしてゐるとも見られる。

千七百二十一年に制定せられた『寺院法』も彼の手によつて編纂せられたものであつて、ロシヤの法制史上重要な意義をもつてゐるのである。これによつて在來總主教一人の手中に在つた敎會寺院管理上の權威は、宗務省といふ僧侶團體の手に移ることになつたのである。この法制史上の著述が文學の歷史の上でもつところの意味は、そのうちにふくまれてゐる現實描寫の要素である。當時の寺院僧侶の生活の實狀就中その暗黑面を述べ、その缺點惡德を指摘してゐるところに、おのづから諷刺的な味ひがある、それだけ法律としての冷靜を失つてはゐるのであるが、またそれだけ鮮やかに生き生きとした當時の現實の一面の表現がある。この書の內容の眼目となつてゐるものは、敎權を以て行ふべき事業の性質を規定することであつて、その中心は迷信とのたたかひであり、迷信の由來の主なるものを無知に在りとし、それを根絕するためには、その唯一の手段として、文敎の振興普及をはからねばならぬといふのである。したがつてこの書の大部分は文敎普及の手段方法について述べてあり、就中敎牧者養成機關としての學林の創設、簡易な宗敎上の敎科書の編纂に重きを置いてゐる。彼は異端を中心とする殘忍な迫害や爭鬪が皆無知から來てゐると信じて、中世時代を以て野蠻の時代とし、全ヨーロッパを通じて敎學の最も衰へてゐた時代であると見、眞の文敎の光りは、千

四百年以來、即ち文藝復興期に入つてはじめて流れ入つたのであると言つてゐる。彼がこの書の中で立てゐる神學校の教科目について見ても、特に世間的な『外的な』一般教養のための學藝に重きを置き、神學方面の科目は最後の上級でのみ教へることになつてゐる。これ等の點もいかにも啓蒙時代の新しい宗教家らしい考であつて、ビョートル改革の辯護者說明者たるにふさはしい。普通の場合では、文學の歷史とは直接交渉するところのない筈のかういふ法制方面の文獻にいたるまで、その中に時代の生活に對する何等かの解釋と批評とを併せ含んでゐて、一つの時事評論としての特質を備へてゐるといふことは、いかにこの時代が啓蒙的であつたかを明かに示してゐるものである。また更に別の方面から言へば、文學がまだやつと教會的の勢力の束縛の中から解放せられたばかりであつて、十九世紀に於けるやうな自由な發達と分化とを成し遂げるまでに至らず、その時代の必要に應じてあらはれて來た「言葉の結合　のあらゆる種類の中に――說教や法典の中に於いてさへも、その何程かのあらはれを求めて行つたものと見られるのである。

政治上經濟上その他各方面の生活に對する改革意見が、やはり一つの時事評論の性質を帶びたものであつたことは上に言つて置いた通りであるが、その中には、國家の繁榮幸福を增進せしめるためのさまざまの方法手段や、それに關聯して舊來の因襲を一掃するための手段方法や、國家の經濟を、國民の富を、新財源を、いづれも增し且つ豐かにすべき手段方法や――これ等のさまざまの方策が述べてあつたのである。これ等多くの方策の中にも、一つは專ら西ヨーロッパの制度文物をそのままロシヤに持つて來ることによつて國力の充實增進をはからうとする一派があり、今一つは、西ヨーロッパの文明を輸入することは反對はしないが、主として現在のロシヤの缺點不足の批評から出立して、必ずしも外國人の力によらず、專ら自分たちの力によつて改善の道を講じようとする一派があつた。前に言つた農民ポソシュコフの改革意見の如きはその後のものにほかならない。

この時代の文學が、はじめて教會の勢力から脫するにいたつたことは前から言つて來たが、プロコポヰッチがいかに新しい改革の贊同者であつたにしても、とにかく彼自身教會內部の人であつたのだから、その點で全く自由だとは言へないところがあつた。その意味からいふと、ポソシュコフをこそ、ロシヤの最初の純然たる時事評論家だと言つてよい。イワン・ポソシュコフ（一六七〇――一七二六）はモスクワ近在の農民で、平生は主として商業に從事し、讀書を好み、知識欲强く、商用で各地を旅する間に、具さに當時のロシヤの各方面の生活の缺點暗黑面を觀察し、その現實の觀察見聞を錄したものが少くない。その中にも、三年の間人目をさけて力を入れて書いたと言はれるものが、千七百二十四年に書き上げた『貧富について』である、この書は勿論ビョートルにたてまつるために書かれたものであるのだが、ビョートルが生前それに目を觸れる機會があつたかどうかは明らかでない。とにかく、ビョートルの死（千七百二十五年）後間もなく、ポソシュコフは捕へられてペトロパウロフスク要塞の獄に投ぜられ、一年の後に獄死した。その捕縛の原因はおそらくこの書であつたであらう。『貧富について』は必ずしも經濟上の問題をのみ取り扱つたものでなく、當時のロシヤの各方面の現實を忠實に公平に書きあらはしたものである。彼は熱烈な愛國者であつて、しかもそれがために自國の暗黑面に目を蔽ふやうなことはなく、寧ろ主としてその方面に觀察を集中して、そこから根本的改革の道を見出ださうとするものであつた。國民の幸福と國家の經濟との間に密接な關係のあることを認め、國民の福利を增進するためには、宿弊であるところの上司の專橫と權力の濫用とを抑へて、

贈賄の風を廢し、司法の嚴正をはからねばならぬと說き、舊法の改正には各階級から選出せられた國民の代表者によつてあらゆる希望と要求とがより自由に述べられなければならないと言ひ、殊に農民の生活狀態のいかに慘憺暗黑であるかを詳述して、その原因の一つは彼等の無知にありとし、農民子弟の義務敎育を主張し、更に農民を苦しめてゐる地主の專橫を非難し、中央政府が地主と農民との間に立つて十分な監督と保護とを加ふべきことを說いてゐる。しかし彼はまだ農奴制度そのものの廢止といふところまでは考へ及ばなかつたのである。彼はそのほか商業貿易の重要を說き、僧侶の無知貧窮を述べ、その救濟策を說き、更に軍人、職人などあらゆる階級身分の人々の生活に就いて說いてゐる。この書の說く實行上の方策は、法律の力で改革を行ひ、これに從はないものは嚴重に處罰するといふやうなところに在つた點で、ピョートルのやり方と一致してゐるのである。しかしこの書は、その方策そのものよりも、當時のロシヤ生活の事實に立脚してそれの敍述を含んでゐるといふところに、卽ちどこまでも現實から出立してゐるといふところにその特色を有してゐると見られなければならない。

新時代の氣運に乘じて啓蒙的な時事の評論を試みたものは、政府の官人の間にもあつた。タティッシュチェフ（一六八六——一七五〇）は『學問と學校との利益についての二友人の對話』の中で、學問は人を異端に導き無神に陷れるといふ說の蒙をひらき、國民が無知であればあるほど政治が安全で容易であるといふ考へに對しては、天主敎の影響の下にあつたスペインやポーランドが國民の無知のためにいかに國力の疲弊を來たしたかを述べ、無知の國民が必ずしも從順でないことはトルコの國民の例によつても知られると言つてゐる。しかし彼が學藝の中で最も重要と見たのは、專ら貴族の子弟が官吏となるために必要な種類のもので

あつた。彼の『ロシヤ史』五卷は、三十年に亙る努力の結果であつて、その內容は多く古い年代記風の記錄の集錄に過ぎないにしても、その年代記の多く失はれた今日では貴重な文獻であつて、ロシヤに於ける最初の歷史上の著述として知られてゐる。

時代の要求が、敎養あり才分ある人々をして、おのづから新時代の思想傾向やそれに基くところの改革事業の解說辯護に專らならしめるに至つたこと、從つて說敎にも法令布告にも、改革意見の上書といふやうなものの中にも、到るところに時事の問題についての啓蒙的な評論の要素を含ましめるに至つたこと——これ等は上に述べて來た通りである。しかしながら、前からも言ふやうに、時代が敎會的な束縛から離れて、世俗的な生活の興味に解放せられて來たといふ以上、たとひこの啓蒙的な實用一點張りの功利的な時代に於いても、現世的人間的個人的の生活興味が、多少は文藝方面の事實としてあらはれて來ないではゐられなかつたのである。

11　抒情詩その他　新時代の氣運とともに、ひろく社會一般の人々の心構へにも、いつからともなく變化を生じて來た。舊來の傳統的な因襲的なものの見かたや考へかたが自然に重みを失つて、それ等の權威がさほどに感ぜられなくなつて來るにつれて、個人といふものがもつと自由に憚りなく考へもし感じもすることが出來るやうにおもはれて來たのである。少くとも、戀愛とか結婚とかいふやうな、就中個人的な、個人の生活にとつて直接な親近な關係をもつてゐる問題については、かならずしも今までのやうに傳統や因襲の權威で左右せられたくないやうな心持ちが强くなつて來た。戀愛や結婚の問題についても、今までは本人たちの意志などは考へられないで、專ら兩親や年長者の意見で決せられてゐたのであるが、千七百十四年には、

結婚する本人たちの自發的な合意なくして婚姻を行ふことを禁ずるやうな法律さへも出て、この方面で個人の感情や意志の自由が社會的にも認められるやうになつたのである。殊に、今まで後宮にかくれ住んで、男子の集りなどへは姿を見せることのなかつた婦人が、ひろく社交の間にあらはれるやうにもなり、婦人の社會上の位地も著しく變つて來た。婦人の社會上の位地の變つて來たといふことと、個々人の心の生活が、外部の權威に左右せられないで自由に表白してもよいことになつたといふことと、これ等の事情の變化は、おのづから、戀愛を中心とする抒情詩の發生を促すことになつたと見られる。文敎の源が專ら敎會附屬の宗敎學校に限られてゐた時代では、その敎科の一科目として詩學を敎へ、詩作の練習をも行はしめたのであつたが、その詩は宗敎道德的の內容をもつたものか、權威者へのほめうたかの二つに限られてゐて、內容はほぼ定まつてゐるのだが、ただそれをあやづける言葉の上の工夫に重きを置かれたのであつたから、個人の心情を自由にうたつた戀愛中心の抒情詩の出現の如きは、主觀の解放の端緒として、この時代としては何程かの歷史的意義を有してゐたわけである。

宗敎學校の祝祭などに行はれた學校劇は、大抵そこの敎師たる僧侶の手に成り、學生が舞臺に立つて演じたものであつたが、勿論すべて敎訓的なものであつて、登場の人物も、「愛」とか「憎み」とか「信仰」とか「希望」とか「嫉妬」とか「良心」とかいふやうな擬人的な譬喩劇に過ぎなかつた。皇帝アレクセイ・ミハイロヰッチの時代の宮廷劇場なども、やはり極めて少數の人々に見せたものに過ぎなかつた。しかしながら、ひとたび現實生活が自由に是認せられ、すべての生活がそこから出立するやうに考へられて來てみると、舞臺の上に見るものも一層現實に近いものの再現でなければならなくなり、また一方からはさういふ享樂が

ひろく一般に要求せられるやうにもなつて、ひろい一般人のための劇場がモスクワの中央に建てられるに至つた。それは千七百二年の末であつた。勿論その頃ロシヤには俳優といふものはなかつたので、ドイツからわざわざ招聘せられ、最初はドイツ語で演じたのだが、取り敢へずロシヤ人の子弟の養成に着手して、翌年には、ドイツ人の俳優の大部分が本國へ還つてしまつたやうな事情から、速成のロシヤ人の青年俳優たちが、ドイツの脚本をロシヤ語に譯したものによつて演じた。その譯が甚だ拙劣で、ところどころ意味の通らぬところさへあつたといふ。劇場は一般の人に入りやすくしなければならぬといふ考へから、見物料も非常に安くして、第一等の席料が當時の金で十カペイカ（今の金にしてそれの十倍位と計算してよい）であつたが、見物の客は少く、千七百七年には閉場の已むを得ざるにいたつた。この失敗は、一つはロシヤに脚本がなく、當時はまだ文學上の用語も定まらず、誤譯だらけのドイツものの間に合せの譯本では、一般の見物に滿足を與へ得なかつたのも已むを得なかつた。その脚本はローマの英雄の事蹟とか、ドン・ジュアンを主人公にしたものだとか、多くは男女の情事を主題とした喜劇であつた。そのほか西ヨーロッパから翻譯輸入せられたり、またそれに模倣して作られた中世騎士の冒險的戀愛中心の物語なども、多くは寫本でひろく讀まれた。模倣して作られた物語の舞臺が大抵西ヨーロッパであるといふことも、當時の外國に對する、好奇心や興味から來てゐるであらう。物語の中心は戀愛で、宗敎的道德的敎訓の要素がないといふことも、新時代の讀みものとしての特色であつた。これを要するに、幼稚ながらも個人の感情の表白としての抒情詩らしいものが出て來たり、戀愛中心の物語が行はれたり、一般向な劇場が建てられたりしたといふやうな事實は、それぞれの事實が著しい結果を殘してゐるのではないが、現世的人間的個人的の生活興味に心を向けて來た當時の

社會心理のあらはれとして、全く見のがすわけに行かないことである。

ピヨートル大帝の改革は、いふまでもなくロシヤの社會にとつて根本的動搖の源であつた。この根本的動搖の源を中心として、當時のロシヤの社會が、さまざまの分裂を見るに至つたのはまた已むを得ない。その中でも、最も多くの部分を占めてゐたのは、一切の改革に敵意を懷き、頑强に舊習を守らうとする人々であつた。それに對立しては、新改革の氣運に伴うて輸入せられるところの西ヨーロッパの生活のさまざまな方面から、專らその外面的な皮相をのみ盲目的に模倣しようとする人々があつて、或は服裝のうへから、日常生活の樣式風習のうへから、或は外國語をあやつることを得意にするといふやうな點から、いかにも新文明の先驅者のやうな顏はしてゐながら、その實、その心の中では一向新しくもなんともない無知無學の一派がそれであつた。かういふ人たちも保守派と相對立して敢て劣らぬほどに多かつたのである。而してこれ等のどちらにも屬せざるものの中に、眞にピヨートルの改革の精神と意義を理解するところの人々があつた。この人々こそ、眞の自由な知識の光りを力として、國利民福をはかることのために、それぞれ新時代の味方をしたのである。ピヨートルの改革を中心として分裂對立するに至つたおよそこれ等の集團の間には、いろいろの形で拮抗爭鬪が行はれ、改革そのものの將來に對しても、そのために最も必要とせられた新學藝に對しても、いろいろの疑ひや否定が行はれてゐたのである。かやうな事情の中に在つて、眞に新時代の精神に共鳴する敏感な少數の先覺者が、周圍の暗愚蒙昧に對して譏刺諷罵の衝動を感ずるのは、寧ろ當然でも自然でもあつたといはなければならない。

12　諷刺詩人カンテミール

は卽ちこの時代が生んだ唯一の、而してロシヤに於ける最初の純文學者であ

つた。カンテミール（一七〇九——一七四四）はいはゆる貴族の子であつて、幼少の頃からその當時としては十分な教育を受け、古代及び現代の外國語にも通じ、學藝の方面の事業のほか、外交官としても長くイギリスやフランスに駐在した。彼のおもな作品は九篇の諷刺劇詩であつて、その最初のものは千七百二十九年に書かれた。それ等の諷刺劇詩には、主としてロシヤ現實の缺點病所を難ずる傾きのものと、主として作者の理想を說き、教訓指導の傾きを有するものとの二つがある。その中でも、當時のロシヤの社會に特有の人物やそれ等の人々のものの考へかたなどをありのままに描いた最初の二篇は、最もすぐれてゐるとせられる。この等の諷刺劇詩は二つとも千七百二十九年に書かれたものである。それはピヨートルの死後、ピヨートル二世の反動的な時代であつて、この時代の傾向に對する不滿と憤りとが、これ等の作品を成さしめたとも言へる。殊にカンテミールを不安ならしめたのは、折角前代に開かれたところの新時代の自由な學藝の氣風が一時に衰へはしまいかといふ點であつた。彼はこの新しい自由な文敎の敵、無知の讚美者に對して、專ら諷刺の眼を向けた。それ等の中には、信仰のために學問は有害である。異端左道は皆學問からうまれるといふやうな宗敎上の謬見を代表する人物がある。學問といふものを極めて狹い功利的な意味に解釋して、物質上直接の利益をもたらさないものは凡て無用の長物であるとし、ラテン語を知らなくても昔は今よりはずつと豐かに暮らした、學問は殊に貴族にとつて必要がない、貴族にとつて證明とか知識とかはいらない、貴族はただ大膽に肯定か否定かすればよいといふやうな人物がある。更にまた、學問は友情を破る、學問をするとかくひとり閉ぢこもつて、死んでゐる友（書物）のために生きてゐる友から離れて行くと言つたりするものもゐる。或はまた、西ヨーロッパの文明のうはつらにだけ觸れて、着物とか髮の形とか身のこなしとかだ

けはいかにもハイカラであるが、セネカよりは一斤の上等の白粉が大事であり、シセロやヴージルよりも流行の裁縫師や靴屋の方が大事だといふやうな當世才子もゐる。更にまた、總主教權やそのほかの特權を失つた僧侶の中にも、特權と勢威とを濫用する無學な官吏や、賄賂の多寡によつて裁判を決定する司法官などの中にも、新學藝の代表的な敵がある。ピョートルが官吏の登用に際して、舊來の家系よりも個人の功績によつて拔擢重用したことも、當時の貴族には不平の種の一つであつたのだが、さういふ不平家だとか、一日ぶらぶらと贅澤に怠惰に日を送る貴族の子弟なども、カンテミールの諷刺の對象となることを免かれなかつた。これ等の諷刺劇詩は、當時のロシヤの現實をあからさまに觀察して、新時代の味方といふ立場から、それにおのづから批評を加へたといふところに特色を有する。十九世紀のロシヤの批評家ベリンスキーは、「文學の方面に於ける、ピョートル大帝の最初の協力者」だと言つてゐる。彼の作品は嫌忌せられてその當時は刊行せられず、しかしながら筆寫本としてひろく世に行はれた。それが刊行せられたのは千七百六十二年、エカテリナ二世の時代である。時代に對する批評諷刺の精神はロシヤ文學を一貫する一つの重要な生命であるのだが、カンテミールはこの精神を最も早く表現したものであると見られる。而して前から述べて來たところによつても察せられるやうに、カンテミールの作品も、やはり一つの時事評論的性質を帶びてゐるといふことを見のがしてはならない。

ピョートル大帝の改革に味方するものの中で、さまざまの點から文學方面に重要な意義を有するのはロモノソフである。

13 ロモノソフ（一七一一——一七六五）はロシヤの北方の漁村に生れ、父は漁業に從事するところの農

民であつた。彼は北方の住民に特有の不羈獨立の氣象に富み、不撓不屈の精神を以て、赤手一代の運命を開拓したのである。幼少から讀書を好み、十九歳のときひそかにモスクワに走り、自から僧侶の子と詐つて辛うじて神學校に入學し、窮乏と戰ひつつ五年の學修を終へ、千七百三十六年、更に選ばれてペテルブルグの學校に進入し、その年更に命ぜられてドイツへ留學するに至つた。彼はそこで主として物理學、化學、鑛物學などを學び、採鑛冶金の理論と實際とを併せて學修し、その間更に詩作と詩論とを本國へ送つた。千七百四十一年歸國とともに、化學の教授として化學研究所を興し、物理學の實驗的研究に從事し、科學書を翻譯し、最初のロシヤ語文典を著はし、修辭學を書き、ロシヤ史を修し、ロシヤ地圖の編纂に與かるなど、眞にプーシュキンの謂はゆる「われ等が最初の大學」そのものの概があつた。彼は熱烈なる愛國者であつて、ロシヤを研究し、ロシヤの要求を充たすために學術の力をあげて用ひようとしたのである。國力の充實のために必要なのは、何よりも先づ學問であるといふことを、彼は深く信じてゐた。ひろく文教のために彼は心身を捧げて盡くした。モスクワ大學の創立（千七百五十五年、ロシヤ最初の大學）は主として彼の力によるのである。そればかりでなく、一個の文學者としても、彼の事業は多方面に互つて、しかも重要な意義を有してゐる。

彼が文學方面の事業としては、第一に文學上の用語の統一、文體の整理をあげなければならぬ。十八世紀の初めの頃には、文章語として用ひられて來た教會スラヴ語と日常實際に用ひられてゐるところの口語體のロシヤ語との間には、既に甚だしく隔たりが出來てゐて、ピョートルの改革に伴つて社會にひろく行はれて來たところの新文物新現象を表現するためにも、新生活のさまざまの要求に適應するためにも、在來の文章

體では到底それに滿足を與へることが出來なくなつてゐたのである。それのみならず、新時代以前に於いて、文章體の用語の中には、ラテン語、ポーランド語、ドイツ語、オランダ語、イタリ語などさまざまの外來語が隨分多く混入してゐたのであるが、ピョートルの時代に至つて、西ヨーロッパと接近するに至つて、この外來語の混入は一層甚だしきを加へたのである。しかも更に、この時代に於いて殊に多く行はれるやうになつたところの飜譯書は、その不熟生硬な譯語のために、一層文章語の混亂を助長した。言葉の精神が十分に生かされないで、逐語譯的に無理な言葉をあてはめて行つたからである。これ等の事情によるところの文章語の混亂を整理統一するために、ロモノソフは多くの重要な貢獻をなした。『修辭學』（一七四八）、『ロシヤ文典』（一七五五）、『ロシヤ語に於ける教會用書の利益についての考察』（一七五七）などはそのおもなものである。ロモノソフは深くロシヤ語を愛し、その文典の序の中で、「ローマの皇帝カルル五世はよくかう云つた、――スペイン語は神と、フランス語は友と、ドイツ語は敵と、イタリ語は婦人と語るにふさはしい。しかし、もし自分がロシヤ語を能くしたなら、それに加へて言つたであらう。ロシヤ語は神と友と敵と婦人と、それ等のすべてと語るにふさはしいと。ロシヤ語には、スペイン語の莊重と、フランス語の輕快と、ドイツ語の剛健と、イタリ語の溫柔とのほかに、ギリシヤ語とラテン語との豐富と憤勁とがあはせ備はつてゐるからである。」と言つてゐる。かくの如き豐富な力を有するロシヤ語が、外來語のために混亂せしめられることは忍びない。ロシヤの文章語は獨立してその歷史的發達を遂げなければならない。而してその基礎となるべきものは教會スラヴ語であるのだから、つまりそれと日常の口語との統一せられたものでなくてはならない。この統一について書いたのが『ロシヤ語に於ける教會用書の利益についての考察』といふ論文で

あつて、ロモノソフの有名な三文體の說である。彼はロシヤ語を三つに大別する。第一には、古いスラヴ語にも口語のロシヤ語にも共通して用ひられてゐる種類のもの。第二には、古い文章體のスラヴ語にのみ用ひられてゐるものであつて、しかも文字ある人にならば大抵分るやうな種類のもの。第三には、日常の口語體のロシヤ語にのみ用ひられてゐて、スラヴ語には用ひられてない種類のもの。以上三種の言葉をそれぞれ適當に混用することによつて、そこに三種の文體の區別が生ずる。高い文體、中の文體及び低い文體の三つである。この三つの文體は、文學上の作品のそれぞれの種類の重要さの程度に從つて區別せられる。英雄詩、悲劇、莊重な頌歌といふやうなものは、就中重要なものとかんがへられてゐたのであるから、それ等の作品は、スラヴ語の要素が勝つてゐてものものしい感じを與へる「高い文體」によつて書く。「中の文體」は諷刺詩、哀歌、牧歌といふやうな、さまでに莊重でなく、寧ろ人間の感情や行動を生き生きとあらはす必要のあるやうな種類の作品を書くのに用ひる。この文體では、スラヴ語、ロシヤ語の雙方に用ひられる言葉を主として、これに純スラヴ語をも何程か加味する。「低い文體」は喜劇とか歌謠とかいふやうな、最も單純で生き生きと表現すべき種類の作品に用ひられる。この文體ではスラヴ語の要素は全く避けて、すべて純口語體のロシヤ語によらなければならない。以上がロモノソフの文體統一論の要旨である。

ロモノソフのこの文體統一論は、ロシヤの文體史上重要な意義を持ち、文章に於けるスラヴ語要素の勢力を認め、莊重な高い調子の文章を以て正格とする氣風を强めるやうになつた。この氣風はしかしながら、ロモノソフのこの文體論出でずとも既に行はれてゐたのである。この時代が本來君主絕對權の思想の支配した時代であるのだから、萬事が君主王者を中心に、莊重に崇高にといふやうな趣味好尙の一般に受け入れられ

てゐたのはいふまでもない。宮廷的なものものしい調子がそれである。ロモノソフのこの論は、たまたまかういふ時代の氣風をおのづから表現してゐると見てよいのである。勿論彼自からはさすがにむやみな擬古ぶりを忌み、用語の上でも古きになづまぬやうに警告してはゐるのであるが、多くの追隨者は事實さういふ弊に陷ることを免かれなかつたのである。その結果は、言文の不一致を甚だしくし、文章體を重くるしいものにするにいたつた。ロモノソフ以後十八世紀の詩文人は、この文體統一の問題、就中、如何に言文を一致せしむべきかの問題のために、多かれ少なかれ力をつくした。ロモノソフの文體論は、たまたまこの問題を提出して、將來の文學のために、そこに重要な仕事の存在することを提示したものだと言へるのである。

『ロシヤ詩作の法則についての手紙』（一七三九）は、ロシヤの詩がこれまでのやうに音綴の數の調節によつてその律調を整へるべき性質のものでなく、言葉の一つ一つが持つところの力點（特に力を入れて發音する母音が各語に一つづつある）の列次によつて調子の上から律を整へて行かねばならないことを說いたものであつて、前の文體論とあはせてロモノソフの文學上の所說として重要なものである。詩の律格がその國語の特色を基礎にして立てられなければならないこと、音綴數による律格はポーランド語の詩からの借りものに過ぎず、ロシヤ語の特色は、各語の力點にその音律的特色を持つところにあるといふことなどは、千七百三十五年に既に說いた人があつたのであるが、その說を立證するに足るだけの實例を自作の詩によつて示した點で、ロモノソフの論がひろく行はれるやうになつたのである。ロモノソフが文體の整理統一に對する努力は、更に彼をしてロシヤに於ける最初の『ロシヤ文典』（一七五五）を編ましめるに至つた。この文典以前には、スモトリツキー敎會スラヴ語の文典があるばかりであつた。ロモノソフは日常用ひられてゐるロ

シヤ語を土臺として、北方と中央と小ロシヤとの三地方語を標準語として、熱心に言葉の蒐集分類につとめ、歸納的に文典を組み立てたのであつた。『修辭學』（一七四八）は何等獨創の研究に成るものでなく、アリストートルなどの祖述に過ぎないが、ともかくもロシヤに於ける最初の文學概論風の著述として記憶するに足るであらう。

ロモノソフの文學上の作品は頌歌である。頌歌はおよそ擬古派の抒情詩の中でも最も莊重な調子の高いものとして、その時代にひろく行はれた形である。何か重大な事件とか祝典とかに際して、大膽な想像力を驅使して歡喜悅樂の高潮に達した心持ちを歌ふのが常であつて、宮廷の生活には、祝典などの花火やイルミネーションとともになくてはならぬものになつてゐた。大抵はその折々に君主や貴族の命を受けて作られ、大げさにギリシヤの神々を持ち出したり、いろいろの擬人法を用ひたりして、はでやかに調子高く、作られたものが多いのである。ロモノソフの頌歌にも、モスクワを白髮の老女にたとへ、エリザベタ女皇の行幸を待つと言つてみたり、山も海もピョートルの死を歎くと言つたりしてゐる。彼はそのいはゆる「高い文體」を用ひて、響きの高い詩句と、莊大な譬喩と、調子の高い感情と、はでやかな修辭とを以て、ロシヤに於ける最初の詩らしい形の詩を作つたのである。ロシヤの詩は、ともかくも初めて、響きの高い、想像の鮮やかな、吟誦して調子のよい詩句を以て書かれたのである。ロモノソフのこの頌歌風は、十八世紀の殆どすべてのロシヤの詩人に影響を與へてゐる。頌歌は本來一般には上に言つたやうな性質のものであつたのだが、ロモノソフはこの不自然らしい形を、ただの形としてでなく生きた內容あるものに作り上げた。それは彼の眞實の感情と思想とをこの形によつて表白したからである。ロモノソフの生涯を貫いて到るところに流露してゐる

眞實な感情は、その熱烈素朴な祖國への愛である。かれはこの熱烈な祖國への愛に基いて、文敎の興さざるべからざる所以を感じ、學問の必要とその效用とを信じて疑はなかつたのである。彼は本來純然たる詩人ではなかつたらう、しかしながら、彼はこの學問への愛と祖國への愛との感情に動かされて、その所信を表白するためにおのづから詩人ともなつたのである。從つて彼の頌歌には敎訓的な要素がある。彼の頌歌のうち、『女皇エリザヱタ・ペトロウナの卽位の日に』（一七四七）と題するものは就中代表的の作品であるが、このなかで、彼はこれまでの多くの頌歌の作者が戰役の功を以て君主の德を頌めまつるのに反して、平和をたたへ、女皇の平和を愛することを力說し、學藝の隆興のために、文敎の普及のためにいかに平和が必要な條件であるかを說き、女皇こそは、初めてロシヤに學藝の光りを導き入れたピョートルの眞の後繼者であると言ひ、言葉をつくし誠實を披瀝して歌つてゐる。形は女皇への頌歌であるが、それは直ちに學藝への頌歌であると見てよい。從つてピョートル大帝は彼にとつては國民的英雄である、「前代未聞の人こそロシヤへはつかはしめられたれ」ピョートルの開いた學藝の力によつて、ロシヤはその母胎に祕めてゐる無盡藏の自然の富をひらき得るであらう、青年の子弟は、學藝の光りを究めることによつて、ロシヤの精神力も亦かくの如く豐富であるといふことを全世界に示さなければならぬと言つてゐる。彼の頌歌のすべてを一貫するものは、愛國の情と、學藝と平和な勤勞への愛と、ピョートルの讚美とである。これ等の感情に於いてロモノソフの眞實を疑ふことは出來ない。彼の宗敎的な頌歌、たとへば『神の偉大についての朝の冥想』と『神の偉大についての夕の冥想』（一七四三）との如き、殊に北光を觀て歌つた後の作品の如き、眼に見える世界の創造者としての自然の神への頌歌として、熱烈な學問の使徒としての誠實を披瀝したものである。擬古的な、

形式的な、ややもすると虛僞の美辭麗句になつてしまひやすい頌歌を、彼の場合に於いて救うてゐるものはこれ等の眞實な感情である。

ロモノソフの學藝方面の事業は上に述べて來たやうに多方面であつた。彼は科學者としても多方面に貢獻するところがあり、文學者としてもまだ多方面に亙つてロシヤ文學史上の開拓者であつた。精力絕倫なロモノソフの面影は、いかにも中世的暗黑から脫出した新時代の人にふさはしい。ロシヤは、西ヨーロッパに於けるやうな意味で、文藝復興期の全面的解放に一時に直面することはなかつたが、おくればせながらも中世の闇から近代の光りの中へロシヤの窓を開いたのがピョートルであるとするなら、ロモノソフはそのロシヤの近代の曙に立つて、ひろく學藝の道を八方にひらいた人であると言へるであらう。西ヨーロッパの文藝復興期と時を同じくすることの出來なかつたロシヤに於いて、せめてもその仕事の規模なり性質の上から、再生の時代の精神を具體現してゐるものはこの二人である。しかしそのロモノソフも、十八世紀の前半期を支配してゐる國家中心、君主絕對、從つて宮廷を光りの源泉とする思想傾向の影響からは脫することが出來ず、その文學上の事業は、專ら莊重な形式の整頓と、啓蒙力の源としての王者の讚美のほかに出でなかつたのである。

これを要するに、近世的啓蒙時代のロシヤ文學は、ピョートル大帝の改革を中心として、一方前時代に對しては、敎會的勢力からの解放、世俗的人間的生活興味の勝利を意味するとともに、王者を中心とする國家の隆興といふ觀念によつて一切の思想と事業とが動かされ、國內の智力はそのために總動員をせられ、西ヨーロッパの學藝を貪るやうに攝り入れようとする啓蒙の一念に貫かれてゐたのである。而して一旦解放せら

れた人間的生活興味の勝利は奪はれる氣づかひなく、一旦踏み出した啓蒙の氣運はそのままで止まるわけには行かなかつたのである。

五　社會思想萌芽時代の文學

ピョートル大帝の改革は、一般の教學の進歩の上にも、文學の發達の上にも、たしかに一つの重要な新時代を開いた。この事實は疑ふべくもない。しかしながら、ピョートルの改革の直接の目的は、何よりも先づロシヤを一大強國としてヨーロッパの列強の間に仲間入りさせることであつた。ロシヤといへば、今でさへ、（或は今は尙更とも言へるであらうが）謎の國として見られ、その實情が知れわたつてゐない、同じヨーロッパに在りながら、ヨーロッパ諸國とは別もののやうに考へられてゐるのであるから、その當時は全く半アジヤ的な未開國として、さまざまな荒唐無稽の評判などが、旅客の皮相の見聞などによつて傳へられてゐたのである。その半アジヤ的なモスクワ王國が、或はトルコと、或はスキーデンと戰つて、武威を西ヨーロッパ諸國の間に示し、一躍して軍事上列强の間に伍するに至つたのは、すなはちピョートルの大志成れりと謂ふべきであらう。一大强國としてのロシヤ帝國の樹立こそ、ピョートル大帝の改革の主要目的であつたのである。そのためにこそ、彼は西ヨーロッパへの窓を開き、自からしばしば往いて學んだばかりでなく、多くの年少子弟を派遣して各方面の學藝を修めしめ、さまざまの學者工匠を招聘したのである。またそれがため

にこそ、彼は鋭意文敎の振興をはかり、各種の學校を設立し、學士院の創設を企て、西ヨーロッパの新しい文物學藝の一日も早くロシヤの國土に榮えんことを望んだのであつた。ピョートル歿後の後繼者といへども、その志すところは國家の外面的軍事的威力の充實顯揚であつて、一切の文明の施設は、悉くロシヤを强國としせんがためのものにほかならなかつたのである。ピョートルの改革が、すべて國家的、實用的、外面的な特色を帶びてゐることは已むを得ない。文敎學藝の振興といふことも、それが國家の威力を充實せしめもしくは莊嚴にするためにこそ重要であつたのである。

しかしながら、その當初の直接の目的が、いかに國家の實用に適はしめんがためであつたにしても、一旦窓をひらいて迎へた學藝の光りは、必ずしも實用の範圍程度にのみとどまつてゐるわけには行かなかつたのである。少くとも、帝王を中心としての國家を强大にするためにのみ、學藝が利用せられてはゐなかつたのである。ピョートル大帝といふ一個の帝王は、自己の覇業を成すために西ヨーロッパの學藝を迎へたのであつたが、かくして移し植ゑられた學藝は、いつまでもその帝王の覇業のためにばかり役立つことに止まつてはゐなかつたのである。學藝そのものの本來の性質は、帝王の覇業のために利用せられるよりも、更に廣い機能を有してゐたのであるから。とにかく當時の人々の眼には、ロシヤはピョートルによつて軍事上の强國となつたのであるが、それが文敎の上からも、外部的の强大と相應ずるほどに發達したのは、エカテリナ二世の力であるといふ風に映つてゐた。ピョートルは外面的物的文明の輸入者であり、エカテリナは內面的精神的文化の移植者であるといふやうに考へられてゐた。「ピョートルはわれ等に肉體を與へ、エカテリナは魂を與へた」といふのが當時の一般的な見方であつた。なるほどピョートル時代の學校が專ら實用一點張り

の職業教育に傾いてゐたのに對して、エカテリナ時代の學校教育はもはや必らずしも職業教育的でなく、一般的教養を主としたものとなり、學問上の奬勵も頗る多方面に亙つて行はれた。エカテリナ自から學藝を愛し、その漸く興味を感じた方面は、ビョートルの場合のやうな軍事上工業上のことではなく、政治上社會上の方面であつた。エカテリナ自身諸外國の學者思想家文人とひろく直接に文通交際し、ロシヤ文學のために少からぬ庇護を加へ、またみづから筆を取つていろいろの述作を公けにしてゐるばかりでなく、臣下の文人と公然誌上の論戰を交へたりさへしてゐるのである。その述作の中にも、日記にも、國民へのさまざまの布告などの中にも、最も進歩的な公明な自由主義的な西ヨーロッパ風の新思想の匂ひが一般に流れてゐたのである。直接君主國家の實用のためにといふよりも、ひろく國民の自由と開明と進歩とのために、直接軍事上産業上のためにといふよりも、ひろく社會の生活の安寧平和のためにといふやうな心持ちが、エカテリナ時代の學藝を動かしてゐたやうに見える。エカテリナは、その手記の中で、「自由と正法との騎士」と自分自からを呼んでゐる。また、「自分は自由と名譽と獨立とを國民一般に保證せんがために、社會の安寧幸福のために」君臨するの使命を有するものであるとも言つてゐる。また殊にその同じ手記の中で、「自由に生れたる人間を、奴隷となすことはクリスト教の趣旨に反く」ものであるとも斷言してゐる。而してその皇子に向つては、「もし臣子君主に對して不平あらば、その非は常に君主に在り。何事もこの旨を規準としてはかり行ふべし」とも遺言してゐる。新法案編纂のために全ロシヤから召集せられた代表者の會議に對して、その指導的な訓令として書かれた『勅諭』（一七六七）には、エカテリナの政治上社會上の見地が、最も明らかに力強く言ひあらはされてゐるのである、即ち、その『勅諭』に從へば、ロシヤは君主專制の國であつて、

君主は國内に於ける一切の權威と國法との源泉である。而してその權威から發するところの國法の最初の問題は、國民を保護し、彼等の個性の自由不可侵を保證することでなければならぬ。國法はすべての國民に對して平等でなければならず、國民はひとへにこの國法をこそ畏るべきであつて、國法を行ふところの人を恐るべきではない。國法をやぶるものは罰せられなければならないが、凡そあらゆる刑罰は惡であるのだから、恥辱に對する恐怖によつて人が犯罪を避けるやうになり、わづかの罪に對して譴責を受けても非常な處罰を受けたと思ふやうになることこそ、最も望ましいことでなければならぬ。もし悲しむべくも已むを得ざる場合として刑罰に處せねばならないことがあるとすれば、その處罰は出來るだけ人道的なものであつて、嚴にその罪過を超えない程度のものでなくてはならぬ。體罰は、就中死刑は廢止せられなければならない。正式の裁判を經ずして何人もその自由を奪はれるやうなことがあつてはならない。捕縛するといふことは特別已むを得ざる場合のことであつて、正式の裁判を受けるまでに豫め捕縛せられて拘禁せられるといふことは、そのこと自身已に處罰であるのだから、事件の決定は出來るだけ敏速に行はれなければならない。――『勅諭』はおよそかういふ精神と態度とを以て國法について諭示してゐる。そこには信仰と言論との自由の問題についても少からず說いてある。國家は、信仰上の迫害を行ふやうなことがあつてはならぬ。迫害は人間の思想を苛立たせる。人々をしておのおの信ずるところに從はしめることは、最も苛烈な心をもやはらげるものである。言論の自由、現存の制度秩序に對する批評は、ひろく行はしめなければならぬ。言論のみの故に人を監視することは不法であり合理的でない。言論は決して罪として見らるべきものではない。現存の制度秩序を破壞するものは、それについて大膽に自由に言論を以て是非するところの徒ではなくして、言論から

踏み出して、「死罪にも値ひするやうな罪」を行ふところの徒である。

『勅諭』の說くところはおよそ上に述べたやうな調子であつて、この精神態度を基本として、新法典は編纂せられなければならなかつたのである。エカテリナは、その編纂會議のために選出せられた代表者たちに向つて、この『勅諭』を反復熟讀して、その中に含むところの自由の新精神を體得すべきことをしばしば說いてゐる。それ等の代表者は、會議を重ねること二百三回、時を閲すること一年半、『勅諭』は勿論反復熟讀もし、その自由の新精神に感染したでもあつたらうが、その結果は何一つ具體的に得るところなく、新法典の全體的な法案はもとより、一部分の案さへも編むには至らずして終つたのである。かやうな結果に立ち至つたについては、もとより少からぬ原因理由があつたのであるが、そのなかに最も重大な致命的な原因理由が一つある。即ち、『勅諭』の示すところに從へば、新法典は、その立法の根本精神として大眼目として、結局個人の自由獨立を保證し、信仰と言論との自由を保證するものでなければならないわけである。然るに、かやうな自由な新思想に基くところの法律が布かれ行はれようとするところのロシヤでは、農奴制度がその一切の暴威を逞うして行はれてゐるのである。ロシヤ國内の生活のあらゆる方面に亙つて存在する處の重苦しい暗い惱ましいすべての現象は、悉くこの一つの制度から生れ出てゐるのであつて、この制度の下に在つてこそ、貴族と官吏とはあらゆる暴虐自恣を行ふことを以て當然自然のことと考へて怪しまなくなつてゐるのである。かくの如き制度を根本に据ゑて置いて、個人の自主獨立を言ひ、信仰言論の自由を說くことは、――況んやそれを國法の上に具體的に制定しようとすることは、底なき甕に水を盛らうとするよりもなほ以上に不可能なことであつたのである。この根本的な矛盾の解決は、百の『勅諭』を以てしても到底出來ない

ことであつた。しかもその『勅諭』の最初の本文の中には、農奴たちの運命を現在よりも何程かよくするために寛大な取り扱ひをするやうな主旨の條章もあつたのだが、最後の決定的な『勅諭』の本文からは、さういふ條章さへも削除せられてゐたのである。それでも農民について何程か書き殘されてゐたのは、國家に於ける人口の增殖のことを說いた一章の中に、「農民たちは大抵は一と夫婦で十二人、十五人乃至二十人までの子供を所有してゐるが、その子供たちの中の四分の一も成人に達するまで生存するのは珍らしい方である。國家のために有望な人民がかやうに早世するといふのは、彼等の食物にか、生活のしぶりにか、或は養育のしかたにか、何かそこに禍因が潜んでゐるに相違ない」。と言ひ、また他の章で　耕作は勞働と商業との基本であると言つてゐるくらゐのものに過ぎない。しかしながら、農奴の生活に關するこれ等の言葉の中には、『勅諭』が一般國民を公民として說いてゐる前述のやうな自由な進歩的な人間らしい思想の面影は、少しも見ることが出來ないのであつて、農奴は全く問題の外に置かれてゐたと言つてよいのである。かやうにして、國民の大部分（九割以上）を占めてゐる農民が、どうやらかうやら、やつと人間らしく生きて行くことさへ出來ないでゐるやうな狀態にゐるといふ、その根本の原因たる農奴制度をそのままにして存續させて置くといふことと、『勅諭』の中で頻りに說かれてゐるエカテリナの自由な進歩的な思想との間には、實に根本的の矛盾が在つたのである。エカテリナの『勅諭』はひとりこの矛盾を解決することに少しも觸れなかつたばかりでなく、寧ろその治世の間にこの矛盾は一層甚だしくせられたとさへ言ふことが出來るのである。エカテリナの治下に於いて農奴の數は著しく增加した。その時まで農奴制度の施行せられず自由であつたところの小ロシヤ地方にも、新たに農奴制度が行はれることになつた。百萬人以上の老幼さまざまの農民が、エカ

テリナの寵臣への恩賞のために新たに農奴となるに至つた。エカテリナ二世時代のロシヤの國風の發揚のために下積みとなつた國民は、地主たる貴族の抑壓暴虐のために苦しみ喘ぎ、遂に一揆となり反亂となつて、プガチョフ（一七四四――一七七五）の亂に與みするに至つたのであつた。かやうにして、一見自由思想の權化の如く見え、自からもまた一時は「自由と正法との騎士」を以て任じてゐたところのエカテリナ二世の時代は、西ヨーロッパから輸入せられた進歩思想の言葉の上の表現と、それに對する實際の態度との間に、少からぬ矛盾を示した。それは文學の方面に於いても同じことであつた。當時の自由思想家を以て目せらるべき人々は、エカテリナの『勅諭』が保證するところの信仰言論批評の自由の宣言にかかはらず、事實に於いては少からず壓迫を受けたのである。

エカテリナが、たとひその晩年には反動的になつたにしても、その『勅諭』の中であれほど自由な進歩的な新思想を說き、あれほど言論の自由を尊重すべきことを認めながら、その實際に於いて何故にこれ等の自由思想に壓迫を加へるやうになつたか、この矛盾分裂には重要な原因が含まれてゐるのである。前からも言ふやうに、ピョートル大帝の手によつて着手せられた西ヨーロッパとの接近は、エカテリナ二世の時代に至つて更に長足の進歩を示したのであるが、ただ、その西ヨーロッパとの接近といふことの性質が變つて來たのである。ピョートル大帝の時代に於けるヨーロッパとの接近は、專ら君主一人の意志の力によつて促し進められ、從つてその目的は、國家としてのロシヤの外面的富强の度を增進せしめんがためであつた。ただそのためにこそ西ヨーロッパの學藝が利用せられなければならなかつたのである。然るにエカテリナ二世の時代に於いては、この西ヨーロッパとの接近を求めるものは、ひとり國家の權威ばかりではなかつたのである。

國家の最高の權威としての君主の意志のみが、この新學藝との接觸を求めたのではなくして、そこには既に社會の意志が動いてゐた。社會は國家の權威の意見や都合にかかはることなく、社會自身の必要と目的とのために、新學藝の源としての西ヨーロッパとの接觸を要求するに至つたのである。勿論、社會とは言つても、この時代に在つては、その有力な要素は貴族以外には見出されなかつたのであるが、その貴族は、有閑階級として、經濟上の富有階級として、その大部分は、專ら西ヨーロッパ文明の外面に心醉してゐたのに過ぎない。しかしながら、その貴族的社會の少數者は、西ヨーロッパの外面文明よりも、寧ろその知力的生活の先頭的位地を占めてゐる、當時の最も進んだ最も新しい思想感情に深く心を引きつけられてゐたのである。新學藝を求めるものが國家最高の權威から社會へ移つたといふのは、この少數の貴族社會が、差しあたりの國家的必要といふことに頓着なく、新思想に觸接するに至つたことを意味する。およそ十八世紀の半ばからその終りへかけての西ヨーロッパは、思想上の一大轉回を遂げつつあつたのである。生活のあらゆる方面に亙つて、新舊交替の渦卷きが嵐の如くに起り、やがて來らんとする新時代の翹望憧憬の極めて熱烈であつた時代である。國家組織の舊形式は、第一に個人の生得の自由の權利を抑壓するものとして否定せられ、新時代の國家組織の基本が個性とその權利であらねばならぬ所以が力說せられた。たとひいかなる根據を持つてゐようとも、凡そ個性を束縛折壓するものは悉く排棄せられなければならない。それが宗教上の基礎に立つものであらうとも、傳統的なものであらうとも、帝王の特殊の恩寵によるものであらうとも、他の人々の安寧幸福を犧牲にして一部分の人々の特權を保護するやうなものは、悉く破棄せられなければならない。人民の權利、人民の支配力といふやうな觀念がますます强くなり、その結果、個人の生得の權利について、もし

くは國民としての權利についての觀念が、新たに學問として考究せられるやうにさへなつて來た。宗教の方面でも、第一には人間の個性、その理性といふことが考へられ、今までの天啓の宗教に對して理性の宗教―合理的宗教が唱へられるやうにさへなつて來た。哲學の方面でも、直接に人間の經驗によつて證明することの出來ないところのものを、人間の理性で認識することの出來ないところのものを、悉く人間の知識の境界から排除して、哲學を宗教の霧の中から白日の中へ引き出さうとして來たのである。これ等の個人主義的、理知的、經濟的傾向は、結局の意味では、この時代に漸く勢力を張るに至つたブルジョワジーの階級の擡頭、それの經濟上の勢力の發展といふことにまでつきつめて考へられなければならないのであるが、從つてまた、經濟上の現象に關する學問もにはかに發達進歩を見るに至り、學者の注意は殊に富の分配についての問題に集中せられたのである。かやうな社會事情と伴つて新聞雜誌は社會の一大勢力として發達し、一般に社會の讀書欲は著しく普及するに至つた。かやうな新思想新傾向が、その上つらの新奇な刺激によつて、輕く社會に觸れてゐる間は何事もないのであるが、それが一たび社會の底面の方へひろく流れわたり滲み込んで行くに至つて、それは貴族社會での客間の話柄だけでは濟まなくなつて來るのであつて、即ちフランスの大革命は、ひろく西ヨーロッパの上流貴族の社會に對して、新思想の力を事實の上で示したことになつたのであつた。しかし、エカテリナ二世が即位した千七百六十二年から、千七百八十九年のフランス革命までには、まだ大分の年月があつた。自由解放の哲學も、個性中心思想の文學も、まだまだ少數の進歩的な貴族の間に於いて、その客間での話題となるに過ぎず、寧ろさういふ新思想をいくらかでも理解し、それに多少の同感や興味を持つといふ事は、その當人に對して、從つてまたエカテリナ二世に對しても、進歩的な文敎の庇護者

としての榮譽をさへも加へるに役立つくらゐのものであつた。自由解放の哲學も、個性中心思想の文學も、それほどにまだ安全な一つの新時代的裝飾に過ぎない趣きを持つてゐたのである。實際エカテリナは、即位以前からフランスの新文學を讀み、フランスを中心とする西ヨーロッパの新思想傾向に心を引かれてはゐたのに相違ない。その上、北方の新興强國たるロシヤの君主として、西ヨーロッパの自由思想の庇護者たることは、世界の人々の前にいかにも誇らしく晴れがましい心持ちのすることであつたのに相違ない。國家や宗敎や哲學に對する新見解をひろく社會に普及せしめるための目的を以て書かれたあの有名なフランスの百科全書がフランスの議會に於いて、無神的冒瀆であるとして禁ぜられたといふ事を、エカテリナ二世が耳にしたのは、その即位後間もない頃のことであつた。エカテリナは即ち直ちに、百科全書編纂の事業の頭目と見られてゐたヲルテールとディドロとに向つて、その出版刊行の事業を、當時のロシヤ領地であつたリガへ移してはといふ意味の提議をさへもしたのである。エカテリナの『勅諭』は、固より言ふまでもなく、これらの自由解放思想の新書に刺激せられて、その直接の影響の下に書かれたものであり、モンテスキューの『法律の精神について』などからは、すつかり、そのまま取つてゐるところさへも少くはないのである。『勅諭』の一本をフランスのある人に贈るに添へてエカテリナは、自分の帝國の利益のために、モンテスキューの名を擧げることなくして多くをモンテスキューから盜み取つてゐることは見られる通りであるが、もしモンテスキューがあの世から自分の書物（『勅諭』）を見たなら、わが二千萬の國民の幸福のためにするこの文學上の窃盜を許してくれるであらうことを望むといふやうな意味のことを書き送つてゐる。エカテリナ二世やその周圍の近親者の自由思想の源泉と、それに對する態度とは、所詮かやうなものであつた。フランス革命の

勃發とともに、この宮廷的自由思想が忽ちに消えうせてしまつたといふのも、決して不思議なことでも何でもない。フランスの自由思想家に對する庇護どころではなくなつて、エカテリナ自身『勅諭』の中で言つてゐることを別の言葉で言ひかへたのに過ぎないやうな、極めてありふれた考へ方に對してさへ、極端に憂懼の念をいだくやうになつて來たのも、一方から言へば尤も千萬なことであつた。同じやうな思想の表白でも、フランス革命の前では、エカテリナ自からこれを嘉賞したりしてゐるのであるが、フランス革命の後ではこれを全く禁じたりしてゐる。とにかく西ヨーロッパからの自由思想は、當時の支配階級たる貴族の間では、その最高の權威たる君主がこれを是とすれば卽ちこれを是とし、君主がこれを非とすれば卽ちこれを非とする程度にしか受け入れられてはゐなかつたのであるが、しかしながら、極めて少數ながらも、社會の一部には、それ等の新思想を深く心の中に取り入れ、その新思想を基準として、それの光りに照らしてロシヤの現實を觀察し評價し、その結果に從つて、その現實に對する自分の態度を決定し、自己の將來の生活の方針をさへ樹立しようとする人々があつたのである。かやうな少數の人々の心によつて、西ヨーロッパとの接近は國家の實用的目的のためでもなければ、新思想の味方であることを誇りとする虛榮心の滿足のためでもなく、眞に人間の生活のために、人間の集團的生活のために、眞理の光りを活用しようとする一念からこそ、新思想を求めたのであつた。ここに至つて、西ヨーロッパとの接近、新思想の攝取は、國家のためから社會のためのものとなつたのである。十八世紀後半期のロシヤ文學は、かういふ事情の間に發生したのであると言つてよい。

ピョートル大帝を中心としてその直接の影響の下に在つた時代が、ロシヤに初めて近世的啓蒙の氣風の起

つたときであるとするなら、それに次ぐところのエカテリナ二世の時代は、同じく啓蒙的ではありながら、そこに一層多く批評的態度の加はつた時であると言へるであらう。而してその批評は、おのづから現實の社會生活に向けられなければならなかつた。社會に對する批評、自意識の發達して來たことは、たしかにこの時代での著しい現象であつた。この時代の文學の最も特色的な現象は、社會生活に對する諷刺と批評との發達である。さまざまな社會諷刺の雜誌が發刊せられたことや、喜劇や寓喩の物語の行はれたことなどが、その實證である。それ等の現象のうち、就中重要な意義を有するものは、エカテリナ二世が『勅諭』のなかで自から自由思想を說いた時代、卽ちエカテリナの治世の初期に於いて刊行せられた諸種の雜誌である。凡そこの種の雜誌類は、十八世紀の最初に當つて、イギリスに於いてはじめて刊行せられたのであつて、スティールとアディソンとの二人によつて書かれたところの『タトラ』（一七〇九創刊、同一一年廢刊）と『スペクテータ』（一七一一年創刊、同一四年廢刊）との二つを以てその嚆矢とするのである。これ等の雜誌はいづれも道德的諷刺的な傾向を持ち、當時の各方面の社會生活の現象に對して、輕い鋭い批評を加へることによつて、イギリスの讀者公衆の間におほいに愛讀せられたのであつた。就中『スペクテータ』のごときは、その雜誌の全部がフランス語とドイツ語とに翻譯せられ、やがてそれに次いでそれ等を模倣したところの雜誌がヨーロッパの殆どあらゆる國々で行はれるやうになつたのである。十八世紀の間に、さまざまの國語によつて刊行せられたこの種の雜誌が、八百種以上に達してゐたといふのを見ても、いかにそれが一般の興味を惹いたかを察するに足るであらう。およそかういふ定期刊行物の發達は、いふまでもなく一定の讀者公衆の成立によるのであるから、ある程度まで、敎育の普及してゐることを條件とするのであるが、それ以外に、

その讀書力ある人々が、自分たちや周圍の人々の生活に對して、何等か共通の興味關心を持つやうにならなければならぬ。卽ち個々人の生活とともに、その間に共通する社會的生活に對して、何等かの心がかりを持つやうになつてゐなくてはならない。意見の交換といふやうなことに興味を見出すやうになつてゐなくてはならない。而してこのことは取りも直さず社會意識の發達を意味する。有產中流の階級が自己の社會に對する興味を表白しこれを交換することを欲するところに、この種の刊行物が發生し發達して行く。雜誌が第一にイギリスで生れたのも、決して偶然ではなかつたのである。

ロシヤに於ける最初の社會諷刺的な雜誌は『フシャーカヤ・フシャーチナ』（一切合切といふやうな意味）であつて、創刊は千七百六十九年であつた。この雜誌には、エカチリナ二世自から親しく筆を執つた。この誌上に揭げられた諷刺は、取り立てて言ふほど力のあるものではなく、上品なおつとりした微苦笑的な程度のものに過ぎなかつた。寧ろ鋭利な辛辣な非難の意味を避けて、さまざまな人間の弱點に對して、人のよい譏笑を以て見るといふ調子であつて、時代の道德風習の矯正を以てその目的とし、誌上の到るところに見られる道德上の判斷や敎訓を以て、一世を敎化指導しようとしたのであつた。しかもそれ等のうちの多くは、イギリスの雜誌『スペクテータ』（後に再刊せられたもの）からの借りものでさへもあつて、ただ出來るだけその取り扱ふ事柄をロシヤの事實に當てはめてあるといふやり方であつた。この雜誌がひとたび刊行せられると、これに模倣したものが相ついであらはれた。『イ・ト・イ・シ』（あれもこれもの意味）とか、『ニ・ト・ニ・シ』（あれでもないこれでもないの意味）とか、『アードスカヤ・ポチュタ』（地獄の郵便の意味）とか、そのほかさまざまの名前のものが出た。それ等の數多い雜誌のうちで、就中重要な意味を

持つてゐるのは、千七百六十年に出た『トルーテニ』（勞働蜂）、千七百七十二年に出た『ジヲビーセツ』（畫工）及び千七百七十四年に出た『カシェリョーク』（財布）などであつた。これ等の三つの雜誌は、いづれも一人の手によつて相ついで刊行せられたのであつて、その執筆刊行者こそ

14 ノヰコフ であつた。ニコライ・イワノヰッチ・ノヰコフ（一七四四——一八一四）は由緒ある貴族の家に生れた。彼は秩序ある敎育は受けなかつた。創立せられたばかりのモスクワ大學に附屬する中學校で三年を過したが、怠惰にして操行不良といふ理由の下に退學を命ぜられ、十六歲にして近衞のある隊に入つて士官となつた。當時は貴族の子弟にはかういふ自由の道が開かれてゐたのである。千七百六十七年、前に言つたエカテリナ二世の新法案編纂のために代表者の會議がモスクワに開かれた際には、他の近衞の靑年士官たちとともにノヰコフもまた、その會議の記錄を取るために、祕書の資格を以てそこに派遣せられた。この偶然の任務は、後のノヰコフの文學上の仕事のために、非常に役立つたのである。ノヰコフは、前後二百數回に亙る會議の席で、代表者たちの述べ立てる演說や報告を筆錄してゐる間に、當時のロシヤ生活のあらゆる方面に亙つての實狀をつぶさに知り、あらゆる階級の要求とそれ等の生活の利害關係とにおのづから通ずるやうになつたのである。それ等の代表者たちの論戰討議は、ノヰコフの眼前に、當時のロシヤの現實を、就中その暗黑面を、たとへば法廷に於ける亂脈を、高官上司の橫暴を、或は農民の慘狀を、ことごとく手に取る如くに描き出して見せてくれたのであつた。この機會に於いて得た各方面の實生活の消息は、いふまでもなく後に至つて彼の諷刺的批評の材料として利用するところとなつたのである。彼がこの會議中に聞き知り得たところのロシヤの現實に關する知識が、いかに彼の心を動かしたかは、その會議の解散とともに、直

ちに近衛士官の職を辭し、心身をささげて文學に向ふの決心をなし、諷刺的批評の雜誌の發刊に着手したことによつて、明らかに知られるのである。

ノキコフが最初に創刊した雜誌は『トルーテニ』で、これは千七百六十九年から翌年にかけて出し、それから『ジヲビーセツ』、『カシェリ■ーク』と、少しの間を置いては名前を變へて出したのであるが、その誌上の文章の大部分は、勿論ノキコフ自身の執筆にかかるものであつた。その中でも、最も好んで書かれた普通の形式は、書翰體の文章であつた。いろいろ架空の人物からの手紙に擬したものの中で、その架空の人物である筆者は、自分の道德上の缺點も、自分の無知無學も、自分の亂暴なものの考へ方も偏見に基くところの行動も、それ等の一切を悉く包まずかくさずさらけ出すのである。かやうにして、その諷刺の文章は、一種の幼稚な自責の告白の形をとり、それがまた一層讀者の眼には滑稽にも見えたのである。ノキコフは架空の手紙の筆者の年齢身分などに應じ、田舍ものは田舍ものらしく、都會のしやれものはしやれものらしく、用語の末々にまでそれぞれの特色を出すことにこまかく心を配つた。かやうな手紙のほかに、或は譬喩的なお伽噺のかたちをかりて、或は夢ものがたりに託して、或はまた諷刺的な肖像畫の說明のやうな形で、或はまた病患に對する治療上の忠言のやうな形で、それぞれ諷刺を試みたのである。たとへば、農民は人間ではないと思うてゐる地主がある。この地主の病氣はさういふ考へを抱いてゐるといふことであるので、その患者に對しては、毎日地主の骨組と農民の骨組とをよく見比べるやうに勸め、その考へのまちがつてゐることが分るまで續けさせる。またある場合には、新聞の雜報の形をかりて諷刺を試みたものもある。たとへば、クロンシュタットからの通信によると、ボルドーから汽船が入港し、その船で二十四人のフランス人が渡來

したのであるが、彼等はいづれも自から侯爵もしくは伯爵と名乘つてゐるにも拘らず、その實彼等はいづれもさまざまな種類の職人にほかならないものであつて、しかもその中のあるものは、パリの警察と大喧嘩をやつた末フランスにゐたたまらなくなつて逃げ出して來たものである。而して彼等は皆ロシヤの富有な家庭の家庭教師として住み込まうといふ目的で渡來したものである。依つてこのことを大方の諸君子に報道するといふやうなことが書いてある。この雜報風の記事は、當時のロシヤ貴族の家庭が、一もフランス二もフランスで、フランス人でさへあれば無知無學のならずものをさへよくも身元を調べないで大切の子弟の家庭教師として優遇するといふやうな風があつたのを、揶揄したものである。或はまた、滑稽な廣告文に擬した諷刺もある。たとへば、知見開發のため諸國を巡遊した若いロシヤ生れの小豚が、既に立派な一匹の豚となつて歸國したについては、一見を欲せられる大方の有志諸君は、當市の多くの大通りに於いて、無料にて見物せられることが出來ますといふやうなのがある。外遊して眞に智見を開發することもし得ない青年に對する諷刺であるのは言ふまでもない。或はまた、最近任命せられた大官が、その任地へ赴くについて、道中の輕便のために、自分の良心を賣却する。右公告す、といふやうなのもある。その他誌上には、諷刺的な詩、寓話、警句、銘など、さまざまの形式のものが掲げられた。形の多種多樣であつたやうに、その內容も頗る多方面の事實に亙つてゐて、それ等の誌上には、その當時のロシヤの社會の風俗習慣、物事に對する興味や理解の程度または種類など、あらゆる方面の生活が手に取る如く表現せられてゐる。勿論全體が諷刺の基調に立つてゐるのであるから、その觀察せられた現實が、その暗黑面や缺陷の方面に專らであるのは言ふまでもない。ノキコフは、人間の缺點や惡德を、前時代のカンテミールに見るやうに、僞善者とか吝嗇家とかい

ふやうな一定の型にあてはめて抽象的に表現することでは滿足せず、それ等の典型的人物を、當時のロシヤ生活の實狀と密接に結びつけて、いかにも實際に生きてゐさうな人間らしくして見せようとしたのである。この點が、彼の諷刺に、明らかに社會的の性質を附與したのであつた。彼はその諷刺の含む非難の目的を、道德の矯正に置いてゐたのであるが、しかもその矯正は、ただ個人個人の惡德を一つ一つ矯正するといふやうな意味ばかりでなく、ひろくロシヤの社會がそれがために苦しみ惱んでゐるところの、社會に根を張つてゐる惡を根絶しようといふ意味であつた。この意味で、彼の諷刺は社會的であつたと言へるのである。而してこの特色もまた、ひろく言へば、その諷刺の眼が現實に近く接してゐたところから自然に生じたものであると言へるのである。

當時の社會に於ける惡德の一つは、やはり根深い無知無學であつた。西ヨーロッパの學藝が輸入せられたとは言つても、ひろい社會の一般から觀れば、それはまだほんの一部分に受け入れられてゐるに過ぎず、その新しい知識や思想は、絶えず不信の眼を以て見られ敵視せられてさへもゐたのである。ノキコフは先づ何よりもこの文敎の敵を戲笑し諷刺しなければならなかつた。昔からあつたやうに、新知識への反對說の一つは、それが信仰を害するといふ點に在つた。カンテミールもロモノソフも、前に述べたやうにかういふ僻見と戰つて來たのであるが、ノキコフもまたこの點に觸れずにはすまなかつたのである。彼が『トルーテニ』に掲げたものの中に、一人の老裁判官からその年若い甥にあてて送つた手紙がある。この手紙の中で、老裁判官はその年若い甥の自由思想を難じ、精進潔齋を守らないことを難じ、學者と交際して世俗的の書物に讀み耽ることを難じ、かくては靈の救濟のために大害あつて一利なき所以を架說してゐるのである。この手紙

が極端に古風な保守的な考へかたを內容としてゐるところに、おのづからノキコフの諷刺の意が含まれてゐるのである。およそ學問に從事することは、貴族のすべき業ではなく、學問があるといふことは、貴族としてはふさはしくない卑しいことのやうに考へる風が、まだこの頃の固陋な貴族の間に在つたのだが、（それは丁度現代の日本の無知な成り上りものの間に、金さへあれば學者は驅使することが出來るから、金持ちの子は無知でもよいと考へてゐるものがあるのと同じ心理である。）ノキコフはこの種の僻見ともまた戰はなければならなかつた。彼は度々かういふ僻見を持ち出して、ロシヤでは昔から貴族には劍、書記には筆、讀み書きは僧のものとなつてゐると言つたり、或はいろいろ固陋な人間の型を持ち出して新しい學問に反對させ、士官には、自分の學問は射擊せよ、切れよと叫んで、部下には極端に嚴格であることを學ぶに在る、學問は心を柔らげる、心が柔げば臆病になるのはわけはない、と言はせ、裁判官には、わが學問はすべての法律を譜記することに在る、而して一旦必要があらば自分の利益のためにその法律を利用するすべをわきまへることに在る。學問で金はもらへない、學問で百姓の暮しは立たない、學問で立身出世の引き立てはして貰へない、さすれば學問は何の役に立つのだ、と言はせてゐる。更にまた、おしやれの若者には、學問で一生の最も美しい年頃を棒なしにしてしまふといふ人間は、何といふ馬鹿なやつであらう、地理學を學ぶために、自然は人間に美貌を與へてくれたのではあるまいし、歷史を學ぶために、人間に美聲が賦與せられたのでもあるまいし、更にまた、物理學を學ぶために、人間の心の中のやさしい情が宿されたといふわけでもあるまい、所詮は愛する人の氣に入るやうに工夫することこそ、一切の人間の學問の目的ではないか、と言はせたりしてゐる。およそかやうにして、どの人物もどの人物も學問ぎらひであつて、めいめいそれぞれの立ち場

から、學問といふもののいかに無用であつて有害であるかを、頗る能辯に說き立てさせてゐるのである。これがノキコフの諷刺のやり方であつた。

無知無學に伴ふ時代の病弊は迷信であつた。いろいろの占ひとかまじなひとかに對する迷信の流行であつた。趣味好尙の粗雜野鄙なことであつた。地方の地主たる貴族たちの暇つぶしの樂しみといへば、狩か、雞の鬪合ひか、郡の町に立つ市場めぐりかであつた。地主の家には、どこにも戲奴や馬鹿の男女が何人か特に雇つてあつて、主人たちのおもちやになつてゐた。雇人や召使どもに對しては、何かといへば鞭や杖で打擲するのを常としてゐた。地主夫婦の間でも殆どそれと同じやうな關係であつた。家庭の敎育といふものも打ちやりばなしで、初步の敎育は無學の村の僧侶や農奴などにまかせきりで、當時の新流行であつたフランス風の敎育といふものも前にもあつたやうに、無學な素性も知れないフランス人を、ただフランス人でさへあれば安心して雇ふといふ風で、萬事盲目的のフランス崇拜に陷り、その一方では、ロシヤ的なものと言へば一も二もなく輕蔑するといふ風であつた。かやうな貴族の地主の下に在つて、最も苦しみ惱んでゐたものは、言ふまでもなく農民であつた。地主の生活ぶりの野蠻さは、何人の上によりも最も直接に農民の上に響いて來たのである。農民生活のくるしみについて、ノキコフの書いたものはすくなくないのであるが、就中旅行記の斷片といふ形である疲弊した村の見聞を錄したものの如きは、農奴に對する心からの同情と、橫暴な地主に對する燃えるやうな憤激との情にあふれてゐて、强く人を動かすものがある。この形は、その當時評判であつたイギリスの小說家スターンの新作『多感旅行記』（一七六八）の形によつたものであつて、途中の見聞に託して感懷を述べ、熱烈多感の情を隨處に披瀝してゐる。この一篇こそは、農奴制度に對する抗議と

して、ロシヤ文學史上の最初のものであると言はなければならない。由來ノキコフの社會生活に對する諷刺は、その各方面の缺點病所を衝くことに於いて尖銳を極めてゐるが如くであつて、しかもその否定的批評の根柢に、文敎愛護の念、人道主義的思想の如き、熱烈な積極的思想を藏してゐることを見のがしてはならない。殊に、彼は一面西ヨーロッパの新思想を尊重しながら、徒らに外國の皮相に心醉して、自國の一切を否定蔑視する態度を心から憎んだ。この點に於いてノキコフはおのづから國民性の自覺を、國民固有の特色を尊重する傾向を示してゐたのである。

ノキコフの諷刺雜誌は當時の讀者の間にひろく讀まれ、『ジヲピーセツ』の如きは、ノキコフ生前に既に五版までも出したほどであつた。（尤もこれ等は、雜誌とは云ひながら、今日のものとはかなり趣きを異にしてゐて、殆ど一種のパンフレット風の文集とも言ふべきものであつた。）しかしながらその一方では、その諷刺の題目となつてゐる地主の貴族その他の人々からは、苦だしく反感を買ひ、その諷刺を以て全貴族に對する侮辱として非難されるに至つて、ノキコフも已むを得ずその諷刺がほんの一部のよくない地主たちのことを書いたものに過ぎないといふやうな辯解を試みたりしたのである。一體かういふ雜誌がエカテリナ二世時代になつて　私人の經營によつて頻りに刊行せられたといふのは、エカテリナ自からこれを招き、これを奬勵したのであると云つてもよいのである。卽ち私人が印刷所を經營して圖書を刊行しても差し支へないことになつたのは、この時代のことであり、その上に尙、エカテリナ自から、前にも言つたやうに『ソシャーカヤ・フシャーチナ』誌に筆を執り、しきりに言論の自由をとなへたのであるから、直接には少くともさういふ事情によつて雜誌の流行を來たしたものと見られる。雜誌の內容は殆ど皆諷刺的ではあつたのだが、そ

の中でも、前に言うたやうな微苦笑程度の手さはりのやはらかい、あまり辛辣でない程度のものと、ロシヤの社會生活の根本的缺陷病所を鋭く衝き、當時の支配階級たる貴族即ち地主の生活を批評して假借するところのないものと、ほぼこの二つの種類があつた。ノキコフの諷刺雜誌の如きは、即ちこの後のものの代表であつた。而してこの辛辣犀利な批評は、エカテリナの好まないところであつた。そこで、エカテリナは『フシャーカヤ・フシャーチナ』の誌上で、ノキコフは『トルーテニ』の誌上で、およそ諷刺といふものの性質なり態度なりについての論爭が開かれ、その他の雜誌もまたその論爭に多少とも參加した。エカテリナの云ふところによると、ノキコフの諷刺はあまりに辛辣で苛酷で、人間一般に共通な弱點として見られることをまで、彼はそれを惡德として責めるから、いかにも思ひやりのない人間を愛しない男のやうに見える。それにノキコフはロシヤの現實生活をあまりに暗く見過ぎてゐる。あまりに暗黑な色彩で塗り過ぎる、ノキコフの諷刺は徹頭徹尾憂愁に充たされてゐて、讀んで譏笑を催すといふよりは、ただ氣が重くなつてしまふ。かやうなエカテリナの批評の中には、ノキコフの諷刺が有する重要な特色に對する不滿が含まれてゐたのであらう。エカテリナの考へでは、諷刺は個々人の弱點を指摘してそれをおのづから矯正させるやうになればよいのであつて、裁判の不法といふことを歎くよりも、めいめいが善人になつて裁判の不法を歎く必要のないやうにさへなればよいと思つたでもあらう。從つて、ノキコフの諷刺がロシヤ生活の暗黑面を非難して、おのづからそこに社會的性質を帶びてゐることを何となく好まなかつたのであらう。しかしながら、それが社會的性質を帶びてゐるといふところにこそ、ノキコフの諷刺の重要な特色があつたのである。エカテリナの意見に對して、ノキコフはもとよりただちにこれを反駁した。ノキコフ諷刺といふものに遙かに眞面目な意

義を認め、それを以て社會の缺點病所と戰ふための有力な手段となした。從つて、社會の缺點病所に對して、なまなか思ひやりがあつたりすることは有害無益であつて、それ等を人間共通の弱點だとして許したりすることは、決して眞に人間を愛する所以の道ではない。惡德病所に對して思ひやりがあるよりも、それ等を根本的に指摘して矯正する事こそ、眞に人間を愛する所以である。諷刺に重大な社會的意義を認めようとするノキコフの立場からは、『フシャーカヤ・フシャーチナ』の輕い上つらを撫でて行くやうな笑ひを以て、單に慰み半分のものに過ぎないものであるとし、寧ろ何等の益なきものであると考へたのである。しかもエカテリナを始め有力な支配階級の人々のノキコフに對する不滿と壓迫とは、おのづからその誌面の上にあらはれ、『トルーテニ』の第二年（一七七〇）は、その創刊の年のものよりも遙かに調子の弱い低いものとなつてゐる。而してその結果は讀者の不滿となり、廢刊となるに至つた。第二次の雜誌『ジヲビーセツ』もまた同じやうな徑路を經て廢刊した。第三次の『カシェリョーク』に於いては、既に最初から、前二者の特色をなしてゐたやうなノキコフ特有の鋭い諷刺を見ることは出來なかつたのである。

『カシェリョーク』の廢刊とともに、ノキコフの諷刺雜誌方面の事業は終りを告げ、更にひろく一般人のための教化普及のために、さまざまの著述刊行を試みるに至つた。彼は先づさまざまのロシヤの歴史上の出版を試みたが、千七百七十三年出版の『古代ロシヤ文庫』と題するものの如きは、あらゆる歴史上の材料を輯錄したものであつて、エカテリナ自からこれを後援した。同じく千七百七十三年に出た『ロシヤの文學者についての歴史的辭典の試み』と題するものは、當時に至るまでのロシヤ詩文人のすべてを網羅して、一人一人につき簡單な傳記と著作目錄とをあつめたものであつて、ロシヤ文學史上の資料として、今日に至るま

でその價値を失つてゐないものである。およそロシヤの文學者に關する限り、一つは文學史乃至傳記の方面から、また一つは文學批評の方面から見て、この書はその最初の資料と見るべきものであらう。千七百七十九年には、モスクワ大學附屬の印刷所と、そこで發刊してゐる新聞『モスコーフスキヤ・ウェードモスチ』（モスクワ報知）とをあはせて借り受けることになり、ペテルブルグからモスクワに移り住み、その新聞の內容を改善し出版の事業を擴張し、これ等の事業を中心としてひろく社會的に敎化普及の運動を起すにさへ至つたのである。かれを中心として當時の知識階級の青年の一派を鳩合し、最初はその團體を「友愛學藝協會」と稱し、後には「印刷組合」と改稱して、相當巨額の資金をもあつめ、大いに事業を擴張した。この印刷所は外部からの注文にも應じたのではあるが、主としてノキコフ一派の同志の計畫に從つて、哲學上科學上乃至通俗敎育的の書物はもとより、西ヨーロッパの文學上の作品の飜譯を始め兒童の讀みものをも出版した。ロシヤに於ける最初の子供の雜誌もここから刊行せられた。さらにまたノキコフはモスコワに於ける最初の公開圖書館を組織開設し、中央に地方に、ひろく圖書の販賣事業を起した。外國書の飜譯のためには、特に文筆の才ある青年をあつめて飜譯學校ともいふべきものをも設けた。そこで飜譯の仕事に從事した青年の中に、次の時代の文學に重要な位地を占めるべきカラムジンもゐたのである。凡そ飜譯については、必ず日常用ひるところのかざりのない俗語を以てすべきことが敎へられたのであるが、それは勿論ノキコフの考へからであつた。後に至つて、文學上の用語を整頓して、文體の統一のうへに多大の貢獻をなしたところのカラムジンが、このノキコフの飜譯學校に於ける修業から得たところの少くなかつたであらうことは、十分想像の出來ることである。以上の飜譯學校のほかに、ノキコフの一派は、政府からの補助を受けることなし

に、全くの自力を以て一種の師範學校を設立して敎師を養成し、その卒業生の中のすぐれたものはこれを外國に遊學せしめさへもしたのである。更にまた、地方の各學校での敎科書は、全く無料で之を分配した。饑饉に際しては率先して救濟のことに當つた。ノキコフを中心とするこの一派の青年貴族の知識階級が社會敎化のために協力一致してなしたところの各方面の事業は、その當時のこととしては、實に異常の社會的活動であつたといはなければならない。しかしながら、ノキコフの周圍には、眞の味方も少くなかつたとともに、その思想傾向にたいし、その事業にたいして、敵意をいだくものもまた甚だ多かつたのである。就中、當時の支配階級の間には、彼の活動をよろこばないものが多かつた。たまたまある宗敎上の論難の書を飜譯して出版したことが、彼を陷れようとして待ちかまへてゐた人々に言ひがかりを與へ、間もなくその印刷所も各地の書店も閉鎖せしめられ、あまつさへノキコフ自身捕へられて裁判に附せられ、强ひて罪におとしいれられて、十五箇年の間シュリッセルブルグ要塞の獄に投ぜられることになつた。それは千七百九十二年のことであつた。獄中に在ること四年、皇帝パウェルの卽位とともに赦されて出獄したが、獄中で甚だしく健康を害し、出獄後は全く社會的活動にたづさはらず、千八百十四年七十歳を以て歿した。

當時漸く目ざめて來たところの社會意識を表現して、現實に對する批評を試みたものとして、しばしばノキコフとともにあはせて說かれるのは

15　ラディッシュチェフ　である。ラディッシュチェフ（一七四九——一八〇二）もまた貴族の出身であつて、その父が、その當時の人としては頗る進步的な敎養のある人であつたため、早くからその子の敎育に心を用ひ、モスクワに出でて學んだ。かれはそこで、あるフランス革命の亡命者から、少からぬ影響刺激を

受けた。千七百六十二年、十三歳の時ペテルブルグに移り、宮廷の侍童隊に編入せられ、越えて千七百六十六年には、五人の侍童と六人の貴族の青年とともに、將來官吏となるの目的を以て、ライプチヒ大學へ留學を命ぜられ、そこで彼は異常の勉强をした。社會科學の方面はもとより、自然科學から醫學に至るまでも、力の限り學び修めた。彼自から、十八世紀のフランスの文學者からの影響刺激を最も多く受けたと言つてゐる。外國の留學から歸つて、彼は豫定の如く官途に就いた。ところどころを轉任した末に、結局稅關方面の官職に安定し、累進してペテルブルグ稅關長の位地に達した。彼は公務の餘暇に文筆を執り、千七百九十年、彼が四十一歳の時に、自家の印刷所から、かの有名な『ペテルブルグからモスクワへの旅』を出版した。この書は忽ち官憲の忌むところとなり、彼は捕へられてペトロパウロフスクの要塞の獄に投ぜられ、裁判はほんの形ばかりで、死刑の宣告を受け、やがて特赦を以てシベリヤの流刑に處せられ、パウェル即位の際赦されて歸還した。アレクサンドル一世の即位までは斷えず警察の監視の下に在つて田舍の莊園に隱棲してゐたのであるが、彼は尙青年時代からの自由を愛する精神を失はず、再び世間に出でて官途にも就き文筆上の仕事をも始めかけたのであるが、上司との衝突から、既にシベリヤ流寳中に失してゐた健康を一層害し、千八百二年遂に自殺するに至つた。彼の文學上の述作としては、『ペテルブルグからモスクワへの旅』が代表的である。この書は別に首尾一貫した中心主題といふものがあるわけでもなく、その當時のペテルブルグからモスクワまでの間の驛遞馬車の駐まる宿場宿場の名前が、その道順に從つて各章の標題となつてゐて、その道中の見聞を記してゐるのである。その間にはいろいろの感想や、筆者個人の思ひ出や、日記や手控へのやうなものの斷片が挿入してある。極めて斷片的な不統一な一種の自由な紀行に過ぎない。しかしこの一見し

て統一のなささうな斷片的の記錄の間におのづから一つの統一的な一貫した何ものかが閃めき出でてゐることもまた事實である。それはこの書の筆者が一定の立ち場を持つてゐて、そこからひろく人間の生活一般について、取りわけ當時のロシヤの現實に對して、獨自の觀察と思索とを試みてゐるところから來てゐるのである。この書の著者は、あらゆる人間に共通して本來有るところの最上至高の存在を信じてゐる。人種や國家の區別を絶して萬人に共通本具なる最上至高の存在はすべての人類を一つの大家族として結合させる。この見地からすると、キリスト敎を信ずる國民とそれを信じない國民との間の區別はなくなる。國家の成立もつまりは社會の協約に基くといふ當時の西ヨーロッパに行はれた考へに從つて、「人間は凡ての點で平等なものとしてこの世に生れて來る。人皆四肢を持ち、理性と意志とを持つ。」從つて人はそれぞれ全く自由であつて、何人からも敢て束縛はせられない。しかし一旦社會が成り立ち、一つの團體生活が始まると、人は自分の意志にのみ從つてゐないで、自から制定した一定の權威に從ふことを承諾し、その權威に對して社會の各員はその權利の一部を讓歩する。この讓歩の目的は、つまり社會の各員がその權利を擁護するに必要な力を得るためである。然かるにもしその權威が、各員の權利を擁護するといふ直接の使命を忘れて來ると、市民は立つて自己の自由をまもらねばならなくなる。——かういふ考へに基いて、ラディッシュチェフは言論の自由の味方であつた。人は個人の侮辱を防ぐために檢閲が必要だといふが、個人の侮辱を防禦するためには裁判といふものがある。また人は自然や信仰に反いた言論を取締るために檢閲が必要だといふが、言論の自由の抑壓は、眞理や信仰の否定せられるのを恐れるからではなくて、政府が自分に對する非難を恐れるところから行はれるものである。政府がその本來の使命の道を行うてゐる場合には、さういふことを恐れる

必要は少しもないのである。ラディッシュチェフが當時のロシヤの現實に對して加へた觀察と批評とは、上に述べたやうな立ち場から行はれたものであつた。彼が見たロシヤの現實の最大の禍因は、卽ち農奴制度であつて、また彼が最も注意深く觀察したところの事實でもあつた。かれはその『ペテルブルグからモスクワへの旅』の中で、『さまざまな實際の見聞を記してゐる。彼が日曜日にある田圃の側を通り過ぎると、そこでは一人の百姓が、日曜日であるにも拘らず頻りに畑を耕してゐる。お前はギリシャ正敎の信者ではなくて、異端的分離派のものででもあるかと言つて訊ねてみると、その百姓が答へて言ふことには、いや、旦那、私は正眞正銘の正敎徒でございますが、一週間の中で働いてもよい日といふのは、日曜日を除けば六日しかございませんが、一週間に六度は、是非とも地主さまの家の働きに出て行かなければならず、その上晩方には森に殘してある牧草を地主さまの庭まで運ばねばなりません、と言ふ。それではお前さんは地主に雇はれて働いてゐるのかと訊ねると、いや、地主さまのところには、たつたお一人の口を養ふために百人の人間が働いてをりますが、私どものうちでは七人の口を養ふために、たつた二人しか働くものはないのでございます。旦那、數の勘定は御存じでございませう。と答へたのである。ラディッシュチェフは驛場で農奴たちを賣買する戮り賣の行はれるのを目擊したり、或は地主の出たらめな醉興から相當の敎育を受けさせてもらつた青年農奴の、それがために却つてよけいに自己の奴隸的境遇から苦しみ惱んでゐるのを見たりした。また、ある地主の家族を殺したために死刑の宣告を受けた農民たちもゐた。その地主は、宮廷に仕へてゐたつまらない身分のものであつたのだが、地主としてあらゆる橫暴を働き、農民の持つてゐるあらゆるものを體よく奪ひ取り、殘酷な體罰を加へ、その婦女を犯したのであつた。しかし、地主を殺したといふ事實だけで澤山で

あつた。事のそこに至るまでの原因などは問題にはせられなかつた。『法律は行爲について判じ、そこに至らしめたる原因には觸れず』とラディッシュチェフは難じてゐる。また別のところで彼は、『まことに農民は法律上死人なり。法律は犯罪の事件によつてのみ農民を認む。社會の結合を破るとき、罪惡の人となるときに於いてのみ、社會のこの一員は、自己を保護するところの政府の知るところとはなる！かく思ひてわが血は悉く涌き立ちぬ！』とも言つて憤慨してゐるのである。そこで、農民たちのこの認められない守られない狀態を見るにつけ、彼はおのづから、國法を守るべき義務ある官吏の狀態に注意を向けずにはゐられなかつた。而して、上は最高の上司から、下は最低の下僚に至るまで、その行ふところは、悉く官金の費消と國法の無視と、弱者を苛め强者富者へ取り入ることばかりであるのを見たのである。國家の最高の權威は、國內のこのありさまを知つてゐるのであらうか、國法をみだるものの行跡を目に見、またそれがために苦しみ惱めるものの悲歎を耳に聞いてゐるのであらうか。ラディッシュチェフは、夢に自から王となつて、玉座に坐し、その周圍には佞臣多く侍して、國家の安泰を保證するのを聞く、國は富み、商業は榮え、文敎は普及し、國法は公正にして且つ仁慈の旨を體して行はれ、軍隊は榮譽に輝いてゐるといふやうな報告を聞く。すると突然群集の中から身なりの粗末な老婆が立ちあらはれて、自から眞理と名乘り、王の玉座近くまで近よつて、王の眼から翳を取りのける。王ははじめて自分の眼でものを見透す力を得て、今まで欺かれてゐたことをさとる。ラディッシュチェフはかやうな自分の夢ものがたりを記した終りに、世界の君主よ、もしわがこの夢ものがたりを讀んで、荒唐無稽のこととしてこれを嘲笑し、或は苦言耳にこころよからずとして眉をひそめるやうなことがあらば、わが夢に見たところの老婆は、既に遠く汝が身邊から飛び去つたものと知れ

と言つてゐる。

ラディッシュチェフがロシヤのために示さうとした未來の新生活への道は、ただ一つであつた。卽ち諸惡諸禍の根源たる農奴制度の廢止これであつた。彼は農奴制度の存續が、人類の根本的權利を侵害破壞するものであり、その制度の行はれてゐる國としてのロシヤの國力の增進を阻止してゐるものであるとして、これを非難するばかりでなく、その『ペテルブルグからモスクワへの旅』の中で、いかにしてこのロシヤの農民を漸次に解放して行くべきかの方策について、その實際上の計畫案をさへ述べてゐるのである。農民の解放とともに土地の分與の行はれなければならぬことを力說して、彼はその當時として極めて急進的な思ひ切つた改革を主張したばかりでなく、後の千八百六十一年に於ける農奴解放の實現の時代と比べてすら、寧ろ理想的な根本案を說いた。しかしながら、彼のこの書は、その發刊以來久しく國禁の書となつてゐて、千九百五年に至つて漸くロシヤの讀者の前に公開せられることになつた。このラディッシュチェフの場合でも、さきのノキコフの場合でも、君主中心の國家の實用目的のために迎へられた西ヨーロッパの新學藝が、おのづから政治上社會上乃至道德上の新思想を將來することになつて、いつまでも君主のためばかりや、征服的軍事的國家のためばかりに役立つてはゐなくなり、寧ろかへつて、その君主や國家の依存するところの在來の制度組織を一變せしめようとする力として働きかけて來たことを明かに示してゐる。しかしてその新思想の働きかける當の對象は、もはや必ずしも國家ではなく、ひろく社會そのものであつた。この經過は、新學藝やそれに伴ふ新思想の攝取に從つて避けることの出來ない自然の成り行きであつて、ロシヤの文學もまたその時代的變遷のあとをおのづから表現せざるを得なかつたのである。

新思想の浸潤にともなつて、一種の自由平等思想が、少くとも一部の上流貴族の知識階級の間に芽ぐみ、眞實と自由と自然とを尙ぶ傾向が、形はさまざまに異なりながらも、ともかくも時代の最も進んだ意識となり心理となつたことは、もはや蔽ふべからざるところである。この事實は、上に述べて來た諷刺の文章や紀行の間からも見られるのであるが、更にピョートル時代以來ロモノソフの頌歌を經て、おもむろに發達して來たところの抒情詩の方面に於いても、またおのづから看取することが出來る。エカテリナ時代に於ける抒情詩方面の代表者は

16　デルジャーキン（一七四三——一八一六）であつた。十八世紀の詩人としては、彼は恐らくは最もすぐれた位地を占めるものであらう。彼の詩人としての天稟は決して小なるものではなかつたのであるが、そこに彼をして十分にその天稟を表現せしめなかつたところのさまざまの事情があつた。一つはこの時代が、國語の新舊の要素の混亂から脫しきらず、從つて詩歌がその十分な自由な表現をなし得るために必要な文學上の言葉の統一整理が出來てゐなかつたといふこともあつた。更にまた、一般に敎育の普及がなく、純粹の文學を鑑賞理解する讀者の社會といふものも、極めて狹く且つ低かつたといふ事情もあつた。これ等の事情が、直接にまた間接に、文學の發達に重要な關係を有することは言ふまでもない。しかも尙その上に、ピョートル時代以來ロシヤ文學の傳統として行はれてゐた氣風は、擬古ぶりの莊重古雅を好む傾向であつて、上に言つたやうに、國語が自由さと眞實さとを十分に持ち得てゐないだけに、また讀者の社會が文學鑑賞上の潑剌たる彈力を十分に持ち得てゐないだけに、その模倣的な傳統的な擬古ぶりの癖から脫することも容易ではなかつたのである。かういふ事情の間に在つて、デルジャーキンもまたおのづからそれ等の制限から全く

超越することは出來なかつた。ガウリイル・ロマノキッチ・デルジャーキンは、韃靼人の貴族の血統を引いてゐる小貴族の出身で、父は貧しい陸軍の士官であつたので、デルジャーキンも幼い頃から父の任地の變る毎に各地を轉々として移り動いた。かやうな境遇が幼時のデルジャーキンの教育上あまり好ましくなかつたことは言ふまでもないのであるが、七歳の時に漸くオレンブルグのある寄宿舍學校へ入學することが出來た。この學校は追放せられたドイツ人の經營で、その男は無學であつたが、とにかくここでデルジャーキンはドイツ語だけは學ぶことが出來た。父の死後彼の一家は窮境に陷つたが、母が子供たちの教育に熱心な人であつたので、カザンの町に移り、開校せられたばかりのカザンのギムナジヤ（日本の七年制高等學校に當る）へ入學した。その時分の教育は隨分不完全なもので、後日デルジャーキン自から言つてゐるところによると、文法なしで外國語を教へられ、證明なしで數學を教へられ、樂譜なしで音樂を教へられたりしたのであつた。ここで彼はこれといふほどの教育も受けないうちに、半途で退學をしなければならなくなつた。それは千七百六十二年彼が十九歳の年に、かねて幼少の時分に豫め登錄してあつたところのプレオブラジェンスキー近衛隊へ入るためにペテルブルグへ行くことになつたからである。當時のロシヤの貴族の間には、男兒は生れて直ぐにでも、將來勤務すべき近衛の軍隊へ豫め登錄して置いて、一定の年齢に達すると、そこへ入隊して何年かする間に士官に任命せられるといふ慣例があつたのである。彼は都にこれといふ身寄りも特別の有力な保護者をも持つてゐなかつたので、身分こそ貴族の出ではあつたが、特に優遇せられ昇進させられるといふことなく、あたりまへの兵士なみに營舍に住み、歩哨に立ちなどもした。かういふ境涯で學修の餘暇などのあらう筈はなかつたのである。格別の有力な推擧がないので、士官になるのも甚だ手間取り、自然

その間に周圍の惡風にも染み、飲酒やカルタ遊びに耽つたりもしたのであるが、天分が彼を救ひ、かういふ中に在つても、かねてギムナジヤ時代から少しづつ試みてゐた詩作をたのしみ、軍歌や戀愛詩のやうなものを書いた。或はロモノソフの詩の模倣や、ドイツの詩の飜譯などをも試みたりしたのである。

千七百七十三年、彼が三十歳の時に、はじめて士官の最下級に任ぜられ、その年直ちに東方ロシヤに向けて出發、折柄起つてゐたプガチョフの叛亂の征定に從つた。彼は士官として、一面なかなか元氣で勇壯でもあつたが、またその他面では、上官や同僚に對してなかなか剛情我慢で手のつけられないところを持つてゐた。この二面の性質は、彼の性格の著しい特色で、これがまた後年に於いても、彼の閲歴の上にいろいろの影響を及ぼしたのであつた。彼の第一詩集は、『チタラガイの丘にて飜譯し創作せられたる頌歌』と題して、千七百七十六年、彼が三十三歳の時に、著者の名をあらはさずに出版せられた。チタラガイといふのは、前に言つたプガチョフの叛亂征定のためにかれが暫くとどまつてゐたヲルガ河沿岸の砂丘の名である。この詩集には、まだロモノソフの影響が隨分著しく見えてゐて、擬古ぶりの莊重さを眞似ることから脱し得てゐなかつたが、この頃から彼は漸く眞の詩が單純で自然で國民的でなければならぬことをさとるやうになり、ロモノソフあたりの傳統的影響から脱しようとして來た。この一轉化には、少數ながらもかれの周圍にゐたところの文學上の友人の感化刺激に負ふところが少くなかつた。卽ちヘムニッツェル、カプニスト、リヲフなどの中、就中リヲフは、新しい文學のためにロシヤの國民精神が攝り入れられなければならないことを十分理解してゐた人であつて、自からロシヤ民謡集を編纂し、親近の友人たちにその點で多くの刺激を與へたところの、文學史上のかくれた先驅者の一人であつた。その頃からデルジャーキンの詩作はいろいろの雜誌に

も揚げられ、漸く詩人としての名を知られるに至つた。しかし彼が廣く社會の注意を引くやうになつたのは、千七百八十二年、彼の四十二歳の時に出た有名な頌歌『フェリツァ』の一篇による。この詩はエカテリナ二世の自由進歩の傾向の讃美を中心とした頌歌であつて、その間に、エカテリナを取り圍む宮廷の大官たちの空虛無爲の生活を、それぞれのモデルに從つて、輕く諷刺的に歌つたものであつた。この諷刺が自分に累を及ぼしはしまいかと心配して、彼は最初この詩の發表公刊を躊躇してゐたのであるが、當時の學士院長ダシュコワ公爵夫人が作者の知らぬ間に學士院の雜誌に出してしまつた。然るにこの詩は深くエカテリナの心に適うて、厚く恩賞を賜ひ、更にこの詩の中で諷刺の對象となつてゐる大官たちへは、それぞれその當人たちのことを言つてある詩句に印をつけて、エカテリナ自から一々この詩を送り届けさせたりしたのであつた。かやうにしてデルジャ：キンには宮廷に近づく機緣が與へられ、官途の上にもおのづから影響があらはれて來た。彼は諸地方の知事に任ぜられたが、到るところでその任地の總督と衝突した。彼にしばしば越權の處置があつたり、對人關係に於いてあまり巧妙でなかつたのは事實である。前にも言つたやうに、彼は本來上司に對して剛情であつたのだから。しかしながら、彼はさういふ場合に於いてでも、その意圖するところは常に最善の手段と信ずるところを實行しようとするものであつて、何事につけても一般公共の利益を主とし、當時の官吏の間の常習であつた收賄や不法の裁判を最も忌み、私利私慾のために自己の權威を濫用するやうなことは決してなかつたと傳へられてゐる。彼は地方總督との衝突のために、中央へ召喚せられたりしたが、申開き立つて後、エカテリナの祕書官に任ぜられた。しかし、祕書官としての彼は、事毎に必ずしもエカテリナの意に協ふといふわけでなく、たとへば國事犯人などに對する處置の態度の上にも、相合はないものが

あつた結果、彼はこの宮廷内の職務に堪へず、二年の後職を辭して元老院議官に任ぜられた。エカテリナの次の代卽ちパウェルの時代には、彼の位地も動搖して不安定であつたが、アレクサンドル一世の代になつて、「法と情とによつて」國を治めるといふ布告とともに、再び用ひられ、千八百二年大臣制の施行せられるとともに、デルジャーキンはロシヤに於ける最初の司法大臣に任ぜられた。しかし彼はこの當時に於いては、既に前時代の舊人の部類に屬してゐたので、新帝アレクサンドルの施設には同意しがたいところが多く、在職一箇年で官を退き、莊園に隱棲するに至つた。それでも多の社交季節が來ると、ペテルブルグへ上つて來て、彼はおのづからその當時に於ける文學上の舊派の中心頭目として仰がれたのである。彼はその死にいたるまで文學上の勞作を怠らなかつたのではあるが、その新作の詩はもはや彼の進展を示すものではなかつた。昔時の自由な熱情はもはや見られなかつた。殊に彼が晩年好んで筆を執つた劇作の方面は、最もその力の衰へを示すものに過ぎなかつたのである。彼の死に先きだつこと一年、慣例によつて、ツァールスコエ・セロの學習院卒業試驗に彼もまた列席した。そこで年わかいプーシュキン（次の時代の大詩人）は『ツァールスコエ・セロの思ひ出』と題する一篇の詩を來賓の前で朗讀して、年老いたデルジャーキンの心を深く動かした。自分の後繼者がここにゐると言つて、彼はその年少の詩人を祝福した。プーシュキンは、後年その長詩『ニウスゲーニニー・オネーギン』の中で、「老人デルジャーキンはわれ等を認め、棺に入りつつも祝福してくれた」と歌つてゐる。ロシヤ文學の新舊二つの時代の代表者の、最初の唯一度のこの會合は、一つの劇的光景として、世に語り傳へられてゐる。その時デルジャーキンは七十二歳、プーシュキンは十七歳であつた。そのあくる年の千八百十六年に、デルジャーキンは殁したのである。

デルジャーキンの詩の中心は頌歌である。この點に於いて、彼はあくまでもロモノソフの衣鉢を襲ぐものであつた。高い調子、限りない空想、雄大な形容、あらゆる譬喩や神話的色彩を用ひての粉飾、すべて擬古ぶりの詩風としては、就中莊重なほめうたである頌歌としては、無くてはならないものとしてさういふ大袈裟な飾りが用ひられた。殊にエカテリナ時代に於けるロシヤ軍隊の榮譽功績をほめうたふ場合には、かういふものものしいロモノソフ張りの擬古體が取りわけ用ひられた。彼は武威のかがやかしさに全く冷淡でありながら、ただ強ひてわざとらしく誇大にほめうたつたのではない。勿論そこには眞にその動功を讃美する情があつたのではある。しかしその讃美があまりに大袈裟になり過ぎて、その眞實の情をかざり包んでしまふやうになつたのである。ある戰勝を祝する頌歌のはじめに、ロシヤの榮譽をほめたたへて、「ゼスギヤスは焰を吐き、火の柱は闇に立つ。紫の餘光はかがやき、黑煙は團々として昇る。海は紅し、雷ははためく。ゐんゐんまたゐんゐん。大地はふるひ、閃光の雨は注ぐ。紅焰なす熔岩の流はたぎる」かくの如きこそロシヤの戰勝の光榮の姿であると言つてゐるのなどは、あまりに持つてまはつた、大袈裟な形容で、寧ろ今日の眼には滑稽でさへもある。折角眞實にあるところの戰勝の榮譽をほめたたへる心もちを、甚だ緣遠いイタリーのゼスギヤス山の噴火の壯觀を以て、出來るだけ雄大に言ひあらはさうとしたところに、單純と自然とに對する擬古ぶりの裏切りがあるのである。しかしながら、かういふ詩にさへ見られるデルジャーキンの一つの特色は、流血の慘から生れたこの戰勝の頌榮が、やがて平和の光りを仰ぎ、あらゆるキリスト教國民の友愛的結合を求める聲となつて終つてゐるといふ點である。戰勝の光榮は、ただそれだけのものとしてのみほめたたふべきものではなく、眞の平和と友愛とを招き來たるところにこそ眞にそのほまれを頌榮すべき所以

がある——これがデルジャーキンの生涯を通じての信念であつた。彼は外面的な國家的榮譽の偉大を感するとともに、その社會的位地にかかはらずひろく人間の內面的價値を認め、後のアレクサンドル一世の生誕を祝して、「玉座に在つて人間たれ」と歌つてゐる。この句の意は、人間であることが神聖であるといふ人道主義的な精神に基いてゐるのであつて、この啓蒙的自由思想時代にふさはしい特色的な言葉である。デルジャーキンの初期の詩が、上の例からも知られるやうに、ロモノソフ張りの擬古的な模倣のあとを多分に有してゐたのは事實であるが、しかし全體として見れば、これを前の時代に比べて、その形や內容の上で、同じ頌歌にしても、生き生きとした眞實な感情を多分に示してゐるのである。出來るだけ一般に分りやすい言葉で、出來るだけありのままの眞情を表白し、眞實であるかぎり、帝王に對してもまた憚るところなく微笑を以てこれを語らうとするのが、少くともかれの詩人としての一生の間に見られる努力のあとである。彼は出來るだけ單純と自然とに近づかうとして、自から直接に觀察經驗したところの人生自然の情景を、ありのままに生き生きと歌ひあらはし得てゐる一方で、その同じ一篇の詩の中に、それ等現實からの直接の描寫と相竝んで、やはりまだ神話の神々を持ち出したり、いろいろ不自然な擬人法などを用ひたりすることから、全く脫することが出來なかつた。彼の同時代の人々は、彼を呼んで「フェリツァの詩人」と稱したが、フェリツァは彼の代表的な作品の標題に因んで、エカテリナ二世のことを意味したのである。つまり彼は「エカテリナ二世の詩人」と呼ばれてゐたわけである。彼はもとより單にエカテリナ二世時代の代表的詩人と言つてよいのであつて、その時代の表面も裏面も、光明面も暗黑面も、悉く彼の詩の中にあらはれてゐると見られる。この時代はまことに多く

の矛盾を内に藏してゐた時代であつて、それがこの詩人の想像力と現實感と觀察批評力とを刺激しないではゐなかつたのである。一方から見ると、時代の中心、最高處にはエカテリナ二世が立つてゐる。自由思想の代表者のやうに、進歩的な人道主義的な教化の源泉のやうに、いかにものやはらかい魅力ある女帝の姿が立つてゐて、その周圍には多くの立派な臣下が侍立し、ロシヤを未だ嘗てなき勝利と光榮との高きに引き上げてゐるやうに見える。しかもまたその他面では、その女帝の寵臣どもが徒らに跋扈跳梁して、あらゆる贅澤と放恣との限りをつくし、歡樂に耽湎し、私慾私利をほしいままにして、横暴非道を逞くし、一般の民衆は貧窮と無知との中に蠢いてゐる。實生活に於けるこの深い矛盾の事實は、デルジャーキンの心に觸れずにはゐなかつたのである。この現實の矛盾は、彼の多くの頌歌に於ける一脈の諷刺的傾向となつてあらはれてゐる。彼の詩人としての特色の最もよくあらはれてゐる代表的の作品は、千七百八十二年の『フェリツァ』である。作者はこの一篇によつて俄かに詩人としての盛名を得たのであつた。この詩は前にも一寸言つたやうに、專らエカテリナ二世の讃歌であつて、女帝をそれになぞらへたフェリツァといふ名も、エカテリナ自から孫達のために作つた譬喩的なお伽噺の中から取つて來たものであつた。そのお伽噺は、『王子フロールの物語』で、あるキルギス族の汗が、かねて容貌の秀麗と早熟の才智とをもつて聞えてゐたところの少年の王子フロールを、その兩親の手から盜み出す。そしてその王子に、「棘のない薔薇の花」を探して來るやうに命ずる。キルギス族の汗の娘フェリツァは、この少年の王子を憐れんで、自分の息子のラズスードク（理性といふ意味）といふものを私かに王子の道案内者として遣はす。その道案内者の助力をかりて、王子フロールは汗から命ぜられた探求の目的を達し、「棘のない薔薇の花」を發見する。これがそのあら筋である。

この物語は言ふまでもなく譬喩的な意味をもつてゐるのであつて、一體に譬喩的な物語は十八世紀の一つの流行であつた。その教訓的啓蒙的理智的な傾向が時代の趣味に適合してゐたのであつたらう。この物語での「棘のない薔薇の花」は即ち美德を意味するのであつて、つまり物語の大意は、美德はただ理性の聲に聽くことによつてのみこれに達することが出來るといふのである。デルジャーキンはこのエカテリナ自作のお伽噺からフェリツァといふ名を取つて、それをエカテリナ自身になぞらへ、一面では女帝の個人としての日常生活、習慣などを敍し、その平生の簡素にして勤勉なことを讃へ、徒歩をいとはず、食卓をおごらず、休息を求めずして讀み或は書き、その筆端からは萬民に幸福安寧を注ぎ、世の常の人の如く夜を徹してカルタを遊ぶやうなこともないと言ひ、假面舞蹈のやうな空虛な遊樂を深く好まず、またその當時上流貴族の間に大いに流行したところの神秘的な降神術などにも心を引かれない、それは所詮理性の明徹なためであると言ひ、フェリツァ即ちエカテリナの性行を讃めたたへるとともに、それを一層引き立たせるために、その周圍の大官たちの缺點をあげ、彼等の豪奢遊惰の生活や、放恣耽湎の生活を述べてゐる。或は長夜の宴樂を恣ままにするもの、或は途方もない征服欲を逞しうして空想を描くもの、あるひは粗暴であつて、馬を狂愛し、あるひは拳闘その他の力技に耽るもの、或は犬の嚙み合せを好むものなど、いづれもそれぞれ實在のモデルに從つて、それとは勿論指さないで敍述してあつたので、當時の讀者には直ぐにそれと分つたのである。概してそれ等の諷刺的敍述は、いはゆる「微笑的」な程度のものであつて、深刻に鋭利に人を刺すやうなものではなかつたのであるが、中にはそのために侮辱を感じて、それ以來デルジャーキンの公生活に對しいろいろ邪魔をするやうな事もあつた。言はば一種のモデル問題から反感を招くに至つたわけである。『フェリツァ』

の後半はエカテリナを一個人としてでなく君主として敍寫し、その政治上の事業や、その治世の精神や、國民への態度などに觸れて、これを前代と比べてゐる。卽ちエカテリナが國民に對する態度の人道主義的であることを特に力說し、自己の國君たる權威に對して自由開明の見地を持する事を說き、その治世の精神は恐怖によつてでなく愛を以てしようとするものであると言つてゐる。實際またエカテリナ二世の治世の初期に於いては、その『勅諭』に見えるやうに自由開明の思想によつて指導せられてゐたのであつて、國君としての權威を用ふるに溫情仁慈を以てしようとしたのである。多くの在來の苛酷な法律は改廢せられ、國民の心に人間の尊貴の感情を深く滲みわたらせようとした。たとへば今までのやうに、請願訴願の上書に際しても人は自から「奴隸」と呼ぶの形式に從ふことなく、「忠良なる臣民」と自から稱すればよいといふやうな點までも、命じてこれを改め行はしめようとしたのであつた。願書の形式に關するこの極めて些細な一點、しかもただ一語についての改廢さへ、その當時では、エカテリナの自由開明の治世の方針のあらはれとして、可なり世間の注目するところであつたと見え、ひとりデルジャーキンがその事を述べてゐるばかりでなく、同時代の詩人カプニストの詩にも、『ロシヤ國內に奴隸の稱呼の廢止せらるるについて』（一七八六）といふ頌歌さへあるくらゐである。しかし、さうは言つても、エカテリナ時代にその自由開明の方針のおかげで著しく改善せられたのは專ら上流卽ち貴族階級の狀態であつて、國民の大衆の生活狀態に至つては、一向前と變りがなかつたばかりか、前にも一寸言つたやうに、農奴制度の實施範圍の擴大せられるとともに、寧ろ一層わるくなつてさへゐたのである。この請願書などの形式のことにしても、直接それにかかはりがあつて、その改善をありがたく思ふものは、やはり社會の上流、卽ち貴族の階級に過ぎなかつたのである。しかし、た

とひ底を割つて見れば、實際の事實はその通りであつたにしても、それはその當時の社會といふものが殆ど上流卽ち貴族の階級を中心として成立してゐて、社會として力ある集團は、その少數の人々の團體以外にはなかつたのだといふ事情から考へて、當然自然のことだと言はなければならない。とにかくさういふ意味での當時のロシヤの社會に於いては、エカテリナの政治の方針は非常に評判がよかつたものであつて、その上外交上軍事上の成功が、それに一層の光輝を添へたのである。デルジャーキンの詩は、自由と正理の時代が來たやうに感じたところの、その時代の社會（上に言ふやうな意味での社會）の思想感情をそのままに表白したものであつて、「この前代未聞の事、ただ君（エカテリナ）にこれを見る、君は萬端について、あらはにもひそかにも、國民の知り且つ思ふことを斷乎として許したまへるが如し。また君自からについても、ありしことをもなかりしことをも語ることを禁じたまはず、あだかも鱈魚にさへ、君があらゆる仁德をそしるものにさへ、常に救さんとしたまふものの如し」、といふやうな意味のことを言つて讚頌してゐる。或はまた病院、養育院などの設立、國外旅行の許可の容易になつたこと、商工業の自由、司法の改善など、さまざまの施政の事實をあげてゐる。要するにこれ等の讚美の中には、エカテリナ自身にあてはめて、可なりの程度まで誇張の含まれてゐるのも事實ではあるが、しかしながら、このフェリツァの理想的な面影を詩の中で敍寫するにあたつて、デルジャーキン自身の心持ちが眞實であつたといふことは疑ふ餘地もない。とにかく、エカテリナの時代になつて、何となく世の中がものやはらかに、ぱつと明るく、自由に感ぜられ、晴れ晴れして來たやうな氣のしたのは、その時代の人々の實感であつたのだから、たとひそれが一時の幻影のやうなものであつたにしても、さういふ一種の理想の中に描かれたエカテリナの姿といふものは、デルジャーキン

の詩によつて代表的にうたはれたと言つてよいのである。その點に、またそれに附帶して、エカテリナの周圍の人々への諷刺の中にその時代の現實の一部の表現があるといふ點に、いづれもこの詩の歴史上の意味がある。而してこの詩が、一面女帝の莊重な頌でありながら、それと同時にその周圍の人々の諷刺的敍寫をも含んでゐて、どこか輕いおどけたやうな調子をもち、以前のロモノソフあたりの重々しい大がかりな頌歌に比べると、いかにも簡潔な分りやすい言葉で、樂々と拍子よくうたつてあるといふ點は、デルジャーキン自身の初期の大袈裟な擬古ぶりの作と比べても、著しい違ひである。この內容の自由さと句法の自然さとが、この作の詩として重大な特色であつて、さすがに前代のものから進んで一つの新らしい時代を開いたと思はせる。措辭のすなほさ、かざりなさ、輕妙さが、形の上ばかりでなく、詩の心持ちからも、よほど一般民衆の生活に近づいて來たことを思はせる。この輕妙な、いくらかおどけてゐるやうな、ありふれた飾りのない言葉での、調子のよい詩句のやり方は、後のプーシュキンの敍事詩などに至つて大成せられた觀がある。

『フェリツァ』と關聯して『ムルザの夢』（一七八三）といふ一篇も、デルジャーキンの詩風を知るに足る作品である。ムルザといふのは、本來ロシヤの臣民となつてそのもとの稱呼を失つたところの韃靼の貴族のことを言ふのであるが、前の詩『フェリツァ』では、フェリツァ卽ちエカテリナの周圍の大官貴族のことをムルザといふ言葉で呼んでゐるので、ここではその意味でフェリツァに仕へる周圍の臣僚の一人といふ意味で用ひてある。『ムルザの夢』は、『フェリツァ』の好評に對する嫉妬や、その中で諷刺の對象となつた人々の不滿や、さういふ方面から、作者を以て阿諛追從してエカテリナに取り入らうとするものであるとした非難に對する應酬として自己辯護として書かれたものである。『フェリツァ』は元來作者が公表することさへ欲

しなかつた作品であつて、これによつて女帝に媚びてその寵遇を得ようなどとは考へないで、全く心からエカテリナの自由開明的傾向を讃美して書かれたものであつた。『ムルザの夢』に於けるそのムルザは、卽ちデルジャーキンその人であつて、先づペテルブルグの夏の月の夜の光景を敍寫し、ひとりわが室にゐてさまざまの冥想に耽つてゐるところへ、その眼前に思ひがけなくも不思議のかがやかしい姿があらはれる、それは神々しい女神の姿をしたフェリツァその人であつた。フェリツァの女神は、かねてデルジャーキンが耳にしてゐるところの、彼の詩が阿諛の作であるといふ世間の非難を繰り返して告げ、もし詩といふものが戲れでなく、神々の貴いたまものであるなら、このたまものは、ただ神々のほまれとその道とのためにのみ用ひらるべきであつて、人間のはかなく空しき讃美や阿諛のために用ふべきではない。たとひ一國の君主といへども、人間は人間であつて、頭上には王冠をいただくとも、心の內には五慾あるが故に、阿諛の毒はひとしく君主の心をも害する。眞に正しき有德仁慈の君主にとつては、何等の阿諛賞讃を必要としない。詩は阿諛のためのものではなくして、人々を敎へ導くべきものであり、善と眞との道に誘ふべきものである、といふやうな意味のことを述べ立てる。デルジャーキンのムルザは女神の姿のフェリツァのこの言葉を聽いて大いに驚くのであるが、自から省みてやましくないところから、フェリツァへの讃美が阿諛のためでもなければ、自分一身の利達のためでもなく、ひとへにそのフェリツァの國民のためにするところの勤勞苦心に對する心からの感謝の一念に基くものであることを述べて、日月の光の如くに君が姿を未來の代々に揭げ示し、後世の子孫に告げ知らせんがためにこそ歌つたのであり、今も尙歌ひ、この後も且つ歌ふであらうと言ひ、君の光りによつてわれ自からもまた不滅となるであらうとさへ言つてゐる。卽ちフェリツァの德を讃仰すること

を良心による自からの務めと感じ、これに從ふことによつて自分もまた詩人としてながく記憶せられるに足るとしたのである。かういふデルジャーキンの心持ちが、少くともその當時のエカテリナに心醉してゐた心持ちが、決して阿諛でも追從でもなく、眞實心からのものであつたといふ證據は、彼がエカテリナに對するその後の態度によつて十分推知することが出來るのである。彼が後日用ひられてエカテリナの祕書官となり、日常その身邊に親近するに及んで、彼はもはや以前の如くにエカテリナを讃仰するの詩を書くことが出來なかつたのである。エカテリナが彼に期待するところは、宮廷詩人としての彼をして自己の讃歌を折にふれて書かしめることであつたのだが、デルジャーキン自から記してゐるやうに、宮廷の生活を親しく目のあたりに見て、エカテリナの生活や思想の眞相を鋭敏に觀察すればするほど、「陛下を讃美して熱烈純粹な感情を以て書くことは殆ど少しも出來なかつた」のであつた。彼目からその當時この心持を四行詩に歌つて、「よき音の鶯は捕はれたり、手もてこれをつかめば、あはれなる小鳥は高音を立てず苦しみ鳴く、されど人は、鳴け、小鳥よ、鳴けとぞ迫る」と言つてゐるのが、この間の消息を最も僞りなく言ひあらはしてゐるものであらう。彼自から、「大いなる弱點をもつてゐるその本人を目近く見て後は、もとのやうな高い理想を揭げ保つやうに自分の心を燃え立たせることは」もう出來なかつたのである。彼は「わが心の商品を金のためには賣ら」なかつたのであつて、彼の詩の中に、いかにも阿諛と見えるほどに誇張した讃仰の意のあふれてゐるのは、デルジャーキンが阿諛追從の詩人であつたといふことの證據として見るべきではなくして、ものものしい頌歌といふ傳統的な詩の形式に固有な已むを得ない特色として、その當時の一般の好尚と結びつけて解釋せらるべきものであらう。つまり、自由開明の思想傾向をよろこぶといふ心持ちは、あくまでも眞實な

のであるが、その心持ちを一層自然に單純に表現するための形式が見出されてゐなかつたわけである。而してまた、その形式が見出されてゐなかつたといふことは、その自由開明の思想傾向がわづかに一人の君主によつて代表せられ、その君主の意志次第で忽ち光明がひろく國民の間に行きわたるもののやうに空想し想像してゐたところから來てゐるとも言へる。かういふ空想や想像は、之れが眞實衷心からのものであればあるだけ、君主一人の讃仰に集注せられなければならないのであつて、從つてそれを表現する形は、ものものしいほめ歌として凝り成すことになるのである。かういふ形がもつと碎けた自由なものになるためには、その衷心からよろこびたたへようとする心持ちそのものの方向や性質が變つて來なければならない。しかし時代はまだそこまで成長してゐなかつた。デルジャーキンが詩人として眞摯の天分を持ちながら、その詩作の上で僞りではないかと疑はれるやうな誇張の頌歌にとどまつてゐたのは、時代の心理が强い力で個人の天分を制御してゐた一つの例證であると言つてよい。

デルジャーキンが千七百九十五年に書いた『王者と法官とに』と題する詩は、非道の君主に對する神の懲罰を求めたものであつて、正しきものの神來つて非道を懲らし、「地上の唯一の王」となることを呼びもとめる一つの頌歌である。デルジャーキンに對して快く思つてゐない一派は、この詩を以て革命的傾向を有するものであるとし、神を地上唯一の王者たれと言ふのは、卽ち地上の君主を排するの意であると說いた。エカテリナは、從前のやうに自分に對する頌德の詩を書かなくなつてゐたデルジャーキンに對して、かねて不滿をいだいてゐたところでもあつたので、この讒訴は可なり女帝の心を動かしたのであつたが、デルジャーキンの上書した辯解の『手記』によつて、その疑ひを解くことが出來た。その『手記』の中で彼は「何ものに

もまさつて、國民をして君王と大官とを敬愛せしめ、後世をしてこれを讃仰せしむるものは、彼等がその民をして自から言はんと欲するところの眞實を語らしめ、且つその眞實を寛容するに在り。徒らに耳に快き言葉にして、その中に鹽を含まず教訓を包まざるものは、力なく、疑はしく、確かならず。讃美は美德を强固にすれども、阿諛は美德を滅壞す。眞のみひとり英雄をして不滅ならしむ。鏡は美女にとりて厭はしきものたる事能はざるなり」と言つてゐる。彼はまた、當時の大官たちの中に、豪奢放恣の生活に耽つて、民の苦しみを多くかへりみないもののあるのを難じて、簡素、勤勉にして義務を重んずるところにこそ眞の偉大があることを說き、ピョートル大帝を例に引いて、これを範とすべきことを言ひ、公共の幸福安寧のためにこそ碎身すべきであつて、徒らに一身の外面的榮譽を追ふべきでなく、官位勳等のかがやきよりも內に德性の光りをみがくべく、わが心かがやけば卽ちわれ王侯たり、私慾を制御すれば卽ちわれ支配者たり、萬人のために憂ひて卽ちわれ貴族たり、眞の高位高官に値ひするものは、君王と民との間に立つところの仲介者であらねばならぬ。從つてその仲介者としての最高の資質は公明正大であらねばならぬ、公明正大なるものは自己の思ふところを包みかくすところなく自由に表白しなくてはならぬ、それによつてはじめてその高き義務を果たすことが出來る、「玉座の前に蛇の如く身を曲げくねらすことなく、直立して眞實を言ふ」こそ無上の光榮であるとせなければならぬと說いてゐる。デルジャーキンがここで、民を憂ひ君を愛して公共のためにつとめ、「玉座の前に蛇の如く身を曲げくねらすことなく、直立して眞實を言ふ」と言つてゐるのは、その當時エカテリナの不興を蒙つて、その所領の村に體よく左遷せられてゐた剛直の貴族ルミヤンツェフのことを暗に指してゐたのであつて、この點からも、彼が阿諛のためにエカテリナの讃美の詩を書くやうな人間でな

く、いづれもそれぞれ衷心からの聲であつたことを知るに足るのである。而してまたこれ等の詩は、デルジャーキンの教訓的傾向を最もよく示してゐるものであつて、それはまた時代の一特色でもあつた。當時の廟臣中、エカテリナの寵遇最も厚く權威竝ぶものなかつたポチムキンの不慮の死に刺激せられて書いた『瀑布』といふ一篇は、彼の作中やや哲學的冥想的な特色をもつものであるが、一體にさういふ傾向の詩では、彼はいつでも地上の一切のもののはかなさと、人間の幸福の無常不安と、時と死との力には何ものも皆破壞せられて行くといふやうな思想とをうたつてゐる。彼がかういふ感懷を、森嚴にして幽暗な形象のうちに託して歌つたところの詩は、殊に力のこもつたものであるが、晩年になるほどそれが目に立つ。その死の數日前に書かれた偶感風の詩にも、時の流れは小やみなく一切の人間の事業を運び去り、王者の覇業をも悉く忘却の淵に沈めるといふやうな意味がうたつてある。『瀑布』もまたこのたぐひのものに屬する。たぎり落ちては樹の間に金剛の玉と散る瀑布は、幸運の絕頂にゐて荒野に不慮の死を遂げた權臣の運命をおもはせる。さしも生前の權勢も光榮も、一瞬の間に消えうせる。君王の廣大な領土も束の間に亡び、巨人も四大の荒ぶる前には塵となるためしにもれない。この心は『メシュチェルスキー公の逝去に際して』と題する詩にもあらはれてゐる。この詩の主題となつてゐる貴族は、生前豪奢の生活を送つた快男兒であつて、その邸內での宴樂には、デルジャーキン自から幾度か招かれたこともあつたのである。彼は時計の音に時の聲を聞き、人生の急流をおもひ浮べ、刻々人を避けがたき終焉に近づける力の迫るのを感ずる。死の無上力の前には、富貴も、榮譽も、權勢も、救ふによしなく、王者も囚人もひとしくその力に打たれ、最も豫期せざる時に人に迫る。昨日榮華の兒今何處にありや。卽ちかしこに。かしことは何處ぞ。われ等はそれを知らず。われ等は唯泣き

歎くのみ。宴楽の殿堂には棺置かれ、蒼白き死は人々を見まはす。そこに來り歎く富貴權勢の人も、秀麗聰明の人も、またやがてその死の大鎌を待つに過ぎない。人間の運命ははかなく、死の威力は絶大であるとすれば、人はその避くべからざるものに從ふほかはない。人は何れにしても死を免かれないのであるとすれば、徒らに悲しみ歎くのは無益である。生は天與の刹那のたまものである。これを安靜に過して、死を清く祝福するほかはない――デルジャーキンのかういふ一種のあきらめに似たやうな心持ちは、ただひとへに人生のもろさ、地上の生活の頼りなさを歌つたといふばかりでなく、その底に、一つの平等觀ともいふべきものを含んでゐる。死滅といふ自然の事實の前には、一切の地上の差別が撤廢せられて、「王者も囚人も」一如となるこの平等觀こそ、十八世紀の後半期に於いてヨーロッパの知識階級の間に流布してゐたところの、感傷的な人類愛の感情と相通ずるものであらねばならぬ。あからひく兒もますらをも、墓に眠ればみな一つである。人間もと同根、これを結ぶものは平等一視の愛でなくてはならぬ。即ち地上の一切の區別が、死に於いて消滅するといふことは、人間の生活の本源が、本來一つのものであるといふ宗教的人間平等觀と矛盾しない。デルジャーキンは前後數年の間を隔てて書き上げた『神』といふ詩で、神は無限の空間に遍在して、事物の運動の中に生き、劫初よりこのかた、在らざるところとてはなく、充たさざるところとてもなく、藏めざるところなく、まもらざるところなくして唯一なるものであると言ひ、深き大海原の底を測り、眞砂の數を數へ、星辰の光りをはかることは、すぐれたる知力のよくするところであるかも知れないが、神をはかりかぞへることは出來ない、人間の理性は到底神性のかぎりを窮めつくすことが出來ないと言ひ、神の偉大を說いて、その前には、宇宙の大を以てしても一塵埃の小にひとしく、晴れたる大寒の冬の日に、雪花の粉の日光

にきらめき舞ひかがやく如く、底無き空に星くづはきらめくと述べてゐる。而してもしこの限りなき變化に富める宇宙も、これを神に比べてはかくの如く微小なものに過ぎずとすれば、更に人間はどうであらう。人間とは畢竟眼に見ゆる世界に於ける神性の化現にほかならない。「ささやかな一滴の水にうつれる太陽の如く」に、人間の中には神性の影を宿してゐる。されば人間の本性は、地上のあらゆるものに眞の滿足を見出し得ずして、常に永遠の高きに向つてあこがれる。地上に肉身を有しつつ、心は天上を指し、唯一の神に往かうとする。人間の生活を、この二つの境涯の過渡期乃至つながりといふやうに見る。即ち、われは物象の窮極、われは生けるものの核心、われは神性の發端、われ肉身を以て塵と朽ち、智を以ては電雷を叱咤す、一方から見れば帝王にもひとしく、また一方から見れば奴隷の如く、蟲けらのやうにもなるが、また神そのものでもある。人間は皆神に往かうとするところに一致する――これが『神』といふ詩の說くところの大意である。而してこれ等の諸篇を通じて、一貫して見ることの出來る思想は、結局人間がその本性に於いて平等であり尊貴であつて、現世の表面の區別によつて差別を立てることの出來ないものであるといふことである。この思想は、前にも言ふ通り、十八世紀後半のヨーロッパに最もひろく流布してゐたところの一種の感傷的空想的人道主義思想にほかならない。この意味で、たとへばイギリス十八世紀の末葉の詩人（グレイその他）の詩に、人はデルジャーキンの詩と相似たものを見出すであらう。

漠然たる自由の讃美や感傷的な平等觀に心を委ねるとき、そこには、ある普遍的な眞理の支配するところの理想の世界がおのづから描き出される。而してその普遍的な眞理によつて支配せられるところの理想の世界は、あくまでも壯大にして崇高であらねばならぬ。デルジャーキンの詩がフェリツァをうたひ、死をうた

ひ神をうたふにあたつて、常にそれ等の力を偉大とし、その偉大なる普遍的な支配力に對して、心からの讃仰の念をいだいたことは、前に述べたところによつて明らかに知られるであらう。彼が頌歌の形式を以て莊重な詩風をなしたのもまた自然である。しかもその一面に於いて、意識して詩句の簡素をえらび、實生活の調子に近づけようとしたことをも見のがすわけには行かない。この傾向は、『フェリツァ』のやうな頌歌の中にも隨處に見出すことが出來る。輕妙な、おどけたやうな、くだけた俗談平語風の詩句が、口をついてすらすらと出て來るところが少くない。殊に、田園のかざりない靜かな生活のたのしさをうたつたやうな、人に宛てた書簡風の詩などには、よそ行きでない氣輕な調子のものが多い。デルジャーキンの自然描寫は、ロシヤの詩にあらはれた最初の特色であつて、その簡潔な力强い點を見落としてはならぬのであるが、自由平等の理想に動かされたこの時代の詩人たちが、ロシヤばかりでなく、いづれも皆田園自然のうちに眞の心の安住を見出し、自然の姿に新たな興味を感ずるやうになつて來たといふ事實は、田園自然と最もかけ離れた關係にあるところの宮廷貴族の權威や好尙が、漸く時代の心を支配し得なくなつて來たといふ社會的變動とおのづから相關聯するものと言へるであらう。デルジャーキンは、十八世紀のロシヤ詩人中最もすぐれた天分を持つてゐたといふばかりでなく、ロシヤ文學史上の最初の眞の抒情詩人であつた。彼は十八世紀のロシヤに於ける、唯一の本當の意味での詩人であつた。或は時代に對する啓蒙諷刺のために、あるひは宮廷の祝祭を莊嚴にする爲に、詩といふ形を利用して言はんと欲するところを言つたといふロモノソフやカンテミールのやうではなく、衷心の感懷が外部の事象にふれて自のづから詩となるに至つたのである。外部の直接の目的のために詩が作られたのではなかつたのである。ロモノソフなどの場合では、一定の直接の目的卽ち當時

の人々の蒙をひらくといふやうな實用的の目的があつたのだが、デルジャーキンの場合では、必ずしもさういふ直接の實用目的はなく、ただ衷心の感懷を抒べたといふのにとどまる。後の場合を普通に詩が獨立したといひ、純粹の詩と言ふのである。この二つの關係は、文學がある思想の宣傳のために用ひられてよいか惡いかといふやうな問題ともつながりを持つてゐるのであるが、要するに、時代がその生活理想について一定の共通の理解にまで到達しない間は、文學も自のづから啓蒙的實用乃至宣傳的ともならざるを得ないのであつて、その共通の理解が何ほどか進みひろがるに從つて、文學もまた必ずしも啓蒙的實用的乃至宣傳的な直接の任務に束縛せられなくなるのである。デルジャーキンが純粹の詩人らしくなつたといふのは、彼の時代が、それだけ周圍との戰ひ卽ち啓蒙の必要から何ほどかでも解放せられて、自分たちを理解する仲間が多くなり、小さいながらも知識階級の社會といふべきものが出來て、文學がその仲間の人々の間で存立することの出來るまでになつたといふことを示してゐるのである。それはとにかく、デルジャーキンは、これを前にしてはロモノソフを受け、これを後にしてはジュコーフスキーに至るロシヤ詩の發達の中間に立つて、一面擬古ぶりからの解脫のために、また他面新感傷的理想主義のために、素朴と眞實と自然との目標を揭げ示した最初の詩人であつたのである。十八世紀の劇作家としては

17　フォンキージン（一七四五――一七九二）がある。彼の青年時代の生活については、『わが行動と思想との正直なる告白』と題する自傳によつて知ることが出來るのであるが、その時代に於いて、ルソーの『懺悔』にならつてかういふものが書かれたといふ事實には興味がある。彼の父は貧しい貴族であつたが、わが子の敎育には熱心で、創設せられたばかりのモスクワ大學附屬ギムナジヤに彼を入學せしめた。フォンキー

ジンは少年の頃から機智に富み、文華の才を示した。十七歳の時大學を半途で退いて外務省に入り、專ら飜譯の仕事を勤めた。從つて彼の文學上の仕事も、最初は飜譯や改作に過ぎなかつたが、千七百六十六年に最初の喜劇『ブリガディール』(少將に當る軍職の名)を書き、エカテリナその他の前で作者自から朗讀し、その朗讀ぶりのすぐれてゐるので、殊に好評を博し、彼の文名は忽ちにあがつた。外務大臣パニンの信任を得て、外交文書や報告や原案の作製にあづかり、皇儲傅育の恩賞の一部をパニンからその祕書官たちに分つに及んで、フォンキージンもまた千人以上の農奴を有する莊園を與へられ、物質上のゆとりが出來るとともに、病妻を伴つて外遊の旅に上り、專らフランスにとどまつた。フランスの見聞はその多くの書簡に記されてゐるが、主として生活の暗黑面裏面を觀察し、缺點を指摘したものであつて、彼の才分の特色はこのところにも現はれてゐる。彼はその旅行の全體の印象として、外國の旅行が、母國の缺點に對して寬大であるべきことを敎へたといひ、何處にもよいことよりは惡いことがはるかに多く、人間はどこでも人間であつて、賢い人は稀であるが、馬鹿な人間はありあまるほどある。必ずしも外國をうらやむには當らない。ロシヤが外國よりわるいとは思へないといふ意味のことを言つてゐる。千七百八十二年には第二の喜劇『青年』が上演せられ、非常な好評であつた。千七百八十八年の頃、彼は『スタロドウーム』(保守家の意)といふ名前の諷刺雜誌を刊行しようと企てて、ノヰコフ式の諷刺文を書き、その中で當時のフランスかぶれの敎育や、裁判の不法や、ノイカラ青年男女の風俗などを諷刺したのであつたが、もうその頃はエカテリナの思想傾向もその初期の頃とは違つて大分反動保守的になつてゐたし、フォンキージンの書いた諷刺で直接宮廷の生活に對するものなどはエカテリナの不興をかつてもゐたし、かたがたその雜誌の發刊は許可せられなかつた。彼の晩

年は失意で、病弱で、それでゐて持ち前の皮肉はかはらなかつたと傳へられてゐる。千七百九十二年、四十八歳でペテルブルグに歿した。

彼は十八世紀のロシヤ文學に於ける風俗喜劇の代表的作者であつた。この方面ではフォンキージンのほかに、スマローコフとルーキンとの二人があるが、スマローコフの喜劇は專ら外國の模倣であつて、ところどころにロシヤの人物も出ては來るが、場面も人間もフランスのかりものが多かつた。それに比べると、ルーキンは喜劇についても一家の見識を持つてゐて、劇場と人生との接近を說き、劇場が國民的性質を帶びて來て、はじめてその使命たる社會の道德的改善のためにつくすことが出來ると言ひ、外國の模倣を排して、ロシヤの現實生活から劇の內容を採つて來なければならぬと主張してゐる。尤もロシヤ文學がまだ十分に發達してゐないから、今暫くの間は、主題や人物の性格などを外國ものから借りることは已むを得ないが、その代り出來るだけそれをロシヤ風に作りかへる工夫をしなければならぬと附け加へてゐる。ルーキンは喜劇が現實に接近しなければならぬといふ主張に於いて、ロシヤ喜劇の往くべき道を正しくは示してゐるのであるが、彼自からは劇作家としての天分に乏しく、その理想を實現する力を持たなかつた。劇と人生とを接近せしめて、ロシヤの現實を活寫した風俗喜劇の作品を生み出だすことは、フォンキージンに於いてはじめて實現せられたのであると言つてよい。フォンキージンの喜劇作家としての聲價は、『ブリガディール』と『未丁年』との二篇によつて定められてゐるのであるが、この二篇は、エカテリナ時代のロシヤ貴族の生活の實狀を暴露したものとして、ロシヤの現實から生れた最初の喜劇として注目に値ひする。

『ブリガディール』はその當時に於いても、ロシヤ生活を描いた最初の喜劇として、典型的な人物を描い

た喜劇として好評を博した。この作に出て來る典型的な人物は凡そ新舊二つの型に分れてゐて、たとへば粗傲な暴君的な老父を舊時代の典型とすると、えせハイカラの息子が新時代の典型で、いづれもさまざまの弱點を暴露してゐるのである。この喜劇の中心人物はその新時代的典型のイワヌシュカで、その頃の上流社會では、ひとりロシヤばかりでなく、フランスかぶれのしてゐる國では、到る處に見られた生ハイカラの青年である。この種のタイプは、カンテミールやスマローコフの諷刺劇にも、ノヰコフの書いたものの中にも取り扱はれてゐるのであるが、フォンキージンのこの作に至つて最も鮮やかに描かれたわけである。イワヌシュカは當時流行のフランス人の經營する塾に入學したのであるが、その塾の先生といふのは、フランス人はフランス人でも、もとは廚者をしてゐた男であつた。外國人殊にフランス人とさへ言へば、何でもかでも有りがたがるのが即ちその當時のフランスかぶれであつた。その後イワヌシュカはパリに遊學したが、何一つ學んでは來ず、ただ上つらのハイカラになりすまして、ロシヤ的な一切のものを侮蔑厭惡し、自分がロシヤ人として生れたことを悲しみ、身はロシヤで生れても、せめて心はフランスのものであると思つて自から慰め、フランスの事物といへば極端に無選擇に模倣し、父親を戀敵として決鬪したといふ例が嘗て唯一度パリにあつたといふので、自分も是非それを眞似ようとしたりする。勿論兩親は舊弊固陋として尊敬などは少しもせず、自分の父は結婚前には惡靈などといふものはないと信じてゐたのだが、自分の母と結婚してからは、やはりそれの存在を信ずるやうになつたさうだなどと平氣で口外する。また、フランスの啓蒙思潮の上つらにかぶれて、人間は凡て平等だから親を尊敬する必要などは少しもないと父親に喰つてかかる。この作は當時の上流社會に共通の典型的な人物を描いてその弱點を暴露したものとして、ロシヤ喜劇の先驅をなすもの

であるが、筋の運びに無理もあり、誇張もあり、わざとらしさのあることを免かれなかつた。その點で次の作『未丁年』は一段上に置かれる。この作の中心人物はプロスタコワ夫人であるが、その性格の描寫には一層多く現實性が見られる。かの女は家庭の暴君で、夫もその前には頭が上らない。かの女の成長した時代の環境は、教育とか訓育とかいふことを全く缺いてゐたところの地主貴族階級の家庭であつた。そこでは知識や學問に對する心底からの反感と憎惡とがあつた。「學問しなくとも昔から人は生きても來たし生きてもゐる」といふのが、學問を無用とする夫人の常識で、若い女の子が人から手紙を貰つて讀んでもゐれば、「女の子に手紙を書いてよこすなんて！　女の子のくせに文字が讀めるなんて！　私たちはおかげでそんなしつけはされなかつた、手紙を貰ふこともあらうが、それは人に命じて讀ませればよいことです」と言ふのであつた。自分の息子に多少の學問をさせるのも、學問がなくては官途に就けず人中へ出られないからのことで、とかく母親自から息子の勉强の邪魔をして教師と口喧嘩をしたりするのである。この無知と、下々のものに對する暴虐殘酷な仕打ちとの中に在つて、ただ一つプロスタコワ夫人の眞實な情のあらはれは、わが子に對する盲目的な動物的な愛である。ミトロファンといふ『未丁年』（年少の貴族の子弟が豫め官途を志望して申し込んで置き、二十歳になつて初めて實際の勤務につくといふ習慣があつた。その未丁年時代の官吏志望の貴族の子弟を特に未丁年と呼んだのであつた）は、かうして甘やかされて育てられ、十六になつても乳母がつき切りになつてゐるといふ狀態で、なまけもので粗傲で、自分の利害にだけは敏感で、母親の愛も身にしみては感じないやうな人間に出來上つてゐる。ミトロファンとその母のプロスタコワ夫人との二人の人物は、この喜劇の中でも最も鮮やかに描かれてゐて、エカテリナ時代の田舍の地主貴族の生活はこの二人を中心と

して典型的に表現せられてゐると言つてよい。後に十九世紀の初めになつてグリボエドフの「聰明の悲み」の出るまでに於ける、恐らくは唯一の力ある喜劇であつた。

ロシヤ無産階級文學の發達

一

無産階級文學の發生發達と、無産階級政黨の發生發達との間には、一つの共通の原則が行はれてゐるやうである。無産階級政黨が、勞働運動と社會主義との一致握手の結果として發生するものであるといふことは、エンゲルス、カウツキー及びレーニンなどの既に言つてゐるところであるが、この原則は、無産階級文學の場合について見ても、同じやうに當てはめられる。前後一貫した系統的の無産階級文學がロシヤ文學の上に現はれて來る以前に於いて、無産階級的ではないが、社會主義的ではあるところの文學は、既に久しく存立してゐたのであつた。ロシヤの革命的インテリゲンツィヤの間に、ユートピヤ的な空想的な社會主義思想のひろがつて行つたのは、十九世紀の三四十年代のことであるが、それと同時に、文學の方面にも、ユートピヤ的社會主義思想を表現したものが出て來たのである。詩人としてまた社會評論家として知られてゐる亡命客オガリョフ（一八一三——一八七七）の如きも、ロシヤに於ける最初の社會主義者の一人として、社會主義詩人とは言へるが、無産階級詩人ではない。六十年代には、ハイネ、ロングフェロウなどの翻譯者として

知られてゐるミハイロフ（一八二六――一八六五）があり、七十年代には、農民革命運動に参加した多くの社會主義的インテリゲンツィヤの詩人がある。即ちラウロフ（一八二三――一九〇〇）、ニコライ・モロゾフ、ウェーラ・フィグネルなどがそれである。八十年代には、詩人ヤクーボキッチがあり、小說ではウスペンスキー（一八四〇――一九〇二）、劇ではサルトゥィコフ（一八二六――一八八九）がある。社會主義的インテリゲンツィヤの本流からはやや離れてゐると言はれてゐるが、尙この潮流に近く立つものに詩人ネクラソフ（一八二一――一八七七）がある。これ等社會主義的インテリゲンツィヤの文學は、八十年代の終りに出たの政治的壓迫によつて殆どその光りを失つたかの如く見えた。これに代つたものは、八十年代の終りに出たシュクーレフ、ネチャーエフなど勞働者の詩歌である。勿論、この時代の勞働者詩人は、階級的自覺を有するプロレタリヤ詩人といふわけには行かない。その出身境遇こそはプロレタリヤートに屬するが、その最初の頃の詩は、爭鬪の意志をうたふよりも、寧ろ信仰と勤勞とによる他日の幸福を期待するやうなものであつた。かやうにして、一つは社會主義的感情はうたつてあるが無產階級的でなく、今一つのこれに代つたものは、勞働者の詩ではあるが社會主義的ではなかつたのである。この二つのものが、九十年代に至つて、漸く一つの無產階級的なものに融け合はうとするに至つたのである。

II

その出身に於いてはインテリゲンツィヤに屬しながら、社會主義者として、勞働者の立ち場に立つところの最初の無產階級的詩人と見られるものは、九十年代の半ば頃に出たラーディンである。彼の詩の多くは、靜かに書齋で吟誦すべきものといふよりは、寧ろ勞働者の集團の中でともに合唱すべきものであるが、同じやうな傾向を有する、同じインテリゲンツィヤ出身の社會主義詩人ミハイロフが、六十年代に於いて書いたところの詩には、

あはれな打ちすゑられた民衆は、
うめき且つ重くためいきつき、
兩手をわれ等にさしのべ、
われ等に助けを呼ぶ。

とあつて、「われ等」とは言ふまでもなくインテリゲンツィヤを指し、それと民衆との間に距離があることを明らかに示してゐる。それに對して、ラーディンの詩には、

われ等皆民衆より出でたり、
勞働の家の子等……。

と言つて、インテリゲンツィヤではあるが、やはり同じ民衆の仲間に伍して、爭鬪の列に加はつてゐることを語つてゐる。この二つの差は六十年代の知識階級的社會主義から、九十年代の勞働運動への推移を示すものとして意味をもつ。ミハイロフは社會主義的インテリゲンツィヤの代表者として、「あはれな打ちすゑられた民衆」から「助けを呼び」かけられるものとして自分を感じてゐるのであるが、ラーディンは、自から

無産階級の戰士として、その同一戰線に自分を置いてゐる。民衆を自分以外のものとして、その民衆から、「助けを呼」び求められると感ずるのと、民衆の仲間に身を置いて、「われ等皆民衆より出でたり」と感ずるのとは、全く違つた二つの世界觀に基いてゐると言つてよい。ラーディンは、インテリゲンツィヤ出身であつて、無産階級の立ち場に身を置いた最初の詩人であつたのである。『インテルナチョナール』の翻譯者ダーニンとか、タラソフなどは、千九百五年に出たこの種類の詩人であつた。勞働者出身でありながら、無産階級意識に目さめてゐなかつたシュクーレフ、ネチャーエフなどの詩人たちも、九十年代からの勞働運動の刺激によつて漸く階級的自覺を持つやうになり、千九百五年の第一革命の頃には、

われ等は鍛冶工、心は若し。
幸福の鍵をきたへん。
重き槌よ高くあがれ、
鋼の胸に尙强く打て！

と言つて、その戰鬪的氣分を高調するに至つたのである。かやうにして、今から八十年以前には社會主義的インテリゲンツィヤの中からの最初の詩人が出で、四十年以前には最初の勞働者詩人が出て、別々に現はれて來たこの二つの流れが漸く一つに融け合ひ、無産階級文學の流れとなるに至つたのである。

多少とも組織的な形で無産階級文學が現はれて來たのは、世界大戰の前、千九百十一年から十四年あたりへかけてのことであつて、ロシヤの無産政黨の機關たる『ズヱズダ』、『ブラウダ』などによつてその作品が發表せられたのである。勿論これは帝政時代のことであり、世界大戰直前のことであるのだから、この無産

階級文學が、一つのひろい社會上乃至文學上の運動となるためには、いろいろの障碍があつたのであるが、それでも、もうこの時代には、一人か二人ぽつりぽつりと出て來るのではなく、小說の方面ではビビク、ペスサリコ、詩人としてはサモブィトニク、デミヤン・ベードヌィ、フィリプチェンコ、ゲラシモフなどが一時に輩出した。本來個人主義的傾向を有するマキシム・ゴーリキーは、單に都會のどん底の生活を描き且つ歌ふばかりでなく、勞働者の生活に接近し、無産階級文學の先驅と見るべき種類の幾多の作品を書いた。彼はこの當時に於いても、新らしく出て來た無産階級詩文人の先輩として保護者として、それ等の作品をあつめ、その詩文集の出版に骨折つたのであるが、この點では、千九百十七年の革命以後にあらはれた無産階級文學に對してもまた同樣にさまざまの世話を惜しまなかつたのである。この時期は、勿論革命の準備時代であるが、しかし勞働運動全體の上から見ても、無産階級文學運動の上から見ても、歷史上重要な意味をもつてゐる。この時期に於ける無産階級文學は、サモブィトニクがその詩の中で言つてゐるやうに、最初の「よろこびの呼吸」に過ぎず、「最初の靑みの發芽」に過ぎないのであるが、しかも、それはやがて來たるべきものの出立點であつた。無産階級文學が十分な發達成長をしはじめたのは、千九百十七年の十月革命以後、無産階級が支配階級となつてからのことである。無産階級藝術は、ひろく現實生活の範圍に於いて勞働者階級がその創造力を活動せしめるやうになつて後にはじめて出現する。而して現實生活の範圍に於いて勞働者階級の創造力の活動を見るのは、彼等が獨立して生活を建設創造し、社會生活の主人公となつたときに於いてはじめて可能である。

三

ロシヤに於ける無産階級文學の著しい成長發達は、十月革命後に於いてはじめてこれを見ることが出來る。十月革命以後、レニングラード、モスクワ、その他地方の都會に於けるプロレトクリト（無産階級文化本部）を中心として集つた無産階級詩文人の數は少からぬものであつた。キリロフ、ゲラシモフ、オブラドーキッチ、カージン、ボモルスキー、ベスサリコ、ロドフなどもまたその中に在つた。千九百二十年には、プロレトクリトの詩人の大部分はそれから脱退して『クーズニッツァ』の一團を形づくり、これが無産階級文學の精鋭をすべつてその中心となるに至つた。內亂時代乃至戰時共產主義時代の無產階級文學といへば、この一團をほかにしては殆ど存在しなかつたと言つてよい。この圈外に立つものは、煽動詩人デミヤン・ベードヌィただ一人であつた、

この『クーズニッツァ』を中心とする無產階級詩人の特色は、多くは抽象的であつて、具體的に現實を示すことを考へなかつたやうである。絕叫的な言葉で、大づかみに、鮮明に、革命の大事業の成就をうたひ、それに伴ふ熱情興奮をうたひ、革命の世界的意義、解放への熱狂を、概括的に、象徵的に、宇宙的な大規模で聲高くうたふといふ風であつた。この時代は、ロシヤ革命にとつて、興奮と混亂との時代であつて、落ちついて具體的に描寫し細敍してゐるいとまのないやうな時代であつた。抽象的で、宇宙的な大規模なところ

が、この時代の特色であつた。宇宙の革命とか世界の革命とかいふやうなことが頻りに言はれ、

火星の運河のほとりに
世界のコムミュンの宮殿を建てよう。

といふやうな調子であつた。

われ等は「勞働」の無數の凄い群だ、
われ等は海と大洋と大陸との廣さを征服した、
人工の太陽の光を以てわれ等は都會を燒いた、
反亂の猛火によつてわれ等の詩らしい魂は燃える。

われ等は嵐の如く熱烈なる陶醉の手中にある、
人をしてわれ等に叫ばしめよ——汝等は美の斬罪人だと。
われ等は「明日」の名によつて——ラファエルを燒かう、
博物館を毀さう、藝術の花を踏みにじらう。

われ等は壓迫する傳統の重荷を投げすてた、
生命なき智慧の妄想を蹴散らした、
「未來」の明るい王國での少女は、

ミロのヴナスよりも美しからう。

涙はわれ等の目に乾き、やさしさは殺された、
草や春の花のかをりをわれ等は忘れた、
われ等はスティームの力やダイナマイトの强さを愛する、
鐵笛(ポイヒン)の歌や輪車や軸の運動を愛する。

金屬と同化し、機械と心は融け合ひ、
われ等はためいきをついて空をあこがれることは忘れてしまつた、
われ等の望むところは、地上の一切が滿腹してゐて、
パンを求めてうめき泣く犀のきこえなくなることだ。

おお、唯美派の詩人たち、偉大なハムをのろへ、
われ等の踵の下の過去の破片に接吻せよ、
設された殿堂の廢墟を涙を以て洗へ、
われ等は自由だ、われ等は大膽だ、われ等は異なる美を呼吸してゐるのだ。

われ等の腕の筋肉は巨大な勞働に飢ゑてゐる、
集團の胸は創造の愁に燃えてゐる、
すばらしい雲で蜂房を上まで充たさう、
われ等の遊星のために別のかがやかしい軌道を見つけよう。

われ等は生活を愛する、その陶酔せしめる嵐のやうな歡喜を、
物凄い闘ひで、苦みで、われ等の精神は鍛へられてゐる、
一切がわれ等だ、一切の中にわれ等がある、われ等は焔であり征服する光だ、
自から神性で、審判者で、法である。

キリロフの『われ等』と題するこの詩こそは、この時期を代表する無産階級詩の特色をあざやかに示してゐる。この時代は前にも言ふやうに革命の嵐と混亂との時代であつた。この時期に於いてたとひ具體的に事實を細敍したものが出ても、それをゆつくりとは讀んでゐられないやうな時期であつた。また實際さういふものを書いてはゐられなかつた。この詩の示すやうな興奮を以て、概括的に、抽象的に、世界的宇宙的に革命の力を讃へる時期であつた。われ等の遊星即ち地球のために、別に新らしい軌道を見出ださうとするまでに宇宙的革命的の興奮のうちに在つた。

四

しかしこの興奮の時期は久しくは續かなかつた。千九百二十一年とともに革命の新陣營は布かれ、新經濟政策が實施せられることになつた。この新經濟政策が無産階級文學に及ぼした影響は悲劇的であつた。赫々として燃えるやうな、廣大な都會の、鳴りひびく雜音の渦卷の中で、「やがて來るよろこばしい時代の歌」を耳にしたキリロフが、今はその同じ都會に向つて、「永久に魔法にかけられた、みじめな無體講騒ぎ」と呼び、同じく無産階級詩人オブラドーキッチは、

かつては燃えさかりし心の上に、
半ば消えたる蠟燭の餘煙。
誰ぞかしこに、道なき靄の中に、
わが滅亡を叫ぶは誰ぞ。

と歌つたりしてゐる。これ等はいづれも、新經濟政策とともに無産階級文學の上に來たところの危機を語るものであつた。内亂や戰時共産主義時代に於いては、一切の苦痛や窮乏に拘らず、強い興奮があつた。緊張があり燃燒があつた。さまざまの危險や飢ゑや寒さの中に在つて、人々は世界革命の大使命を負うて立つ誇りを持つてゐた。しかし今や革命は新らしい時期に入り、長い、退屈な、質朴な、困難な、しかしながら

重要な時期が始まつて來た。かがやきのない、目のさめるやうなところのない、灰色の日常生活が始まつて來た。詩人はこの平凡單調な生活のうちに、更に深く革命の意味を探り求めなければならなかつたのである。しかしながらこれは、革命の最初の興奮の日に於いて、ロマンティクな感激を以て、宇宙的規模を以て、抽象的に熱情的に革命をうたふよりも、はるかに困難な複雜な仕事でなければならない。この革命の轉機に際して、革命が示した新容に對して意氣沮喪したものはキリロフ、ゲラーシモフ、オブラドーキッチその他の詩人であつた。彼等はこの革命の轉機に際して、革命の底に潜める深い意味を探り來ることが出來なかつたのである。革命の新しい陣營が立てられるとともに、文學の方面に於いても、おのづから新陣營が布かれなければならないことを、新しい文學上の態度が、立て直されなければならないことを、彼等は明らかに認めることが出來なかつたのである。そこで、一方では依然として革命の興奮をうたひ、抽象的な熱情の表白を試みようとする立ち場にゐながら、一方では内心の眞實をいつはらずに言はうとすればするほど、その本當の心持ちは、深い失望と疲勞との感じを包みかくしきれないことになつて來たのである。そこに蔽ひがたい矛盾がある。革命の初期に於いては、一般的な革命の興奮と、詩人個々の内心の心持ちとは全く同一性質のものであつて、何の疑ひもなくその間に一致があつた。この二つはおのづから融合して統一ある熱情の詩となつた。それだから、その一般的な革命の興奮は、たとひ抽象的な概括的なものではあつても、そこに一つの氣分のまとまりがあり、中心生命があつた。今は、内心の眞實な心持ちに失望と疲勞とを感じながら、つとめて革命の感激をうたはうとする努力が感ぜられた。外界には、もう革命の初期に於けるやうな一般の興奮は見られなくなつた。その感激はこれをつとめて探し見出して來なければならない。そしてその感激を自